

勝手にド葛本社

めーけろー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

毎日夜遅くまで残業をこなしている『社築』。人間界に興味があつて来た『ドーラ』。築の一人娘の『ひまわり』。魔界の吸血鬼一族の末っ子『葛葉』。この4人の家族の様な絆を描いたストーリーです。

目次

- 第一話「出会いは突然に」(社編) 1
- 第一話「出会いは突然に」(ひまわり編) 10
- 第一話「出会いは突然に」(葛葉編) 26
- 第一話「出会いは突然に」(ドーラ編) 45
- 勝手にド葛本社 第二話「これからの生活(前編)」 58
- 勝手にド葛本社 第三話「これからの生活(後編)」 75
- 勝手にド葛本社 第三・五話「もう一方の夜」 99
- 勝手にド葛本社 第四話「再開と信頼」 115
- 勝手にド葛本社 第五話「午前中」 158
- 勝手にド葛本社 第六話「午後」 189
- 勝手にド葛本社 第七話「事件」 217
- いつも「勝手にド葛本社」を読んでくださっている皆様へ。 247
- 勝手にド葛本社 第八話「大事なこと」

287 勝手にド葛本社 第九話「戸惑い」 250

第一話「出会いは突然に」(社編)

社「もうこんな時間か…。」

気づけば時計が0:00を過ぎ、1:00になりかけていた。私は電車通勤でもないためいくらでも残業ができるのだが、そんな事はしようとも思わない。家は近いわけでもないが電車を使うほどでもない。毎日歩きで帰っている。

会社に残っているのは私一人だけなので、おおまかな見回りや戸締りを確認して、後は警備室にカギを置いて帰るのが流れだ。

社「ふう、この季節のこの時間は冷えるな…。」

気づけば秋も過ぎ冬が訪れかけていた。風も冷たく、防寒着が欲しくなってくる。家までは1時間ちよつとで着くが、今日は帰り道のコンビニに寄りたいたい気分だ。あつたかいコーヒーが飲みたいのだ。時折、冷たい風が頬や耳に当たって震える。私が冬が好きじゃない理由はこれだ。帰ったら娘が作っておいてくれた晩ご飯がある。あまり寄り道をして帰りたくはないが、今日は寒いから耐えられん。そんなことを思っているうちに最寄のコンビニへ着いた。

社「はやくコーヒーを買って帰ろう。腹も減ってきた。」

私は温かいコーヒーが置いてある棚の隣にある美味しそうな弁当を横目にレジへ向かう。

ふと耳に店内放送されていたラジオが入ってきた。これからの天気や現在の気温などを話していた。ラジオによれば、現在気温は2。らしい。どおりで寒いわけだ。

会計を済ませ、店の外に出る。車も少なくなり、暗く静まった町が妙に心地よい。私は缶コーヒーを一口飲んだ。

社「……はあ、染みるわ。やっぱし寒い日のコーヒーは最高だな！」

私は缶コーヒーを一口飲んだだけに寒く感じて来なくなってきた。体がどれだけ冷え切っていたのだろうか。しかし、そのホツトな気持ちはだんだんとおかしいと感じ始めてきた。体の芯が暖かいのではなく体の外、主に頭上が特にあったかいのだ。私が飲んでいる缶コーヒーにこんな効力はない。何かがおかしい。そう感じてきた時、妙に暖かいと思っていた頭上から声が出た。

？「それはそんなに良いものなのか、人間？」

周りには誰もいないので私に話しかけている、一瞬でそう判断した。しかし、なぜ上から声がするのか、私はそんな疑問を抱きながら恐る恐る上を見上げた。

そこにいたのは真つ赤な髪と目をした女性だった。しかし、どことなくおかしい部分がある。まず服装。マグマのようなウロコのようなゴロゴロした見た目の服。この時

期には絶対寒いであろう格好だ。次に頭になにか2つ付いているのだ。ツノのような突起物が。容姿を観察していると、その女性からまた話しかけられた。

？「どうした、何かおかしいか？見た目は人間と同じだろう。」

私は理解するには何か話さなければ、と思った。

社「あ、あの、なんでコンビニの屋根の上にいるんですか？」

とつぎに出たのは簡単な問いだった。他にも聞きたいことはあった。が、頭が回っていなかった。不思議そうにこちらをずっと見ていた女性が動いた。

？「よつと、人間は屋根の上には乗らないのか。」

軽々と身を操り2〜3m上から降りてきた。降りてきた彼女をもう一度見ると、とても魅力的な容姿をしていた。私はただ見惚れることしかできず、そこに立っていた。

そして不思議そうにこちらを見ている女性は、気まづくなつたのか色々話し始めた。

？「なあ人間。お前さんにここを案内してもらいたいのじやが、どうだ。わしもここに来たばかりで行くところもなければ、住む場所も友人もないのじや。そこで近くにあつたこの明るいところにおつたのじや。」

女性は普通の人間とは違うような、人間らしからぬことを聞いてくる。より一層、不信感を得た。とはいえ、会話を続けるためにこちら色々聞く。

社「とりあえず、名前を聞きたい。私は社築だ。」

自分の素性を明かせば、おのずと話してくれるだろう。

？「そうじゃな、申し遅れた。わしの名前は『ドロー』じゃ。」

紅い眼で私を見つめ、抑揚のある声だった。

社「ドロー：日本人じゃない、のか。もしかして外国人とかかな？」

ド「外国といえは外国なのじゃが：まあそれでも良いか。」

ドローは社が思つた通り、相手が話しやすいことを話題として話せば自然と会話が始まつた。しかし、このドローという人に対し不信感しかない。ここはいつそさりげなく帰ろう。

社「そ、そうなんですネ…！あつちよつともうこんな時間なので私帰りますネ！時間も遅いので気をつけてください！それでは…!!？」

ド「うん？あ、ちよつと待て！にんげ：社築!!？」

私は猛ダツシユで家に向かった。わざわざ遠回りをしたためか、思つたより疲れた。歳を取るのがこんなところにも影響してくると思つてなかつた。

社「はあはあ：結局誰だったんだろう？ドローとか言つてたが。まあ彼女もどうにかやつて行くだろう。」

変な事があつたせいで時間は3：00を過ぎていた。娘は完全に寝ているだろう。今日はいつもより疲れた。あの女性がかかるが、今日はもう寝よう。私は家の鍵をカ

バンから取り出し、鍵を開けた。

ガチャ：

ド「1番重要なことをわすれておったわ！社築!!？」

私は思わず言葉を失った。まさかいるとは思ひもしなかつたからだ。

社「ええええええええ!!??!!??!!??い、いやなんで家の中にいるんですか!!??まさか泥棒だつたりして…。」

ド「待て、違う！お前さんの娘に入れてもらつたのじゃ!!??」

ん?てことは『ひまわり』が入れたのか!!??

ひ「あ!パパお帰りなさい!!!」

深夜というのにいつもと変わらない無邪気な声と笑顔で私を迎えてくれた彼女こそが、私の一人娘のひまわりだ。

ひ「このドーラっていう人がパパのお友達つて言つてたからお家で待たせてたの!」

ああ、この無邪気な声で言われたら許してしまいそうになる。だが今回はダメだ。

社「…ひまわり、よく聞きなさい。今回は何も害はないけど、もしこれが泥棒とか悪い人だつたらどうする?今度からはちゃんと…」

私は少しだけ注意のつもりで話していたのだが、ひまわりの顔を見てみると…。

ひ「うう、パパあゝごめんなさい…。」

今にも泣きそうな顔をしていた。これには私の心が耐えられなかった。

社「よ、よしひまわり！分かれればいいんだ。次から気をつけてな……！」

ひ「うん、ごめんなさい。パパ。」

流石我が子。良い子過ぎて尊い。ああ、昇天しそう。

ド「ところで、わしのことまた忘れてたじやろ？」

社「スウー、いやそんなことないですよ？ちゃんと気付いてました。」

そういえばドーラさんいたんだった。私とひまわりが話している間、何か訴えているような目を私に向けていたような気がする。

社「ああそういえば……では本題を……スウ」

意識が遠のいて行く。一安心したせいか、ドツと疲れが来てしまった。私はドーラさんの話を聞く前に、深い眠りについてしまった。

久しぶりにぐっすり寝れた。気づけば自分のベットの上だった。ひまわりが運んでくれたのだろう。まるで二日酔いのように昨日の記憶が曖昧だ。それほど疲れていたのだろうか、今日の目覚めはとても良い。連日の残業の疲れが全てきれいに取れている気がする。私は不思議だと思いつながらベットから起き上がり、いつも通り準備をしよう

うとしてふと時計を見た。寝ぼけてでもいるのだろうか。何回も目をこすつても10:00にしか見えない。今日は土曜日だが普通に仕事がある。ちなみに出勤時間は8:00だ。まあつまり、大・遅・刻☆

社「やつつつつつべえええ!!!大遅刻じゃねえかー!!!」

せつかく疲れが取れたのに朝からまた疲れてしまう。これでは意味がない。とにかく今は急がねば!私はいつも通りスーツに着替えて、鞆に荷物を入れ出社する準備をした。あとは顔を洗つて、歯を磨いて会社に行くだけだ。ああ、嫌な上司の顔が浮かぶ。この歳で遅刻で怒られるのは嫌だな。

社「ふう、ところでひまわりとドーラさんはどうしているんだろう?」

まあいい。今は出社が最優先だ。私は顔を洗いに部屋のドアを開けた。そこには見知らぬ青年がいた。

?「……………おはようございます?」

社「……………ああ、おはよう。…いや、誰だお前?!?」

頭が回らなくて、普通に会話してしまつたが誰なんだ。こんな銀髪の赤い目をした青年なんて見た事がない。だが、なぜここにいるんだ?その先はひまわりの部屋だが…まさか?!?

?「ツスーーーーー…いや、あのくえつと、ですねえ…。」

なにやら言葉に詰まっている。なにか隠してでもいるかのような…。ひまわりの親として、色々聞かなくてはならない。

社「君はなんでそこに…」

私が質問しようとした時、自室から慌ててひまわりが出てきた。

ひ「ちよつと葛葉くん！ひまの部屋からで出ちやダメだつて…あ、パパ…」

最悪の空気だ。娘とその彼氏らしき男が朝、娘の部屋から出てきたところを偶然見ってしまった気分だ。ああ、今日は会社休もう。私はひまわりとその青年をリビングに来るように言つて先に降りた。顔を洗い、気持ちを整え2人を待った。そして降りてきた2人をリビングにあるテーブルに2人を座らせた。まずはひまわりから話を聞こう。

社「ひまわり、この青年は誰なんだ？」

ひまわりは少し黙り込んでから話し出した。

ひ「えくとねえ、話すと長くなるんだけど良い？」

ひまわりは少し真剣な顔をした。私はこれは大事な話なのかと思ひ心の準備をした。ひまわりのこんな顔は初めて見た。

社「構わない。仕事は休んだからな、時間はたくさんある。」

ひ「じゃあ…」

ひまわりが話始めようとした時。

ガララッ!

ド「人間の『ふとん』というのにはこんなにも寝心地がよいのか!!?」

ドーラさんが目をキラキラさせて、勢い良くリビングのドアを開けてきた。

ド「ん、なんじゃ。みんな集まって?」

第一話「出会いは突然に」(ひまわり編)

ドタドタ：

？「ひまわり！ 弁当できてるかあ〜？」

パパは『社築』。いつつも夜遅くまでお仕事をしてくる頑張り屋さんだ。

ひ「うんバツチリ出来るよ!!？ だけど、いつもよりお仕事行くの早くない？」

パ「そうなんだよ、今日は朝礼がある事忘れていたんだ。だからもう行かないと遅れてしまうんだ。」

朝からそんなのあるんだ。ひまは難しいこと分かんないや！

ひ「そうなんだ。気をつけてお仕事頑張ってきてね!!？」

パ「ああ。それじゃ行ってくる！」

ひ「いつてらっしや〜い！」

お弁当を作つて、パパを見送る。ここまでがひまの朝のお仕事。朝早く起きないといけないけど、パパのお仕事に比べたら全然辛くないんだ！

ひ「よしっ。ひまも準備するっか！」

学校の準備を済ませて着替えもしてたら7：30を過ぎちゃった。学校は8：00ま

で登校だから急がないと遅刻になっちゃう。

ひ「えつと、あれ持った。これ持った。うくん……まあ多分よし！行つてきまゝす!!？」
家の鍵を閉めて、学校に向かって少し小走りで向かった。

「おはようひまちゃん！」

「朝から元気だねえ！」

近所の人達にあいさつしながら近道を通つて行つた。

？「おつ？ひまちゃんやんけ！」

近道を通つて広い道に出た時、同級生で仲良しの『笹木咲』ちゃんに会つた。

ひ「咲ちゃん！」

笹「もしかしてひまちゃんも寝坊ですか？ダメダメですねえ……。」

ひ「違うよ！ひま今日も5:30に起きたもん。パパのお弁当作つて、学校の準備ゆつくりしてたら遅れたただけだもん！」

笹「ええ！ひまちゃん5:30起きなの!!？それじゃあダメダメなのはウチだけじゃん……。」

ひ「あはは！急がないと学校遅刻しちゃうよ!!？」

笹「大丈夫やよく、つてもうこんな時間やん！あ、待つてよひまちゃん！」

もう7:50頃だった。学校は目の前だけど急いだほうが良さそう。後ろでひまを呼

ぶ咲ちゃんの声が聞こえたけど、無視して校門前まで走った。なんとか遅刻はしなかったけど…。

キーンコーンコーンコーン…

学校のチャイムが鳴る。その時、咲ちゃんが校門前に着いた。

笹「あく〜あとちよつとおおお!!!」

校門前で先生に止められ叫ぶ咲ちゃんを横目に、1人教室に向かった。まだ先生は教室にいなかった。怒られずに済んだ。

そのあと先生と一緒に咲ちゃんも来て、朝のSHRが始まり1時間目、2時間目と進んで行った。

4時間目が終わるチャイムが鳴って、お昼の時間になった。

笹「ひくまちゃん、お昼一緒に食べよっ!」

授業が終わると同時に咲ちゃんが来た。

ひ「うん良いよ!」

お昼休みはずっと咲ちゃんとお喋りしてた。朝の話、最近あったおもしろ話、（主に咲ちゃんの）失敗話だとかいっぱいお話ししてた。

キーンコーンコーンコーン…

学校終わりのチャイムが鳴る。

先「おし、じゃあこれで帰りのSHR終わりな。気をつけて帰れよ。」

SHRが終わると部活に向かう人や帰る人で賑やかになる。ひまは今日の晩ご飯何にしようか考えていた。すると…。

笹「ひまちゃん、じゃあね〜!!?」

咲ちゃんが颯爽と帰っていった。

ひ「なんか急ぎの用事でもあるんかな?」

そう思いながらひまも帰ろうとしていたら。

先「笹木はいるか!!?」

先生が慌てて戻ってきた。

ひ「先生どうしたんですか!!? 咲ちゃんならさつき帰りましたよ?」

ひまがそう答えると。

先「笹木め、今朝の遅刻の反省用紙に落書き書きやがった! しかも罰として与えた仕事もせずに帰ったとは…。」

あちゃ〜。咲ちゃんらしいなあ…。

ひ「咲ちゃんがやんなかった仕事、ひまが手伝いますか?」

先「良いのか？それは助かるぞ。じゃあ本間、職員室に来てくれ。」

言われた通り、職員室に向かった。

先「じゃあ、このノートを出席番号順に並べ替えてくれるか？」

なんだ簡単な仕事かと思つたけど、量が多かつた。なんだこれ長机一個分くらいあるやんけ。でもやるつて言つちやつたしなあ。

ひ「えつと、これ全部ですか？」

先「ああ。そこに名簿があるからそれ見てやつてくれ。」

やつぱり全部かく。これは時間がかかりそうだなあ…。ひまは大量のノートを時間をかけて並び替えてやつた。なんか途中訳わかんなくなつたけど。

ひ「先生終わりました！」

先「おお！ありがとな本間。助かつた！」

疲れたけど感謝されるつて気持ち良いね！やつて良かったつて思えるよ。学校を出るともう周りは暗くなって少し寒かつた。

ひ「うう…、寒いなあ。今度から手袋とか持つてこよう。」

家に帰る前に買い物をしてから帰ろうつと。今日はあつたかいものが良いなあ…。夕飯を何にしようか考えていたら、いつもの学校近くの商店街に着いていた。

ひ「うくん、何にしようかなあ？」

お魚、お肉、たくさん美味しそうなものがあるけど、今日は時間が無いし簡単に作れるものが良いなあ。そう思ってたら。

「お嬢ちゃん！今日は野菜が安いでえ。特に白菜な！」

ひ「ほんまかあ！じゃあ今日はお鍋やな!!？」

八百屋さんが言ってた安い白菜を買ってから、他のお店でお鍋の具材を揃えた。

ひ「まあ、こんなもんで足りるでしょう！」

時刻は6：30を過ぎていた。周りはもう真つ暗に近かった。街灯が付いてきて道は明るくなってたから良かったけどね。商店街からの帰り道はお家の後ろ側を通る、少し遠回りなルートなんだ。それで、お家の裏側の道って街灯が途中からなくてお家までの道がとつても暗いんだ。ひまは毎回怖くつてさく。とか思ってたたら、もうお家までの最後の街頭が見えてきた。

ひ「もうちよつとだあ〜。」

ん〜、少し多かつたかなあ？いつもより重い物袋が重いから疲れた。

ひ「いつつも思うんだけど、この最後の街頭だけ他より明るくない？」

ほかの街灯はやる気ないみたいにも明るくないのに、ここの街頭だけめつちや明るい。そしてほかのよりちよつとだけ高い。でかい。なんでやる？

？「いつ…つ…！」

ひえ!!?びっくりした!街灯の下に誰かいた。全然気づかなかった。どうしたんだろう?ひまは気になって近づいてみた。

良く見てみるとひまくらいの歳の子に見えるけど、高校生くらいの男の子かな?

ひ「お〜い、大丈夫ですか?あれ反応がない…。」

揺すつても起きない。多分気絶してるのかも?誰か分かんないけどこのままだったら、凍え死んじやうと思ってお家に連れていこうとした。両手で買ひ物袋を持って、背中にその男の子をおんぶしてお家まで帰った。正直軽くて驚いた。家に着いてから、すぐに暇の部屋のベットに寝かせた。体がとつても冷えてたからストーブとか毛布とか出して温めてみた。でも起きなかつたから、ちよつと様子見てご飯を作ることにした。しばらくしてご飯を作り終えたひまは、一応もう一回確認しにいった。すると。

?「んん?なんか、暑い。」

と、寝言みたいなことを言つて目を開けた。

?「…ん、どこだここ?」

不思議そうにひまの部屋を見回す。

ひ「ここはひまの部屋だよ?」

男の子はひまの声に驚いていた。

?「うええー!だ、誰え!!?」

ひ「そ、そんなに驚かなくて良かったって良いじゃん！」

男の子は驚き過ぎて目がまん丸になつてた。

？「い、いや……。スウー、えーと、ここはどこなんですか？」

一旦落ち着いてから今の状況について聞いてきた。

ひ「えつとね。ひまが買い物終わらせてお家に帰る途中に、街灯の下で気を失つて

る君を見つけたの！それでひまがここまで連れてきて様子を見てたの！」

ひまはこれまでの流れを大まかに伝えた。

？「街灯の下で……。てことはさつき助けを呼ぼうとしたのは……？」

ひ「うん？なんか言った？」

？「い、いやなんでもないっす……！」

なんか言つてたよう……。まあ良いや。

ひ「あ！で、ひまはひまわりって言うんだ。君の名前は？」

男の子は少し戸惑つてた。

？「えつと、ラグー……。グ……。ザ……。く、『葛葉』……？」

男の子は葛葉と言つた。

ひ「葛葉……。この辺じゃ聞いたことないなあ。」

もしかして引越してきたのかもしれない。

ぐうう…

葛「ツスウー……。なんか良い匂いしますね。別に腹が減ったわけじゃないっすけど。なんだろう、喉でもなったのかなあ…。」

必死に隠してたけど、絶対お腹なつたやん。

ひ「さつき夜ご飯のお鍋作ってたんだけど、葛葉くん食べる？」

試しに聞いてみた。

葛「いやっ！そんな、悪いっすよ！助けてもらったのに…！」

遠慮してるけど…。

ぐうう…

またなつた。

葛「…すいません。もらって良いですか？」

やつと素直になつた。

ひ「アハハッ。最初からそういえば良いのに！ちよつと待つててね！」

ひまは出来立てのお鍋を少し分けて、葛葉くんを持って行った。

ひ「はい！どうぞ召し上がれ！」

葛「ありがとうございます。じゃあ、頂きます…。」

静かにお鍋を食べ始めた。一口食べた途端、目を丸くした。

ひ「どうしたん!? ?もしかして食べれないものあった?」

ひまが心配すると。

葛「いや、違うつす…。これ、うま過ぎて…。」

葛葉くんはとっても良い笑顔だった。パパ以外にひまの料理を食べたのは葛葉くんが初めてだったけど、こんな顔で美味しいと言われたこと無くて、ちよつと照れた。

ひ「そ、そう。でも良かった。」

安心した。葛葉くんは良い人だった。その後、おかわりを要求されひまも一緒にお鍋を半分くらい食べた。

ひ「ふう、もうお腹いっぱい…。」

葛「いやあ、美味かったつす!」

ひ「えへへっ!」

食べた食器を片付けて、ひま達は部屋に戻った。

ひ「葛葉くんはこの後どうするの?」

ひまがそう聞くと、また少し黙り込んだ。

葛「…あ、あの!俺、雑用とかするんでしばらくの間ここにいさせてもらえないでしようか!? ?」

突然の要求でひまもは驚いた。

ひ「え、家は？」

葛「当分の間、家に帰れないんです！
まさかそう来るとは思っていなかった。

ひ「ええ、でもパパになんて言えば……。」

葛「この部屋に住まわせて下さい！」

ひ「ひまと一緒に部屋……？」

パパにバレたらとんでもなく怒られそう。だけど、葛葉くん良い人そうだしなあ……。
バレなきゃ良いのか？

ひ「じゃあ、これから言うことを守るって言うなら良いよ？」

こうするしかないよね？

葛「……！良いんですか……？絶対守ります……！」

ひ「まず、ひまの部屋から出ないこと。そして、パパに見つからないこと。最後に、悪いことはしちやダメ！良いね……？」

葛「はい！大丈夫っす……！」

これで大丈夫かな……。すると下からガチャっという音が聞こえた。

ひ「……？……？パパが帰ってきたかもしれない。ちよつと静かにしてて！」

葛葉くんを部屋に居させて、玄関に向かった。どうしたんだろう。鍵無くしたのか

なあ？ひまはガチャガチャしてるドアを開けた。

ひ「パパく鍵無くしちやったの？あれっ、どなたさんですか？」

そこにはパパじゃなくて知らない人がいた。

？「社築という者を知っているか？」

ひ「知ってるよ！だつてパパだもん。」

？「社築はまだ帰っておらぬか。分かった、また出直そう。」

そう言うのと振り返つて帰ろうとした。でもパパはもうすぐ帰つて来るからなあ。

ひ「パパのお友達？パパならもうすぐ帰ってくるからお家の中で待つてて！」

ひまはパパのお友達を引っ張つて、家の中に入れた。

？「よ、良いのか？勝手に上がつてしまつて…。」

ひ「いいのいいの！パパは優しいからね！それにお友達ならだいじょくぶ!!」

多分大丈夫。

ひ「そうだ！おねえさんの名前は？あつ、ひまは『ひまわり』つて言うんだ！」

一応名前を聞いておこう。

？「わしの名は『ドーラ』じゃ。少しの間世話になるぞ、ひまわり殿。」

ドーラ？外国人かなあ、とか思つてたらまた玄関からガチャつて音が聞こえた。

ひ「パパだよドーラさん！」

ガチャ：

ド「一番重要なことをわすれておったわ！社築!!？」

パパは固まつてた。まさか家にお友達がいるとは思ってなかったっばい。

パ「ええええええええ!!??!!??!!?い、いやなんで家の中にいるんですか!!??まさか泥棒だつたりして…。」

ド「待て、違う！お前さんの娘に入れてもらったのじゃ!!??」

とりあえずひまも行こう。

ひ「あ！パパお帰りなさ〜い!!!」

混乱しているパパに状況を教えてあげた。

ひ「このドーラっていう人がパパのお友達つて言つてたからお家で待たせてたの！」

社「…ひまわり、よく聞きなさい。今回は何も害はないけど、もしこれが泥棒とか悪人だつたらどうする？今度からはちゃんど…。」

でもパパは嬉しがってなくて、少し怒っていた。

ひ「うう、パパあくごめんなさい〜。」

パパを怒らせちゃった。

社「よ、よしひまわり！分かればいいんだ。次から気をつけてな…！」

パパは許してくれたらしい。

ひ「うん、ごめんなさい。パパ。」
ちやんと謝った。

ド「ところで、わしのことまた忘れてたじやろ？」

社「スウーリー、いやそんなことないですよ？ちやんと気付いてました。」

パパとドーラさんが話し始めた。良かったと思つたその時。

社「ああそういえば…では本題を…スウ」

バタン…

ド「社築!!？」

ひ「パパ!!？」

パパが急に倒れた。ドーラさんがすぐに近づいて、パパの様子を確認する。すると。

ド「此奴、寝ておる…。」

ひ「…え？」

パパは寝てたらしい。ドーラさんがパパを部屋に運ぶために、2階のパパの部屋まで案内しひまはドーラさんの寝るところを準備していた。どうやら大事な話があるらしく、今日は泊まつて行くらしい。2階からドーラさんが降りて来ると同時に、布団の準備が終わった。

ひ「うーん、ちょっと狭いけどここがドーラさんの寝るところね！」

ひまは今日ドーラさんが寝るところの説明をした。

ド「いや十分じや。人様の家に勝手に上がり贅沢など言えんよ。それとわしからしたらこのくらいが丁度良いのじや。」

ひ「そうなの？なら良かった！ひま、もう眠いから寝るね。おやすみなさい！」
ド「ああ、おやすみ。」

なんやかんやあったから今日は疲れた。部屋に帰ると葛葉くんはひまのベットでもう寝てた。仕方ないので、ベットの隣に布団を敷いてそこで寝た。

朝起きた時、誰かが部屋の外に出て行くのが見えた。もしやと思い、ベットを見ると葛葉くんが居ない。ひまは急いで起きて葛葉くんを呼ぶ。

ガチャ

ひ「ちよつと葛葉くん！ひまの部屋からで出ちやダメだつて…あ、パパ…。」

遅かった。葛葉くんとパパがばったり会つた。あ、怒られるやつだ…。

パパが静かにひま達をリビングに来るように言つて、先に階段を降りて行つた。

ひ「葛葉くん、部屋出ちやダメつて昨日言つたじゃん…。」

葛「いや、マジで、やらかした。いつも通り起きて出ちやいましたね…。」

まあ、いつかバレると思ってたし。でも早かったなあ…。

ひ「ん、じゃあ行こっか。」

葛「そうっすね…。」

ひま達もリビングに向かった。先にリビングにいたパパがひま達をテーブルに座らせて、

ひまから質問に答えるように言った。

社「ひまわり、この青年は誰なんだ？」

ひまは少し考えてから話した。

ひ「えくとねえ、話すと長くなるんだけど良い？」

パパだけは騙せないから、今日あったことを全部言おうと思って決心した。

社「構わない。仕事は休んだからな、時間はたくさんある。」

ひ「じゃあ…。」

ひまが話しかけたその時。

ガララッ！

ド「人間の『ふとん』というのはいくらにも寝心地がよいのか!!？」

ドーラさんが目をキラキラさせて、勢い良くリビングのドアを開けてきた。

ド「ん、なんじゃ。みんな集まって？」

第一話「出会いは突然に」(葛葉編)

? 「. . .!、. . .様!」

何言ってるか聞こえない。つたく、気持ちよく寝てんのになんだよ。俺は眠い体を起こして話を聞いた。

? 「なんだ! って、『豚』かよ. . .。後にしてくれ、俺は眠いんだ。」

俺の名前は『アレクサンドル・ラグーザ』。魔界の吸血鬼の名家の次男だ。で、こいつが『豚』。いっだったか、俺ん家の庭にいたところを捕まえて俺の非常食として飼ってたんだけど、自分の身を守るために色々学びやがってさ。今じゃ、一通りの家事や言葉も喋るようになりやがった。それで気に入った母上が俺の世話係にした。

豚「ラグーザ様、急用です! 父上様と母上様からの手紙があります!」

ラ「あ? 手紙. . .?」

豚が持ってきた手紙には確かに父上と母上のサインがあつた。

ラ「どうしたんだ? だからさつきから家が静かなんだな。」

俺はその手紙を開いてみた。そこには父上からの文と、母上からの文が書いてある。2つの紙が入っていた。まずは父上からの手紙だ。『サーシャへ。急な話で悪いが私と母

は、これから魔界の次なる長を決める話し合いに出向く。そのため半年ほど家には戻らない。お前の場合、大体寝てることだろうから心配はしないが、万が一の為に豚くんから頼んでおいた。もしものことがあったら豚くんに聞いてくれ。それと兄達もいるから大丈夫であろう。しばらくの間、頼んだ。』とのこと。次に母上からの手紙。『サーシャへ。私達は、魔界の大事な話し合いに参加しなければいけなくなつたの。そのため半年間、家を開けるわ。でも特にあなたができる事はないし、大丈夫だと思うわ。豚くんもいるし、お兄ちゃん達だつているからね。安心だわ。じゃあ、後は頼んだわね。』とのこと。

ラ「えつとー？これさ、俺どんだけ心配されてないの？特に母上。もう俺宛じゃないじゃん。豚とお兄ちゃん達向けじゃん。でもまあその通りなんだけどね？なんていうか、豚とお兄ちゃん達がいるからお前は大丈夫だろって感じだったもんね。」

豚「だつて何もしないじゃないですか。」

ラ「はあ？言つたな豚？よし、朝飯お前にする。動くなあ！」

豚「え、ちよつ、ラグーザ様?!？」

ベツトから跳ね起き、豚を追いかけ回した。

豚「わあああ!!!やめてくださいラグーザ様ああ!!!」

ラ「止まれ豚！往生際が悪りいなあ?!？」

ドンっ!!?

ラ「痛っ!」

豚を追いかけるのに夢中で前にあったテーブルに頭をぶつけた。その衝撃で上にあつた紙が落ちてきた。父上達からの手紙かと思つたがまた違う俺宛の手紙だつた。

ラ「また俺かよ。今度は誰からだ?」

手紙を開く。差出人は…、まさかのお兄ちゃんからだつた。『サーシャへ。父上達がしばらく家を開けるらしいんだが、俺達も少し魔界の外に出掛けなきゃならん。というわけで家のことは頼んだぞ。』とのこと。

ラ「え、そういうことは俺以外、しばらく家に帰ってこないってことか!?!」

豚「そうなりますね…。しかし困りました。ラグーザ様一人だけとなると、やることが多くなりますが…。あれっ?」

豚が振り返ったときにはもうラグーザは自分の部屋に戻っていた。

豚「ちよつとラグーザ様!?!まだは話がつて部屋の鍵を閉めないでください!ラグーザ様あ!!?」

またちよつと寝ていた。どのくらいだろうか?まあいいや。寝ていてふと思つたことがあつたから起きた。

ラ「豚!」

ラ「文句あんなら置いてくぞ？ そんな言うなら全部お前がやればいいだろ。」

豚「それは嫌です！」

ラ「そうと決まれば早速行こうぜ『人間界』に。」

豚「何を言ってるんですか！ 人間界に行くとしても明日になりますよ？ なにせ準備があるんですから。」

ラ「はあー、マジかよ。」

豚「人間界に行く宛もないでしょうに。急には無理です。」

ラ「あー、その辺はめんどくさいから適当に探そうと思う。お前はさっさと準備して来い。遅くても明日の夕方には行くぞ。」

豚「そんな時間が足りませんよ！ 一体どれだけ滞在すると思ってるんですか!!？」
ちよつ、ラグーザ様あ!!!」

さて、俺は俺の準備をするか。とりあえず、何持って行けば良いんだ？ 人間界に行くのは良いんだけど、準備とか要らなくなけ？ という事は俺はもう準備が終わっていると言つても過言なんだな…。よし、寝よ。またしばらく寝た。起きたら豚に言っていた約束の次の日の夕方前だった。

ラ「豚！ 準備できてんだろうなあ。行くぞ〜？」

豚「はいラグーザ様。準備バッチリでございます。」

見れば大きな荷物を2、3個持っていた。

ラ「：お前それ全部持つてくの？」

豚「勿論ですけど、これでも少なくともした方ですよ。ところでラグーザ様のお荷物はどこへ？」

ラ「それが、ちよつと考えて思ったんだが人間界に行く準備つて何持つて行けば良いか知らないから実質、最初から準備は完了してるんだなつて思ったんだ。それで手荷物はない。」

俺が説明した後に豚を見てみたら、口ガン開きで驚いていた。

豚「う、嘘ですよね：？そんな馬鹿げたことしてませんよね：？」

ラ「いや、見たら分かんのだろ。俺はこれで準備完了なんだよ。」

豚「ラグーザ様！人間界に行つてどうするかも決まつていないのに、何も持つていかないなんてどうかしています！食料は？着替えは？寝床は？最初のうちは野宿ですよ！！？それに：！！」

ラ「分かつてる！でもそんなんあつち行つてからすぐ見つかんのだろ！！？第一俺は荷物を持つのは嫌なんだよ。：それと、お前。俺がまだ何にも考えずに行動してるつて思つてんだろ？」

豚「そりゃこれを見れば誰だつて思いますよ！自分勝手だなつて：。ていうかその言

い方だと、何か考えているんですか？」

ラ「当たり前まだ。分かったら付いて来い。行くぞ、人間界。」

俺は豚を連れて家を出て魔界の外れにある、とある岩山まで飛んで向かった。ここは前に家族で人間界に行った時に教えて貰った魔界と人間界を繋ぐ、唯一の入り口らしい。

豚「ラグーザ様、よく覚えていましたね。前に行った時は私に会う前でしたから、2〜3年ほど前でしようか？」

ラ「いつ来たかなんてどうだって良い。今は入り口を、ってあったわ。」
周りの岩で擬態して分かりづらいが、少しだけでかい岩が目印だって父上が言っていた。

ラ「よし、これを退けるぞ。豚、離れとけ。」

豚「え、これの裏にあるんですか？どうやって退けるつもりですか!?!？」

俺の家、ラグーザ家には吸血鬼としての能力がいくつもあるらしい。その一つに、吸った相手の特徴を一部コピーできる能力があるって聞いた。だけど俺の場合、父上から受け継いだ血だから効果が薄いっぽい。自分で吸わないといけないようだ。で、受け継いだ血の中から使えるのが「ドワーフ」の血だ。筋力が一時的に上昇する特徴がある。これを使ってこの岩を退かそうって考えた。

ラ「まあ見てろ。はあああああ〜〜…。」

豚「ラ、ラグーザ様からすごい気が!!?」

ラ「全身全霊を、この力に。滾れ、ドワーフの血! その力を借りよう。はあ!!?」

力が全身に行き届いていく感じがする。ビリビリ来る。俺は普通な感じで岩を掴んでみた。

ひよいつ、ドスン!!?!!?

ラ「え、軽っ。」

豚「え。」

驚きだわ。片手で十分持ち上げられたし、退かす事もできた。ドワーフってスゲー力持ちなんだな。

ラ「ま、まあ予想通りだったな。これで行けるぞ。」

豚「ラグーザ様に、こんな力があつたなんて…。なんで今まで隠していたんですか!!?」

ラ「ツスウー…、あれだ。疲れるんだよ、凄く。」

力自体は一回使ったら切れるようだ。自然と消えていった。

豚「なるほど。見直しましたよ、ラグーザ様!」

なんか豚からの信頼度が上がった気がする。そんな事はいい。それより、これでやつ

と人間界に行くことができるようになった。

ラ「さてと、これに入れば行けるぞ。人間界に。」

なんかモヤモヤしてんなあ、この入り口。触り心地良さそう。決意決めて入るか！

ラ「よし。行くぞ。」

豚「はい！」

俺らはその入り口に入った。中は光に囲まれてるくらい眩しかった。目も開けてられないほどの眩しさだった。これが人間界への入り口なんだな。前の記憶なんて殆ど無いから初めて通った感じがする。この時、一瞬誰かが俺の記憶の中で蘇った気がした。幼い頃に会った誰かとの記憶の一部が。

気づけば空から落ちていた。とても夕日が綺麗だった。

ラ「つて！そんな事考えてる暇ねえよ!!?なんで落ちてんだよ!」

豚「うわわわわ!ラグーザ様あ、羽開いて飛んで助けてください!!?」

ラ「あつそうか、俺飛べるのか。」

豚「だから早くお願いします!も、もう地上の着いてしまうから!」

俺は勢い良く羽を開き、飛ばたい。片手で豚を掴みながら。

ラ「ふう、危なかったな。」

豚「本当に死ぬところでした。魔界から出て早速死ぬなんて嫌ですよ。」

その通りだよなあ。でもここから見える夕日がめっちゃ綺麗なんだけど。魔界じゃ夕日自体無いもんなあ。これも人間界の良いところだよな。そもそも魔界に太陽無いしな。

ラ「さて、これからどうするかね。行く宛もないし、もう日が暮れてるから人もそんなに居なさそうだしな。」

豚「そうですね……。ところで、前に父上が仰っていたことを思い出したのですが。」

ラ「なんて言ってた？」

豚「えくと、人間界は魔界と違って魔力の温存が難しいって言っていました。ラグーザ様の場合ですが魔力が少ないのですぐに無くなってしまいます。」

ラ「なんで？」

豚「あなたがずっと寝てるからですよ！そして、我々魔族は、魔界以外では普通の状態を保つ場合に魔力を消費するんです。」

嫌な気がしてきました。

ラ「つまり？」

豚「ラグーザ様の少ない魔力では、その羽を維持する時間がとつても短いということに……。」

ラ「確かに羽が動かなくなってきた気が……、あ。」

スウーーーーー

羽が消えた。そして、俺は豚と知らない人間界のどこかへ落ちた。うつすら覚えているのはめっちゃ明るい街灯の下に落ちた事と誰かが近くにいた事。俺は声を出して助けてもらおうとしたが、思ったより声が出ずに気を失った。

ラ「いつ……っ……！」

なんだここ。俺は確か空から落ちて、街灯の下で誰かに……。夢なのか、現実なのか。っしかしなんか暑い。炎に囲まれてるくらい暑い。あ、でも力が入る。

ラ「んんん？なんか、暑い。」

ふと言葉が出た。なんだ、現実だったか。なんだこれ、何か乗ってる。重くて暑い。布で出来た何かだ。とりあえず退かして起きよう。

ラ「……ん、どこだここ？」

見知らぬ天井、見知らぬ部屋、見知らぬ人……、え？

？「ここはひまの部屋だよ？」

しゃ、喋った!!？

ラ「うええー！だ、誰え!!?」

?「そ、そんなに驚かなくて良いじゃん！」

いや驚くわ！何なんだここは。あれ、てか豚は!!?ヤベエ、人間に捕まったのか？でも、コイツまだ子供か？何か聞いてみるか。

ラ「い、いや…。スウー、えーと、ここはどこなんですか？」

やべつ、言葉迷った。

?「えつとね。ひまが買い物が終わらせてお家に帰る途中に、街灯の下で気を失つて君を見つけたの！それでひまがここまで連れてきて様子を見てたの！」

まさかの助けてくれたパータンか。感謝。

ラ「街灯の下で…。てことはさつき助けを呼ぼうとしたのは…?」

?「うん？なんか言った？」

ラ「い、いやなんでもないっす…!」

あびねえ、まだ動揺してんな俺。

?「あ！で、ひまは『ひまわり』って言うんだ。君の名前は？」

え、名前？本名はまずいか…。

ラ「えつと、ラグー…、グ…ザ…。く、『葛葉』!!?」

とっさで出た名前だが、良い名前だ。

ひ「葛葉…、この辺じゃ聞いたことないなあ。」

良かった、バレてない。俺はこれからしばらく葛葉、で生きていくか。
ぐうう…

葛「ツスウー……。なんか良い匂いしますね。別に腹が減ったわけじゃないっすけど。なんだろう、喉でもなつたのかなあ…。」

緊張が解けたら腹がなつた。絶対ごまかせてねえ。何だ今の言い訳。

ひ「さつき夜ご飯のお鍋作ってたんだけど、葛葉くん食べる？」

食べたい。でも命の恩人だぞ？まだ耐えられるはず…。

葛「いやっ！そんな、悪いっすよ！助けてもらったのに…！」
ぐうう…

あー、腹どつかで新しいのと交換できないかな。壊れてるわ、俺の腹。

葛「…すいません。もらって良いですか？」

頼むしかないじゃん…。

ひ「アハハッ。最初からそういうええ良いのに！ちよつと待つててね！」

そういうと部屋から出ていった。

葛「さて、今のうちに再確認しようか。まず、俺は魔界から人間界に来て、魔力が無くなり空から落ちて気を失った。気づけばここにいて、ひまわりさんに助けられてい

た。そして豚が行方不明、と。」

まとめると、俺が助かったのステエ偶然じゃね？見つかつてなかったら今頃死んでたり、他のところに運ばれてたりしてるかもだし。ひまわりさん、感謝。まとめ終わったときに、ひまわりさんが帰ってきた。

ひ「はい！どうぞ召し上がれ！」

葛「ありがとうございます。じゃあ、頂きます…。」

そういや、母上と豚以外の料理食った事ないな。人間の飯、どんなもんだか…。

ハムツ

食べた途端、思考と動きが一瞬停止した。

ひ「どうしたん?!?もしかして食べれないものあった?」

話しかけられて意識が戻った。

葛「いや、違うっす…。これ、うま過ぎて…。」

なんだこれ。今まで食ったなかで一番旨い。母上の料理が不味いわけじゃない。それを超える旨さだった。具材の美味しさが全部出てて、噛めば噛むほど味が…。旨すぎるこれ。

ひ「そ、そう。でも良かった〜。」

食べる手が止まらない。おこがましかったがおかわりを頼んでみた。そのままひま

わりさんも食べ始め、満腹になる頃には鍋が半分無くってしまったらしい。

ひ「ふう、もうお腹いっぱい。」

葛「いやあ、美味かったっす！」

ひ「えへへっ！」

食べ終わった食器を片づけて部屋に戻った。

ひ「葛葉くんはこの後どうするの？」

ひあまわりさんいそう聞かれ、行く当てもない俺はダメ元で聞いてみた。

葛「…あ、あの！俺、雑用とかするんでしばらくの間ここにいさせてもらえないでしょうか!?!」

急な要求だったからか、ひまわりさんも驚いていた

ひ「え、家は？」

葛「当分の間、家に帰れないんです！」

言い訳としては間違っちゃいないんだよな。捉え方は違うと思うけど。

ひ「ええ、でもパパになんて言えば…。」

葛「この部屋に住まわせて下さい！」

ひ「ひまと一緒に部屋!?!」

他の人にバレたら危なそうだしな。今はひまわりさんを信じてここに居させても

らおう。

ひ「じゃあ、これから言うことを守るって言うなら良いよ？」

そんなんで良いならやるしかねえ！

葛「……！良いんですか？！絶対守ります？！」

ひ「まず、ひまの部屋から出ないこと。そして、パパに見つからないこと。最後に、悪いことはしちやダメ！良いね？！」

葛「はい！大丈夫つす！！？」

ふう、これでしばらくは安心した場所で生活できるはず。するとしたらガチャつと音がした。

ひ「……？！？パパが帰ってきたかもしれない。ちよつと静かにしてて！」

そういうとひまわりさんは急いで玄関に向かった。再び他人の部屋で1人になった俺は今後どうするかを考えていた。ここでいつまで生活するか、ずっとここに住まさせて貰うわけにもいかないし、豚を探さないといけないし、考えることは多かった。下からいろいろ話す声が聞こえる。多分、俺が見つかったらひまわりさんはとても怒られるだろう。見ず知らずの俺を家に泊めさせてくれる人なんてそうそう居ないだろう。俺はこの状況に対し、どれだけ慎重にしたら良いか。何をしてひまわりさんに恩を返せば良いか。いくら考えても答えは見つかんかった。考えているうちに眠くなってきて、

俺はそのまま寝た。

朝になって目が覚めた。フカフカのベッドのお陰か目覚めが良かった。起きて気づいたことがあった。それはこのベッドはひまわりさんのだったらしく、俺が使ってしまったせいで寝る場所が無く、ベッドの下に布団を敷いて寝ていた。申し訳ないことをしたと思う…。とりあえず、目を覚ますために顔を洗いに行きたい。

葛「寝みい…。洗面所ってどこだ？なんか下にあつた気がする。」

なんか忘れてる気がするけど顔洗いたい。俺はベッドから起きて下に向かった。

ガチャ

部屋から出ると1人の男性と会った。絶対ひまわりさんのお父さんだ。

葛「……………おはようございます?」

?「……………ああ、おはよう。…いや、誰だお前!?!?」

そういや今頃昨日ひまわりさんに言われた約束を思い出した。部屋出んたって言われてたじゃん…。馬鹿だな俺。

葛「ツスー……いや、あのくえつと、ですねえ…。」

言い訳できる程の言葉や理由が見つからない。こればかりは全部俺が悪いからな。

素直に言われることを守っておけば良かった。

？「君はなんでそこに：」

何か言いかけてた。その時。

ひ「ちよつと葛葉くん！ひまの部屋からで出ちやダメだつて：あ、パパ：。」

やつぱりお父さんだったか。これで完全にバレたな。早かった。ひまわりさんのお父さんは、俺たちにリビングに来るように言つて先に降りていった。

ひ「葛葉くん、部屋出ちやダメつて昨日言つたじゃん：。」

葛「いや、マジで、やらかした。いつも通り起きて出ちやいましたね：。」

迷惑しかかけてねえな、全く俺は。この時間いたがこの人は『社築』だと言つていた。

ひ「んく、じゃあ行こつか。」

葛「そうつすね：。」

もうこうなつては仕方ないのでリビングに向かうことにした。先に行つて待つていた社さんがひまわりさんに質問をした。

社「ひまわり、この青年は誰なんだ？」

ひまわりさん、頑張つて答えてください。

ひ「えくとねえ、話すと長くなるんだけど良い？」

ほんとに大変ですが、頑張つてください。

社「構わない。仕事は休んだからな、時間はたくさんある。」

ひ「じゃあ…。」

ひまわりさんが話し始めた時。

ガララッ！

？「人間の『ふとん』というのはこんなにも寝心地がよいのか!!？」

赤髪赤目の女性が入ってきた。

？「ん、なんじゃ。みんな集まって？」

第一話「出会いは突然に」(ドーラ編)

ド「チヨウ、話がある！」

わしは再びチヨウのところへ行き、大声で叫んだ。

ド「スウーーーーー……わしは！人間界へ行く!!?!!?!!?」

周りにいたドレイク達もみんなわしを見た。周りは少しぎわついたがチヨウが姿を現した途端、静かになった。

チヨウは静かにわしを見つめ、話し始めた。

チ「ドーラよ、お前が決めたことなら否定しない。だが、それ相応の覚悟はあるんだろうな？人間界はお前が思っているほど優しい世界ではない。お前の他にも私にそう言つてここを出て行った者もいる。だが誰もが後に届けた手紙で『帰りたい』『戻りたい』などと言っている。それでも行くのか？」

チヨウの眼はまっすぐわしの目を見ていた。瞬きもせず、じつと。わしはチヨウの質問に対し、返答は決まっていた。

ド「今までの奴らと一緒にの結末にはならんし、しない。わしは人間界で生きていく。そう決めている。それがいかに大変で辛かろうがわしが望んだことだから耐えられるの

じゃ。」

胸を張ってチヨウに伝えた。チヨウは目をつぶって黙り込み、しばらくしてからわしに言った。

チ「それがお前の生きる道か：わたしに言ったこと、忘れずに生きる。人間界に行く準備が出来次第、私のところへ来い。人間界への行き方を教えてやる。」

そういうとチヨウは静かに自分の櫓の戻った。すると周りからは歓声が上がった。

「やるなあドーラ！」

「人間界に行くのか??？」

「チヨウ相手によく言ったモンだ！」

あちこちから祝福される。よほど人間界に行く事が珍しく、驚く事なのだろう。わしはその歓声に包まれながら自分の住処に戻り、出発の準備をした。まずやることは、人間界に行つてからどうするかだ。知り合いや友がいる訳でもない。住む場所も金も食べ物も尽きたら終わる。第一の難所じゃな。ふと、あの小さな洞窟に何かがある気がして戻つてみた。前と同じように箱を開け、なにか使えるものがないか探してみるとボロボロになったオレンジ色のお守りのようなものが出てきた。この際お守りでも良いからこの難所を打開する決め手になれば良いと思ひ、わしはそれを持つていくことにした。

数日後、友と知り合いに別れを告げわしはチヨウの元へ向かった。

ド「チヨウ、準備が整った。」

そういうと櫓の上からチヨウが飛び降りてきた。驚いた。いつもゆっくり行動しているチヨウがこんなに動けることに。わしのまえに降りたチヨウはわしをみるなり、こう言った。

チ「…皆に別れを告げ、決意を決めたか。よろしい、ついてこい。」

そう言つてロープの下から老いた羽を広げ飛び立った。わしは集まったみんなに手を振つて、チヨウについていった。気づけば辺りは明かりが一つもない真つ暗な岩山にいた。

チ「ここだ。この岩の裏にある。」

チヨウはなんの変哲もない岩の前に降り立った。その岩は周りの岩と同じくらいの大きさで、身の丈より少しばかり大きいくらいだった。

ド「この先に人間界が…。」

改めてこれから考えると、少し怖いものもある。だが、それ以上に興味と期待がある。

チヨウはわしの前に立って最後の言葉を言う。

チ「ドーラよ。若きにお前と同じことを望み、大いに失敗したわしの代わりにも、お前のその望みを決して変えたり、忘れたりするな。これだけは忘れるんじゃないぞ。ドレイク一族の誇りにかけて、お前を送り出そう。これを持っていけ。」

チヨウはわしに真つ赤な溶岩石で作った首飾りをくれた。

チ「それは戦士の飾り。我らの先祖の魂がこもっている。いかなる時もお前を守つてくれるだろう。」

わしはその首飾りを付けた。

ド「フツツ、わしにこういった物は似合わぬはずなのに、良いじゃないか…感謝するぞ、チヨウ。お主とその他の者の思いも共に行つてくる。」

チヨウにそう言うと、チヨウは笑顔になりわしの前から退けた。わしは目の前に現れた岩をどかし、人間界へ向かった…。

真つ白な空間に入ったと思つた瞬間、急に目の前が真つ暗になった。うつすら光が見える。その光を追うように歩き出そうとした。そんな奇妙な感じに見舞われた後、気づけば高い建造物に囲まれた場所にいた。運良く周りには人間は居なかった。とりあえ

ず周辺を飛んで状況を確認したいが、人間にドレイクの姿を見せるのはいけないので怪しまれないように周囲を確認した。しばらく散策した結果、ここは『日本』と呼ばれる人間界の国の一つである事と、日本の中の中心である『東京』というところである事が分かった。周りにある建造物はビルと呼ばれる経済産業にて必要不可欠な建物らしい。通りで多い訳だ。近くにあった書庫のような本が沢山あるところで、日本について色々調べた。四季と呼ばれる気候が変わる時が存在すること。人間界の国の中でも小さい国であること。そして人間界共通で、『ドラゴンや魔界の存在がほぼ否定されていること』などを知った。わしの知らない事ばかりであった。土地はきれいに整備されており、マグマはおろか岩一つもない。緑が多く、海と言われる大きな水溜りがあった、とても綺麗な場所であった。こんなことをしているうちに太陽が沈み、夜になっていた。わしは夜ならバレないだろうと思ひ、海沿いの広場から空に向かって飛んでみた。周りのビルより高く飛び、上空から地上を見てみた。圧巻された。小さな光が点々としており、とても美しかった。わしは気持ちが悪くなり、当てもなく自分が思う方向へしばらく飛んでいた。ふとわしは周りが暗い中、ひとつだけポツンと明かりがついている建物に降りてみた。

ド「ここは周りと比べて、光が強いな。何か強調しているような…。」

ここならこの光に誘われた人間が来るかもしれない。少し怖いが話しかけてみようか

の。魔界に比べ人間界は寒い。さつき調べた四季の中で今は『冬』と呼ばれる気候らしい。四季の中で最も寒い時期なんだとか……そんな事を考えていると下から何か動く音がした。どうやら中にいた人間が出てきたらしい。チャンスだと思えば上から見ていると、人間は丸い筒のような物を飲んでる。じつと見ていると人間が1人でボソツと言葉を放った。

？「……はあ、染みるわ。やっぱし寒い日のコーヒーは最高だな！」

とても嬉しそうな顔をしている。ますますその筒が気になってきた。その思いが止まらず、わしは不意に言葉を発してしまった。

ド「それはそんなに良いものなのか、人間？」

しまった。わしも驚いたし、下の人間もわしを見つめ驚いている。じゃがこうなつてはどうしようも無い。話を続けてみるしか！しかし何故だろう、人間がずっとわしを見つめている。

ド「どうした、何かおかしいか？見た目は人間と同じだろう。」

人間は理解が遅いのかずっと目を大きく開け、瞬きをしている。さてどう出るか人間。

？「あ、あの、なんでコンビニの屋根の上にいるんですか？」

思っていたのとは違う返事が返ってきた。確かに人間は下にいる。上には行かない

のか。怪しまれている気がするから降りよう。

ド「よつと、人間は屋根の上には乗らないのか。」

これでやつと話ができるのか。この人間は…男か。身長がドレイク的には小さいが、人間的には大きい方なのか？何よりわしとほぼ変わらんというのがなあ…まあ良いか。そんな事より今は住処が必要だ。

ド「なあ人間。お前さんにここを案内してもらいたいのじやが、どうだ。わしもここに来たばかりで行くところもなければ、住む場所も友人もないのじや。そこで近くにあったこの明るいところにおつたのじや。」

状況を把握できたのか、その人間は冷静さを取り戻してきた。

？「とりあえず、名前を聞きたい。私は社築だ。」

人間は『社築(やしろきずく)』と名乗った。思っていたより礼儀はしっかりしていた。これにはわしも不意を突かれた。

ド「そうじやな、申し遅れた。わしの名前はドーラじや。」

これから話すにおいて重要な情報だからはつきり言った。この挨拶により会話はおのずと始まった。

社「ドーラ：日本人じやない、のか。もしかして外国人とかかな？」

ド「外国といえば外国なのじやが…まあそれでも良いか。」

やはりわしを人間と捉えているらしい。細かい事を話しても理解されないだろうと思いい、その事について話すのをやめた。さて、もう一度本題について…

社「そ、そうなんです…！あつちよつともうこんな時間なので私帰りますね！時間も遅いので気をつけてください！それでは…!!？」

ド「うん？あ、ちよつと待て！にんげ…社築!!？」

しまったやられた。隙を見せた途端に逃げられてしまった。あつという間に暗い道の奥へ行ってしまった。

ド「どうしたものか…。そうだ奴の匂いを追えば良いのか！」

むしろドレイクの五感は人間の100倍鋭く、自分で調節もできる優れた能力だ。さっきの少しの会話で覚えた社の匂いから、空へ上がり周囲の家から社の家を探してみた。

ド「クンクン…見つけたぞ、あそこじゃ!!？」

わしはすぐさまその家に向かった。

ド「さてと、(ガチャツ)ん？開かぬぞ。壊れているのか？」

何度もガチャガチャしたが一向に開かない。以前調べた時はここをガチャガチャしていたのだが。開かない扉に苦戦していると、中から鍵を開けた音がした。

？「パパく鍵無くしちやつたの？あれつ、どなたさんですか？」

小さい女子が出てきた。社では無い。もしかして家を間違えたか？いや、そんなことは無いはず…、とりあえず確認してみるか。

ド「社築という者を知っているか？」

さて、どうなるか。

？「知ってるよ！だつてパパだもん。」

なんと、娘であつたか。やはりここが社築の家で間違いなさそうだ。

ド「社築はまだ帰っておらぬか。分かった、また出直そう。」

今夜はこの寒い中、どこかで寝るとするか。そう思つていた。

？「パパのお友達？パパならもうすぐ帰ってくるからお家の中で待つて！」

去ろうとしたわしの手を掴み、半無理やりに家の中に入れられた。

ド「よ、良いのか？勝手に上がつてしまつて…。」

流星にわしもさつき会つて少し話しただけの者の家へ上がつて待つ、というのはどうなのかと思つた。

？「いいのいいの！パパは優しいからね！それにお友達ならだいじよくぶ!!」

とても元気のある娘だ。何より笑顔が明るくて癒される。

？「そうだ！おねえさんの名前は？あつ、ひまは『ひまわり』つて言うんだ！」

おねえさん、か。悪くないな…。

い人だったらどうする？今度からはちゃんと…」

…まあ、そうなるじやろうな。ていうか、ひまわり殿が今にでも泣きそうな顔をして
いるのじやが!!？」

ひ「うう、パパあくごめんなさい…。」

社「よ、よしひまわり！分かればいいんだ。次から気をつけてな…！」

あ、子供に甘いタイプの親だ。わしは一瞬で分かった。

ひ「うん、ごめんなさい。パパ。」

そういやまた本題を忘れとったわ。

ド「ところで、わしのことまた忘れてたじやろ？」

社「スウー、いやそんなことないですよ？ちゃんと気付いてました。」

目が泳いでおる。此奴、やはり忘れておった。

社「ああそういえば…では本題を…スウ」

ボタン…

ド「社築!!？」

ひ「。パパ!!？」

目の前でいきなり倒れた。何事かと近くと…

スウ、スウ、スウ

ド「此奴、寝ておる…。」

ひ「…え？」

よほど疲れているのか揺すつても起きなかった。しようがないのでひまわりに聞いて、社の部屋まで運んだ。

ド「まったく、いつになつたらわしの話を聞いてくれるのか…。この際疲れを一切取つ払つてやろう。」

ひまわりがいない事を確認して、自分の尾を出す。そこからウロコを一枚剥がす。痛くないが、違和感はある。このウロコを粉碎し、適量ふりかければ体を癒す効力が発揮される。

ド「ふう、これで少しは楽になるじやろう。これから多分世話になるじやろうからな。」

リビングに戻るとひまわり殿がわしの寝床を準備してしてくれた。ひまわり殿には、社築に大事な話があるから今日は泊まらせてくれ、と言っておいたのじや。

ひ「うくん、ちよつと狭いけどここがドーラさんの寝るところね！」

洞窟が寝床だったわしからすると全然広い。羽と尾を出す余裕もある。

ド「いや十分じや。人様の家に勝手に上がり贅沢など言えんよ。それとわしからしたらこのくらいが丁度良いのじや。」

ひ「そうなの？なら良かった！ひま、もう眠いから寝るね。おやすみなさい！」
ド「ああ、おやすみ。」

わしも寝るとするか。今日はいろいろあつたな…。

なんと、目覚めがとっても良い。下が岩肌じゃないため、寝心地がとても良かった。これが人間の『ふとん』なのか？！何やらリビングから声が聞こえる。みんな起きてきたのか。とりあえず、この感動を伝えに行こう！！

ガララッ！

ド「人間の『ふとん』というのはこんなにも寝心地がよいのか！！？」
社とひまわり。そして昨日見なかった者が1人、リビングにいた。

ド「ん、なんじゃ。みんな集まって？」

勝手にド葛本社 第二話「これからの生活（前編）」

社「ド、ドーラさんまで居たんですか…。まさか昨日、あの後家に泊まったんですか？」

ド「ひまわり殿が寝床まで準備してくれたからの。その、申し訳ないじゃろ？そもそもお前さんが寝てしまうのが悪い。」

社「ぐぬぬ、仕方がないじゃないですか。睡魔には勝てませんって…。」

ひまわりにはまだ理解ができる会話だったが、何も知らない葛葉はこの後の築からされるであろう質問を予測し、それに対する返答を考えていた。

ひ「ねえ、葛葉くん。」

ひまわりがコソツと葛葉に話しかける。

葛「はい…、なんすか？」

ひ「パパからの質問ってひま達にどんな関係かってことだよね？」

ひまわりは自分の考えを簡単にまとめた結果を葛葉に聞いた。

葛「…へ？ど、どんな関係って、いや、別に何もないじゃないですか…。もしかして女人の部屋で勝手にベットで寝ることって、しかも朝2人で出てくるところ見られたか

ら……。でっでも！」

ひ「ひまは人助けしただけやしなあ。特に関係性なんてないもんなく。」
葛葉が思っているほど、ひまわりが発した2人の関係の意味は浅かった。

葛「……まあ、そうことですよ。はい、その通りだと思います。」

ひ「だよーね！ならこれで良いっか。」

ひまわり達のコソ話が終わった頃、築とドーラの話も終わった。

ド「そうだ社築！わしはお前に話があつて……！」

社「あつ、話が途切れてたな。すまん、ひまわり。もう一回最初から話してくれ。ドーラさん、これから大事な話があるのでそれが終わり次第聞きます。」

ド「なつ、くう……。」

何とも言えなくなつたドーラは静かに築の隣の椅子に座つた。

ひ「じゃあ、今度こそ話すね。」

社「ああ。詳しく頼む。」

再び息を整え、ひまわりは葛葉との出会いを2人の関係性を明らかにした上で話した。

社「……なるほどな。『葛葉』くんというのか、じゃあ葛葉くんはなんで街灯の下で倒れていたんだい？」

今度は葛葉に質問が行く。

葛「そうつすねく…、家から出てきて、宛てもなくて行き倒れた感じですかね。」

葛葉の言ったことはあながち間違つてはいない。ただ世界線が違うだけだった。

社「なんで家出したの？言いくかつたら別に良いんだけど、一応ね。」

葛「家出した理由か…、特に無いすよね。」

社「え、無いの？親が厳しいとか、身の回りが不十分だったとか、色々。」

葛「欲しいものはなんでも手に入つてたから、別に不十分だとかは無いらしい。親も共に

なんでもしてくれたしなあ…。」

これには築もひまわりも驚いていた。

ひ「え、葛葉くんの家つてお金持ちだったの!?？」

葛「お金持ちつていうか、（吸血鬼の中では）名のある一家だったつすね。」

社「そんな裕福な家なのに特に理由も無く出てきたの!?？」

葛葉がここ（人間界）に來た理由を思い出す。

葛「あ、えつと思ひ出しました。家出した理由。家の外の世界を見たくて出てきたんです。」

社「という事は、家出つていうより一人旅的な感じだね。」

ド「外の世界、か…。」

話に入れないドーラが葛葉の言った言葉に反応する。

社「どうかしましたか、ドーラさん？」

ド「え、あつ思ったことが出てしまっただけじゃ！気にしないで良いぞ…！」

ここでひまわりがドーラに質問した。

ひ「ところでドーラさん。パパに話があるって言ってたけど、なんだったの？」

社「あれまだ話終わってない…。」

ド「ああ、そのことなんじゃが。社築、お前さんに一つ頼みがあるんじゃ。昨日はう

まく逃げられたが、今はもう逃げられんからの。」

社「な、なんでしょうか…。」

築が息を飲む。

ド「昨日も言ったのじゃが、お前さんにここを案内して欲しいんじゃ。」

社「…え、案内？って具体的にどこらへんですか？」

ド「わしはここにきたのは初めてなのじゃよ。だから何一つわからなくてな。最初に

あつたのがお前さんじゃったから頼んでみたのじゃが…。どうじゃ？」

社「案内って言われても、どこを案内すれば良いのか分かんないし…。それより案内

なんてとつても時間かかりますよ？」

ド「そうじゃな…。見ず知らずのドレ、奴に言われても困るだけじゃもんな…。他を

あたることにする。」

ドーラは悲しそうな顔をして、席を立った。

ひ「待つてよドーラさん！」

ひまわりがドーラを呼び止める。

ド「ひまわり殿、これ以上は迷惑かけられんよ。」

ひ「迷惑じゃないよ！だつてひま、いつもパパと2人だつたけど今は4人いるんだよ。ひまからしたらいつもと違って楽しくて楽しいんだ！」

それを聞いていた3人が驚く。

ド「楽しい：？勝手に来て、勝手に泊まったのに？」

葛「迷惑じゃないんですか？ひまわりさんの良心で助けられたのにも関わらず、勝手にベットで寝て、勝手に約束破つて、今こうして集められて……。俺だつたら迷惑でしかないつすよ。」

社「ひまわり……」

ひ「ひまは、ずっとおんなじ生活でつまんなかったの。朝起きて、お弁当作つて、学校行つて、夕飯作つて、寝る。ずっと変わらない、少しの楽しみはあるけどもつと違うことがしたかったの。それが昨日2人と会つて変わったんだよ！葛葉くんを助けて、ドーラさんを泊まらせて。これからどうなるんだろうつてワクワクしてるんだ。だか

ら葛葉くんの事も、ドーラさんの事も迷惑だと思わないよ。むしろ居てくれた方がひまは嬉しいんだ!!？」

ひまわりは自分が思っていることをはっきりと伝えた。

ド「ひまわり、殿…。」

葛「ひまわりさん…。」

ひ「ねえ、パパ。ひまはパパがとつても頑張ってるのを知ってる。だから無理なお願いをしないようにしてたの。でも今だけで良いから、一回だけで良いからひまのお願いを、聞いて欲しいの。」

3人が築の方を向く。

社「…ひまわりが私に何かをねだった事は未だ無い。そして私自身、常日頃家事を任せっきりのひまわりに何かしてやりたいと思つてたところだ。なんとなく予想はできるが、言ってみてくれ。」

ひまわりが覚悟を決める。

ひ「お願いパパ。しばらくの間、葛葉さんとドーラさんを家に泊めさせてください。」

ド「わしからもお願いする。」

葛「お願いします。」

社は少し下を向いてから息を吐いた。

社「はあく、こんな断れねえよ…。ひまわりも今回は良いけどさ、その頼み方次から禁止な。断れねえもん。」

ひ「て、ことは…。」

社「良いですよ。でも、そのかわりしつかり規則的なものは付けさせてもらいますからね！」

ド・葛・ひ「やったあああああ!!!」
「ありがとうございます!!!」

3人はイスから立って喜んだ。その光景を見た社は少し疲れていたが、どこか嬉しうだった。

社「じゃあ、一緒に規則を決めようか。各々これはやらせてって事があるなら言ってください。」

ドーラ、葛葉は何かあるか考えた。

ド「わしは、1日一回外に出たいな。家の前で良いから。」

社「何かするんですか？」

ド「まあ、日課的な？あまり見せられないが…。」

社「え、それって人の目に入るとこでやっても良い事ですか？というか、いかがわしい事じゃ無いですよね？」

ド「そのような事じゃ無い！2〜3分だけで良いし、人がいないときにササつとやる

だけじゃ。」

社「はあ…、分かりました。ドーラさんはそれだけで良いですか？」

ド「うむ！」

ドーラは決まった。あとは葛葉だ。

社「葛葉くんは何かある？」

葛「そうっすねえー、俺は別に外に出なくても良いっすね。」

社「えっ、良いの？」

葛「あとは特に無いんすよね…。」

社「そっか。分かった。なら次は家での2人の仕事を決めよう。」

ド「仕事か。すまぬがわしはお前さん達の食べ物はまだ知らぬから、料理は出来ぬぞ

？」

葛「(仕事とかあるのかよ。いつも豚に任せつきりだったから何ができるんだ俺に!!

?)」

社「料理はひまわりの仕事なので大丈夫ですよ、ドーラさん。じゃあ、ドーラさんには食後の皿洗いと部屋の掃除をお願いします。で葛葉くんは、洗濯と風呂掃除をお願いしますね。」

ド「良かった、それなら出来る。ひまわり殿、詳細をこのあと教えてくれぬか？」

ひ「良いよ〜！」

社「じゃ、ひまわり頼んだ。私は葛葉くんに教えよう。」

葛「お願いしまスウー…。」

社「じゃあ、解散ツ!!？」

2人はそれぞれ築とひまわりに自分の仕事内容を教えてもらった。

社「…で、これを片付ければおしまい！」

葛「ふう、思ってたより大変だ…。」

社「慣れれば簡単だよ。それより仕事内容は大丈夫かい？」

葛「大丈夫つす。把握しました。」

社「よし！じゃ、戻ろうか。」

築は葛葉に洗濯の仕方と干し方を教え、リビングに戻った。

ひ「…それで、あとは流して終わり！」

ド「なるほど、これを捻れば水が出るのか…。すごいな。」

ひ「ドーラさん、蛇口見た事ないの？」

ド「わしが住んでたところは基本水が流れっぱなしじゃったからな。」

ひ「そうだったのかあ！ところでやることは覚えれた？」

ド「ああ、完璧じゃ！」

ひ「よっしゃ！」

社「そつちはどうですか？」

ちようど終わった時に築達が帰ってきた。

ひ「こつちは終わったよ！パパの方は？」

社「こつちも終わったところだよ。」

ひ「次は2人部屋だね！でも、その前にお昼食べよう。お腹減ったよお……」

社「そういや、話し合いたから朝ご飯食べてないんだった。そりゃ腹減るよな。

じゃあ昼飯を作るか！」

ひ「今日はパパとひまでお昼作るから、ドーラさんと葛葉くんは座つてて！」

ド「良いのか？」

社「良いですよ！」

ドーラと葛葉は2人が昼食を作っている間何も出来ないため、リビングのテーブルに座つて待つていた。何気に2人つきりになるのは初めてだった。

葛「……あれつすね、話すの初つすよね……」

ド「そ、そうじゃな……。あつ、わしはドーラつて言うんじや。よろしくな……」

葛「スウー……、俺は……葛葉つて言いますスウーね……。よろしくお願
いします。」

リビングが気まずい空気になる。特に話すことのない2人は、どうやって時間を潰す
か考えていた。その様子を準備をしながら眺めるひまわり。

ひ「ねえパパ。あの2人、すごく気まずうだよ。」

社「そうだな……。よし！あつ、そうだ。2人の部屋をこのあと決めたいんですけど、2
階にある空き部屋を2人の部屋にしたいんですね。そこでどっち部屋が良いか、見て
きても良いので話し合つて決めるとして下さい。こつちまだ掛かるんでね。」

築はこれから一緒に暮らす仲間として、距離を縮めさせるために2人に話す機会を与
えた。

ひ「パパナイス！」

社「これで少しは話せるだろう。」

これを聞いた2人は、もちろん戸惑っていた。

ド「（2人きりで話せ、というのか!?葛葉殿と話せる自信がないのじゃが……）」

葛「（この場合つて俺が先に決めるのか？それかドーラさんに先に決めさせるのか？
究極の二択だな……。でも大体目上の人が先に決めるんだっけ？あれどっちだっけ、ヤバ
イ!?）」

ド「そ、そうなのか…。な、なら、葛葉殿。見に行きますか…?」

葛「そうつつつつすねー………。行きましよーか…。ハイ。」

そう言うのと2人はぎこちない距離のまま、二階へと上がっていった。二階の空き部屋というのは、築の部屋の奥にあった。手前に一つと突き当たりにつた。とりあえず手前の部屋から見に行くことにした。

ガチャ：

この部屋は窓が大きく、日差しが良く入る部屋だった。

ド「昨日わしが寝た所より広いの。ここなら家から出ずに事が済むかも知れん。」
葛「んー、日差しが入るのか…。キツいかもなあ。」

次に突き当たりの部屋へ行った。

キイ：

さつきの部屋より窓が小さく、日がほほ入らない部屋だった。しかも少しボロい。

ド「日が入らないだけでこんなに変わるのか。ここは少し怖いなあ…。」

葛「日差しがほほ無い。少しいじれば家の俺の部屋の部屋みたいになるかもな。」

2人は部屋を見終わり、リビングへ帰ってきた。

ド「ど、どうじゃった?どつちが良いか葛葉殿は決めれたか?」

葛「スウー……」。そうすねえ…。まあ、はい。決めました…。」

2人はセーのでどっちが良いか言った。

ド「手前！」

葛「奥の部屋で。」

特に話し合いもなしに決まっちゃった。まさか仕掛けた築も会話がほぼ生まれずに物事が一つ終わるなんて思っていなかった。

築「う、嘘でしょ…？せつかくの仲良しチャンスだったのに…。」

ひ「逆にすごいね…。」

そんな事をしているうちに昼飯ができた。ひまわりは食べる支度をする様に2人に言った。

ひ「じゃあ、葛葉くんはこれとこれを運んで。ドーラさんはこつちお願い！」

葛葉とドーラは言われた通りに食器類を運んだ。この日の昼飯はオムライスだった。

社「よし、みんな揃ったところで！いただきますをしようか。」

ド「待て社築。『いただきます』ってなんのことだ？」

ひ「え、ドーラさん。いただきます知らないの!?!？」

いただきます、を知らないドーラに驚くひまわり。

社「そういえば外国の方でしたものね。日本では食事の前に『いただきます』と言ってその食べ物に感謝をするんです。命をいただきます、ということですね。」

ひ「こうやって手を合わせて言うんだよ。」

ド「なるほど。食べ物に感謝、か。今まで思ったこともなかったことだ。」

社「葛葉くんは知ってた？」

葛「あ、知ってます。前に、はい…。」

社「そっか。それじゃ仕切り直して。ひまわり、お願い。」

ひ「手を合わせて。」

全「いただきます！」

4人息を合わせて、いただきますをした。社は普通に、ひまわりは元気に、ドーラは見様見真似で、葛葉は小声で、皆様々に。

ド「この料理はなんていうのだ？」

ドーラは初めて見る人間の料理に興味津々だった。今まで肉以外食べたことなかったドーラは鳥の卵を使ったオムライスに興味と食欲がそそられていた。

社「オムライスっていうんですよ。ケチャップで味付けしたチキンライスを、薄く焼いた卵で包む料理なんです。実は、私の得意料理なんですよね…！」

少し自慢げに説明する社を横目に、初めて見るオムライスをじっくり観察するドーラ。そんなことに気にせず食べる葛葉とひまわり。葛葉に至っては初めて見る料理なのに、社の説明を聞きながらもすでに食べていた。

ひ「黙々と食べてるけど。どう、美味しい？」

葛「築さんも料理上手いっすね。ひまわりさんと同じくらい美味しいです…。」

ひ「やったあ〜！パパと同じ位だって言われたあ〜！じゃ、今度はひまが作ってみるか
ら食べ比べてみてね！」

葛葉は食べながらうなづく。嬉しそうに食べるひまわり。それを見て微笑ましい表情になるドーラと築。そのままみんな昼飯を食べ終えた。

社「ふう…、腹一杯だな。」

ひ「ひまも〜。」

ひまわりは、お腹をポンポンと叩くという築と同じポーズをした。

社「みんな食べ終わったところで、今度は『ごちそうさまでした』と言って食事を終わります。」

ド『いただきます』と『ごちそうさま』か…。大事なことじゃろうから覚えておくか。」

ひ「手を合わせて！」

全「ごちそうさまでした！」

今度はドーラとひまわりが食事の片付けをする。その間、築と葛葉はこれから生活に必要なものを決めようと話始めた。

社「とりあえずベッドと机は用意するとして、ほかに葛葉くんは何か欲しいものはあ

る?。」

葛葉は今まで魔界で生活していた中で、必要不可欠な物は何か思い出していた。しかしほぼ毎日寝ていた葛葉にとって必要な物はベッド以外無かった。

葛「そうですね、必要な物…か。あ、出来ればカーテンを分厚いものにして欲しいです…ね。」

一応、葛葉は吸血鬼なのだが日光も十字架もにんにくも平気という吸血鬼の中でも類を見ないつよつよ吸血鬼の一族なのだ。しかし平気とは言っても長時間浴びると、体に不調が出るらしい。主に頭痛、目眩、力が抜けるといった症状だ。

社「分厚いカーテン、つてそれだけで良いの?」

葛「そんなもんで良いですよ。特にやることないですし、家にいるだけだから。」

そこに洗い物を終えたドーラが来た。

社「あつ、ドーラさんは何か欲しいものありますか?」

ドーラは今まで何も無い場所で他のドレイクたちと暮らしていたし、まして人間の生活など知らないから何が必要なのかと聞かれても分からないので、店で見て決めると言った。

ひ「ひまもなんか見たいから行く。」

社「じゃあ、みんなで行くか!」

葛 「…マジか。」
ひ 「葛葉くんも行くようよ！」

勝手にド葛本社 第三話 「これからの生活（後編）」

早速出かける準備をした。ただ一つ問題があつた。それはドーラと葛葉の服装のことだつた。特にドーラ。

社「葛葉くんは私の服を貸せば良いんだが、ドーラさんの服はなあ…。ひまわりの服じゃ小さいだろうし。」

ひ「ん。大きいコートなら持つてるけど、それだけじゃダメだもんね。」

2人が悩んでるのを不思議そうに思うドーラ。

ド「なんで「ふく」という布を羽織らなければいけないんじや？」

社「え、もしかしてドーラさんのいた国だと服つて着ないんですか？」

ド「布をかける程度ならいたのじやが、築達の様な全身を覆う程の者はいなかつたな。」

社「それぞれの文化の違いかな。日本というか大体の国だと服を着ていないと注意されるんですよ。それに、なんというか…、恥ずかしくくないですか？少なくとも私は恥ずかしくてドーラさんのことを直視できませんね…。」

ド「恥ずかしい、とは思わないが服を着ないと面倒なのは分かつた。ならばわしにも

服を貸してくれ、築。」

社「え、男性用じゃないですが…。」

葛「逆に女性用あつたら嫌だ。」

ド「別になんでも良い。着ていけば良いのだろう？」

社「そうなんですけど…。じゃあ2人共、私の部屋に来てください。」

築は2人を連れ自分の部屋へと向かう。

社「えーと、先に葛葉くんから決めるか。」

葛「うつす。」

社が葛葉を連れ部屋に入る。すると廊下で待つてるドーラのところにひまわりが来た。

ド「どうしたひまわり殿？」

ひ「ドーラさんの服はひまが選ぶね。」

ド「…？よろしく頼むな。」

3分くらいで葛葉が出てきた。

ひ「おおう、良いね葛葉くん！」

葛「ありがとうございます…。」

ド「照れとるな。」

葛「スウーロー。」

社「いやあ、私の前に着ていたものなんだがサイズも丁度良かった。」

ド「次はわしの服だな。ひまわり殿、頼んだ。」

ひ「任せて！」

そう言つて部屋へ入つていった。

社「それ、キツくない？ 適当に上にあつたものだったから。」

葛「全然大丈夫つすね。」

社「そうか……」

なんとも言えない空気感だった。特に話すことが無いのと、待つている間にやること
が無いため、ただひたすらに部屋から2人が出てくるのを待つだけだった。

葛「遅いつすね……。2人共。」

社「そうだな。聞いてみるか。」

築は部屋をノックする。

社「ひまわり、何かあつたのか？ ずいぶん時間がかかつてる様だが……」

すると中から返事が返ってくる。

ひ「パパ大変だよ！」

社「ど、どうしたんだ。ひまわり！」

ひ「ドローさんの胸が大きくて、服のボタンが閉まんないんだよ！」

社「ブツ！そう、それは大問題だ…。ならパーカーとかどうだ？パーカーならボタンとか無いし、その、伸縮性があるから大丈夫だろ。」

予想外の報告に慌てる築。その姿を少し照れながらも聞いてないフリをする葛葉。さつきまでの空気が一転、さらに気まぎらなくなった。その後無事着替えを済ましたドローが部屋から出てきた。

社「・大丈夫でしたか。その、服のサイズは？」

ド「大きさは良いのじゃが、ちとばかし胸の辺りが苦しいな。」

社「それは、しょうがないですね…。」

ひまわりが築の部屋から出てくる。

ひ「ねえ。パパ。」

社「なんだひまわり？」

ひ「家具と買い終わったら、服屋行こう？」

社「ああ、そうしよう。」

2人は服の重要さを身に染みて感じた。

社「よし、今度こそ準備できたな。それじゃ行きますか。」

ひ「行きますか！」

ド「どうやって行くんじや？」

社「車でいきます。」

全員家を出て鍵を閉めた後、築は玄関脇にある車庫へ向かう。

ド「この家の中に車がいるのか？」

社「これです。会社へは歩きで行っていますが、一応車の免許は持ってるんですよ。」

築の隣には白いミニバンがあつた。

葛「結構でかいっすね…。」

社「仕事の都合で遠くへ行くときとかに使えるんだよね。あとは旅行とかでも。」

葛「なるほど。」

社「鍵開けたんで、乗って良いですよ。」

築は運転席の方へ行く。

ひ「ドーラさんはどこに座る？」

ド「そうじやなく、前に座っても良いか？」

ひ「ひまは良いけど、葛葉くんは？」

葛「じゃ、俺は後ろに座ります。」

ひ「帰りに交換するってことで！」

社「全員乗ったな？閉めますよ。あ、シートベルトお願いします。」

葛「シートベルト？」

ひ「これだよ葛葉くん。」

葛葉の顔近くまでひまわりが来る。

葛「ツスーーーー……。あの、ひまわりさん。近いっす……。」

ひ「え、あつごめん！はい、これがシートベルトねっ。」

葛「あざっす……。」

ひまわりは自分の行動が恥ずかしくなり顔を赤らめる。

社「若いですね〜。」

ド「なあ築。シートベルトってどれじゃ？」

社「えっと、これですね。ちよっと前失礼します。」

そういうとドーラの左腕のあたりに手を伸ばす。

ド「き、築……？」

社「あれっ、この辺に……。」

ド「……。」

社「あつ、ありましたよドーラさん。」

築はシートベルトを見つけ、ドーラへ渡す。

ド「あ、ありがとうなんじやが…、そのお主の手がわしの胸に当たっておるんじやよ…。」

社「えつ、あつ!!？す、すいません！そんな気は全く無いんです。不可抗力というか、事故というか…。とにかく、すいませんでした！」

築はシートベルトをドーラに渡し、手をすぐさま退けた。

ド「いや、築は何も悪く無い。謝るな…。その、わしまで恥ずかしくなってくるじゃろ！」

ドーラは少し怒りながらも照れていた。築もそれに気付き、目を逸らす。

葛「（親子だなあ…。）」

社「じゃ、じゃあシートベルトしたので、出発しますよ。」

ひ「出発しんこくう！」

やつと出発した。

最初に来たのは大型インテリアショップだ。ここでドーラと葛葉の生活必需品を買う。

社「まずはベッドから見るか。ひまわり、寝具売り場は何階だ？」

ひ「えーと、2階だね。」

社「それならエレベーターで行こうか。」

ド「それは何のことじゃ？」

社「エレベーターっていうのは、人を早く上に行かせる機械のことです。我々が乗る箱がワイヤーで吊るされていて、その先に重りが付いていて重りが下がれば箱は上がる。重りが上がれば箱はさがるといいう仕組みになってるんですよ。ざっくり説明ですけどね。」

ド「それは凄いな。早く乗ってみたい！」

ひ「ドーラさん関係無いとこでテンション上がってるねえ！」

社「来ましたよ。開けときますんで乗ってください。」

ド「これ上がるのか？」

社「そうですよ。扉閉めて、階を指定したら動きます。」

築が操作板をいじる。

ウイイーン…

ド「おお動いた！」

社「ドーラさんからしたら初めてのことも知れませんが、エレベーターって高い建物には大体あるんですよ。」

ド「これが大体あるじゃと…？」

ピンポン…2階です。

社「着いたみたいですね。降りましょう。」

エレベーターを出れば様々なシチュエーションに合った部屋の一部がずらつと道順に沿って飾られていた。

ひ「ドーラさんと葛葉くんのベッドを探してこう！」

社「とりあえず目の前にあるショールームを見てみてどんな部屋にするかイメージしてみたらどうですか？」

ドーラ達が各自どんな部屋にするか、ある程度のイメージを持っていた方が後の家具を買う時に楽だろうと築は考えた。

ド「…。」

ひ「ドーラさんはなんか良い感じのあった？」

ド「ああひまわり殿、この家具が気になってな。」

ドーラが指さしたのは小さな四角で区切られたオープン棚だった。

ひ「オープン棚？こつちのカラーボックスの方がたくさん種類もあるし小さいから置き場所も困らないけど、なんでそつちが気になったの？」

ド「わしはあんまり物を溜めないからこういう細かく区切つてある方が一つ一つを

広々と置けるから良いかなって思ったんじゃ。それとこれが部屋にあれば他に収納を置かずに済むじゃろ？」

社「良いじゃないですか、これ。」

ド「い、良いのか？」

社「良いですよ。ドーラさんが欲しい物なんですから！」

ひ「良かったねドーラさん、一つ家具が決まって！」

築はその棚の番号を控えて、葛葉のそこへ向かった。

社「葛葉くんは良いのあったかい？」

葛「いや、特には。」

社「そうか。何かイメージは得られたかい？」

葛「まあ、基本的にカーテンだけあれば良いんですけど。」

社「そういえば部屋決めの時も日差しが少ない方選んでたけど、もしかして…。」

葛「（やばい気づかれたか!?）」

葛葉が息を飲む。

社「体が弱かったりするの？」

葛「…え、あついや。まあ、そういうところですね。」

社「ならちよっと厚めのカーテンを探しに行こう。」

そう言つてひまわり達を呼んで寝具売り場へと向かつた。

ひ「めつちや枕とか布団がある！」

社「ドーラさんは先に枕とかシーツを見ていてください。ひまわり一緒に見てくれ。」

ひ「はい！」

ド「お主らはどこへ行くんじや？」

社「私と葛葉はカーテンを見に行きます。」

ド「分かつた。それじやひまわり殿、見に行こうか。」

築と葛葉は寝具売り場よりちよつと先にあるカーテン類の売り場に向かつた。

社「どんな感じのカーテンが良いんだ？」

葛「そうつすねえ……。」

葛葉はなるべく暑く、黒くて陽を通しにくいカーテンを探した。数あるカーテンの中から葛葉はちよつと良さそうな物を見つける。

社「おつ、見つかつたかい？」

葛「これが良いつすね。」

社「結構分厚いな。でも日差しを遮るには丁度良いか。よし、決まり！あとは、戻つて枕類だな。」

葛「了解つす。」

葛葉の選んだカーテンを袋に入れひまわり達のところへ戻る。

その頃、ひまわり達は…。

ド「枕というものはこんなに種類があるものなのか…。」

ひ「形から中の素材まで沢山あるから、ドーラさん好みのもの探してみて！」

そう言われ一つ一つ触って自分に合う枕を探していくドーラ。途中、ひまわりから枕の中の素材の違いについて教えてもらった。それを踏まえた上で丁度良いのを見つけた。

ド「これは、触り心地よし。素材ふわふわ。これじゃー！」

ひ「これすっごいね。もふもふのふわふわやん！」

ド「じゃろ？これでわしの求める快適な睡眠ができる…。」

そこに葛葉の用事を終えた築達が来た。

社「どうですか。良いのありました？」

ド「ああ、ひまわり殿にも手伝って貰えたからな。」

ひ「葛葉くんのカーテンも良いのあったの？」

葛「ありましたね。」

社「じゃ、あとは葛葉くんが枕とシーツを決めて本題のベッドを見に行きますか。」

葛「了解つす。」

ド「あ、まだわしもシートとやらは決めてなかったわ！」

ひ「それじゃみんなで見にいこか！」

枕売り場の片隅にシートが売ってあった。

社「さて、葛葉くんの枕だが。どんなのが良い？」

葛「あれつすね。家の使ってたやつに似たの探してみます。」

そう言つてササつと売り場を見回る葛葉。

社「触らなくたって分かるのか……？」

葛「……ありました。似たの。」

数ある枕の中、ピタツと止まった葛葉の前には以前魔界で使っていた枕と形、素材がほぼ同じな枕があった。

社「ええ、あつたの!!？」

葛「ずっと使ってたんで、なんかみただけで分かりました。」

確かに魔界で常にやるのが無かった葛葉はずっと使つてた枕くらい目で判断できるほどにはなつていた。

社「まじかよ、すげえな。あとはシートだな。」

葛「行きますか。」

シート売り場についた頃にはもうすでにドーラは自分のを見つけていた。

社「ドーラさんはそれで良いですか？」

ド「うむ！」

社「分かりました。葛葉くんも自分の好みのシートを探して来て良いよ。」

葛「ありました。」

社「えっ、はや!!？」

築がドーラと話している数秒の間になんと葛葉は自分の使っていたのと似たシートを探して持つて来ていたのだ。

葛「これであとはベットだけですわね…。」

ひ「ベット本体は1階の倉庫みたいなどこにあるらしいよ。」

社「1階に降りるのか。またエレベーターだな。」

4人はエレベーターに乗り、1階へ降りた。扉が開くと天井が高いまんま倉庫のような場所に着いた。ここには大型家具類が置いてあるようだ。

ひ「ベットはあそこだね！」

社「ベットはそんなに種類ないと思うんですよ。」

ド「そのようじゃな。見た感じ5〜6種類くらいしかなさそうだ。」

葛「俺これをお願いします。」

ド「どれも少し色が違うくらいだし、わしはこれで。」

社「はいはい、ええつとく……。これはカートじゃ無理だな。店員さんを呼ぼう。」

この後、ベットを後日配送してもらう手続きと他のものをレジに持って行き会計を済ませた。

ひ「お買い物終了!」

社「必要なものは買ったしな。帰りますか。」

買った荷物を車に乗せ、家へ帰った。

全「ただいま〜!」

社「さっきの話の通り、二人のベットが届くのが後日なのでとりあえず来るまではこの布団で寝てください。あと今日からあの部屋で過ごしてくださいね!」

ド「はい!」

葛「了解つす。」

社「あつという間に夕飯の時間ですし、各々準備が終わったら手伝ってください。」

ひ「ひまはやることないし、パパの手伝いする〜。」

ド「わしらは部屋に布団を敷きに行くか。」

ドローラが布団を持つとした時。

葛「いいつすよ。布団俺持つてくんぞ。」

ド「えっそんな、悪いじゃろ!?!」

葛「その代わり、枕とシーツ持ってきてください。」

そう言つて颯爽と布団を担ぎ、階段を上る葛葉。だったか。

ドサツ：

ド「……、葛葉殿？」

葛「ツスーーーーー……、あー急になんか座りたくなつたわ。あーなんでだろう。」

ド「やっぱわしも運ぼう……!」

葛「いや、大丈夫つすよ? だが、急に座りたくなつただけですし。まああと軽く数十分座つてたら座りたい衝動なくなると思うんで……、大丈夫つす!」

平然を装いながらも内心焦っている葛葉。

ド「そ、そうか? なら先にこれ置いてくるから、そしたら手伝おう。」

葛「ツスーーーー。」（あれ、思っているより力が無くなつてる。早めにプタ探し出さねえとな……。しかし、たかが薄い布団二枚すら運べないとは、相当だぞ。）

結局、戻ってきたドーラに助けてもらった葛葉だった。

社「よし、全員揃つたところで。せーの!」

全「いただきます!」

この日の夕食はムニエルだった。また初めて食べる料理にドーラは興味津々だった。社「私は洗物してるので先にお風呂入ってきてください。」

ド「あ、わしも手伝おう。」

社「ありがとうございます。じゃあひまわり、葛葉くんに説明してあげてくれ。」

ひ「はい！」

葛葉はひまわりの後に付いて行き、風呂場の説明を受けた。

ひ「…でここにタオル置いとくね。あとは、なんか聞きたいことある？」

葛「あ、着替えは？」

ひ「あ、そうだね。えーとじゃ、ひま持つてくるからこのタオルのところに置いておくよ。」

葛「あざっす。」

ひ「じゃ、持つてくるね。」

ガララ…

葛「これが人間界の風呂か。」

魔界にも風呂はあったが、ただでかい浴槽があるだけだった。葛葉からしてみればシャワーというものがとても新鮮なのだ。

葛「これをひねればお湯が…。」

キユ、シャー…

葛「うおつ、すげえ。ちゃんとあつたかい。」

魔界だと浴槽のお湯を浴びてから入っていたが、こっちでは頭と体を洗ってから入るものらしい。

葛「確かギザギザ付いてるのがシャンプー？だっけ。これで髪を洗うのか。で、ポディーソープが体洗う方か。」

戸惑いながらも説明された通りにやっけていく。

葛「おお、髪がサラサラだ。体もスベスベに。舐めてたな、コイツらを。」

コンコン…

浴室の扉がノックされた。

葛「!!? ☒」

ひ「着替え持ってきたからタオルのところに置いとくね。」

葛「(な、なんだひまわりさんか…) あ、ありがとうございます。」

扉のノック音が思ったより浴室に響いたのに驚き、半ば風呂椅子から落ちかけていたがすぐに冷静さを取り戻し返答した。

葛「これでやっと浴槽に浸かれるのか。」

チャプツ…

葛「あ、ちょうどいい。」

あまり風呂が好きではない葛葉がゆったり肩まで浸かっていた。

葛「今日は長いようで短い一日だったな。とりあえず家に居ていい許可は貰えたし、次の課題はブタ探しだな…。」

気づけば5分ほど浸かっていた。葛葉にしては長風呂だった。風呂から上がり、ひまわりが用意してしてくれたタオルで体を拭き、同じく用意されていた着替えを着た。

葛「動きやすいな。これがジャージってやつか。」

上が黒の前がファスナーで開け閉めできるタイプのジャージで、下が灰色の無地ちよつとデカいのジャージだった。偶然だが、胸のところには赤いコウモリのマークが付いていた。

葛「俺にピッタリかよ。」

そのままリビングへ向かった。

社「おつ、上がったか。どうだった風呂は？」

葛「よかったです。1日の疲れが取れました。」

社「そうか。そのジャージも丁度だね。」

葛「そうっすね。」

社「今日はもう遅いし、明日のために寝るといいよ。」

葛「分かりました。」

社「ああ、おやすみ。」

葛「おやすみなさい…。」

自分お部屋へ向かう葛葉。真つ暗な部屋の保安灯だけ付け布団に寝転がる。いつもならすぐに寝れるが、今日はそうはいかなかった。

リビングでは…

社「葛葉くんも上がったことだし、ドーラさんも入ってきたらどうですか？」

ド「うっ、そうじゃな…。」

今までマグマに囲まれたところで暮らしていたため、お湯に浸かるといふ習慣がなかったドーラにとつて風呂は想像できない程のものだった。

社「あ、そうか。ドーラさんには日本の風呂はまだ分からないか。」

ひ「じゃ、ひまど入る？ドーラさんが良ければ。」

ド「…！良いのか？」

ひ「ひまは良いよ！」

社「ひまわり頼んだ。」

ひまわりとドーラがグダリながらも風呂に入ったのは番外編で…。

ひ「ふっ、さっぱりした！」

ド「あれが風呂…、悪くない、かも。」

社「サンキューひまわり！」

ひ「お安い御用さ。それと、おやすみパパ！」

ド「おやすみ、築。」

社「おやすみなさい。2人共。」

階段を上がり、ドーラの部屋の前。

ド「ひまわり殿。今日は色々と感謝じゃな。」

ひ「そんなことないよ！これからも互いに力合わせて頑張つて行こう！」

ド「ああそうじゃな！おやすみ、ひまわり殿。」

ひ「おやすみ、ドーラさん。」

ボタン…

ド「これから、か。長くなるな。」

一方、未だ寝付けない葛葉…

コンコン…

ひ「…葛葉くん、起きてる？」

葛「…一応。」

ひ「入って良い？」

葛「…ドゾ。」

ガチャ…

ひ「お邪魔します。」

葛「どうしたんすか？」

葛葉は起き上がって布団の上に座る。そしてその前に座るひまわり。

ひ「今日、1日通してみてもどうだった？」

葛「まあ、長いようで短かったすね。」

ひ「疲れた？」

葛「まあまあ…？」

ひ「…っふ。」

葛「なんで笑ったんすか？」

ひ「いや、ごめん…。」

葛「…？」

ひ「ひまね、今まで夜は大体1人だったんだ。」

葛「…。」

ひまわりの話が気になり相槌すら忘れる葛葉。

ひ「パパはいつも帰りが遅いからご飯だけ作って先に寝ちゃうんだ。広い家に1

人、なんもない静かな時間がずっと続いていくの。最初は夜空とかみてただけど、さすがに飽きるんだよね…。だからずっと退屈だったんだ。でも、今日からドーラさんも葛葉くんもいるから全然退屈じゃないんだ！そう考えたらなんだか面白くなっちゃって…！」

葛「(ああ、この人は頑張った人なんだ。俺と違って。)」

少しシーンとなった。

ひ「あつごめんね？寝るところだあったのにこんな話しちゃって…！」

葛「…大丈夫ですよ。」

ひ「…え？」

葛「もしこれからも社さんの帰りが遅くて1人退屈になったらとしても、俺で良いならこうやって話でもしましょう。」

ひ「…葛葉くん！うん、もしそうになったら話にくるね！」

葛「いつでも待ってますからね。」

ひ「う、うん！じゃ、じゃあ今日はもう遅いから戻るね、おやすみ！」

葛「おやすみなさい。」

バタン…

葛「…おもしろえ人。」

今度は横になつたらすぐに寝れた。

勝手にド葛本社 第三 五話 「もう一方の夜」

社「葛葉くんも上がったことだし、ドーラさんも入ってきたらどうですか？」

ド「うっ、そうじゃな…。」

知らない風習に対し、若干の不安がドーラの中にあつた。

社「あ、そうか。ドーラさんには日本の風呂はまだ分からないか。」

ひ「じゃ、ひまと入る？ドーラさんが良ければ。」

ド「…！良いのか？」

ひ「ひまは良いよ！」

社「ひまわり頼んだ。」

ドーラの不安を察したのか、社はひまわりと一緒に風呂に入ること提案した。

ひ「ドーラさんこれはどう？」

ひまわりはドーラを連れ自分の部屋にあるクローゼットからドーラのパジャマを探していた。

ド「人間は度々服を着替えるんだな…。」

ひ「うーん、でもその日の服のまま寝る人とか何も着ないで寝る人とかいるって聞い

たことあるよ?」

ド「わしも別に着ないでもいいのじゃが。」

ひ「ドーラさんはダメだよ!?!?」

ド「なんでじゃ?」

ひ「それはその、か、風邪とか引いちやうし…、ドーラさんが裸で寝るとかえつち過ぎだからダメ!!?」

ド「えつち、とはなんじゃ。」

ひ「とにかくダメなものはダメ!」

ド「トホホ…。」

なんやかんやありまして、無事(?)ドーラのパジャマが決まりました。

ひ「やつとお風呂入れる…。」

パジャマ探して疲れたのか少し元気が減ったひまわり。

ド「これから風呂…。生まれて初めて水に入るのか…。」

さつきのドキドキな不安が新たな事へのワクワクになったドーラ。

ひ「脱いだ服はここに入れてね。ひま先入ってるから!」

ガララ…

ド「あ、待ってひまわり殿!」

ドーラはあわてて服を脱ぎ、ひまわりの後に入る。

ガララ：

ド「うわっ、煙が…。」

そこにはドーラが想像していた物とは全然違う世界が広がっていた。

バシャーーン！

ひ「ドーラさん来たね。」

ド「何してるんじゃ？」

ひ「お風呂に入る前はこうやってまずお湯を体にかけてから入るんだよ。ドーラさんもやってみて！」

恐る恐る風呂桶でお湯をすくうドーラ。

ド「こ、これを体にかけるんじやな…？」

ひ「うん！体全体にね。」

ド「ふー、はあ！」

バツシヤア！

ドーラはひまわりに言われた通り勢いよくお湯をかぶる。

ひ「…ドーラさん？」

お湯をかぶったポーズのまましばらく動かなかったドーラを心配するひまわり。

ド「…はっ!!? わし、今意識が…。」

ひ「それはやばいよ!!?」

ある程度お湯（水）にも慣れ、ゆったり湯船に浸かるドーラ。

ド「これはまた、気持ちがいいな…。」

ひ「さつきまでお湯つけただけで意識飛びかけてたのに。」

ド「あれはただ驚いただけじゃ!」

ひ「あれで驚いてたら髪洗えないよ!」

ド「な、何…。髪を洗うじゃと…!!?」

ひまわりはじりじりとドーラに近づく。

ひ「ほら湯船から出て!」

ド「ちよっ、ひまわり殿!!?」

ドーラはひまわりに無理やり湯船から出さされた。

ひ「ここに座って鏡の方向いて!」

ド「説明をつて、何するんじゃ!!?」

今から何をされるのか何一つわかってないドーラに対し、容赦なく髪を洗っていくひ

まわり。

ひ「ひまも髪長い時にこうやって洗ってたから大丈夫だよ！」

ド「髪が濡れてる…、これも水か。」

ひまわりに身をまかせ、不安ながらも髪を洗われるドーラ。

ひ「ドーラさんの髪って洗う前からサラサラしてるからいいなあ…。なにかしてるの

？」

ド「髪か、特になにもしておらんが…。でもひまわり殿の髪と同じくらいではないか

？」

ひ「ひまは髪が短いからこうなだけで、ドーラさんはこんなに長いのにサラサラなの

はすごいよ！」

ド「そ、そうなのか…。なんか恥ずかしいな。」

ひ「よし、それじゃ洗っていくよ。あ、でもひま人の頭洗うの初めてだから目に入っ

て離したらごめんなさいだよ？」

ド「え、濡らしただけで終わりではないのか？なんじやそのドロドロしたのは…、ひ

まわり殿?!？」

せつかく安心し切っていたのにまた焦り出してしまったドーラであった。

ひ「ほらじつとして！ほんとに目に入っちゃうよ？」

ド「いや、だから何を…。ひやう!!？」

シャンプーを泡立たせ、揚々とドーラの髪を洗っていくひまわり。ドーラは未知の感覚に変な声が出てしまった。

ひ「まさかもう目に入った!!？」

ド「んっ、いや大丈夫、続けてくれ…。」

これが人間の風呂という文化なのだ、という勝手な解釈の上それを受け入れたドーラであった。ひまわりに髪を洗われてるうちにだんだんと良い気持ちになっていくドーラ。

ひ「どういい感じ？」

ド「ひまわり殿が上手いから気持ち良いぞ。」

ひ「嘘、ひま髪洗う才能あったの!!？将来美容師あるかも…。」

ド「自信を持って良いと思うが、わしにとつてはいい感じじゃ。」

ひ「ていうかドーラさんの髪の毛すごく長いよね、いいなあ。」

ド「ひまわり殿も伸ばせばいいんじゃないのか？」

ひ「そうしようかな…。」

それから話しながらドーラの髪を洗い、きれいにして再び湯船に戻った。

ド「これで風呂でやることは終わりか？」

ひ「そうだね、これが一連の流れだよ。」

ド「(わしの生きる中で触れることのないと思つていた水にまさか入るとは思つていなかったが、なかなか悪く無いな…。むしろ好ましいまであるぞ!)」

ひ「お風呂気に入った?」

ド「ああ、良いものだ!」

ひ「良かったあ! あ、でもあんまり長居するとのぼせちゃうから気をつけてね。」

ド「大丈夫だ。暑さには慣れてるからな!」

ひ「そうなの? じゃあひまは先に上るね。」

ド「それじゃわしはもう少し入つていようかな。」

初めての風呂を堪能するドーラ。するとひまわりがあることに気づく。

ひ「あつ、ドーラさんのパジャマは用意できてるけど…。」

ド「何か問題でもあつたか?」

そう聞くとひまわりは脱衣所の扉から顔を出して答える。

ひ「その、ドーラさんの替えの、下着がないんだよね。」

ド「下着…? 必要なかそれは。」

ひ「必要かつて、まあ人それぞれだけど…。で、でもドーラさんはその、デカイじゃん…。」

ド「…?」

ひ「ひまの家にはそんなおつきいやつないからどうしようもないんだよね…。」

ド「そうかあ、ちよつと築に聞いてくる。」

そう言つて風呂場から出ていこうとするドーラ。

ひ「ちよつと待つた〜!」

ド「ぬおつ!」

ひまわりが間一髪脱衣所から出かけたドーラを止める。

ひ「ダメだよ!!?」

ド「ええ!!?」

もう少しで大変なことになつてた…、パパが。

ひ「とにかく何も着ないで出歩いちゃダメなの。ドーラさんがもともと住んでたところ

は良かったのかも知らないけど。」

ド「服は必需品なのじゃな。」

ひ「そうゆうこと。まだお風呂入る?」

ド「いや、出てしまったからもういいぞ。」

ひ「ひまがドーラさんのパジャマ持つてくるからこのタオルで身体拭いて待つてて。」

ド「濡れたままではダメなのか。」

先に着替えていたひまわりがドロー用のパジャマを取りに行く。

ひ「はいこれ着て、つてまだびちやびちやじゃん！」

ド「ちゃんと拭いたほうだぞ？」

ひ「ほら後ろむいて、背中濡れたまんまだよ。」

ド「そんなに拭いてしまったら水に濡れた意味がないではないのか？」

ひ「お風呂は疲れた身体を癒す為だつて。パパが言つてたよ。」

ド「身体を癒す、か。」

ひ「下着はないからしばらくはパジャマだけで我慢してね。」

ド「別にこれからも無くて良いのだが……。」

ひ「いろんな意味でダメ!!？」

初めての風呂を終えリビングに戻るドロー。

社「ドローさん、うちのお風呂どうでした？」

ド「思っていたよりも風呂というものは良いものだな。」

社「ハハハッ、気に入ってもらえて嬉しいです。」

ひ「パパく上がったよ。」

社「おうひまわり、ドローさんの世話ご苦労さま。」

ひ「もう眠いよお。」

社「おっともうこんな時間か、私もお風呂に入ってくる。」

ひ「ひまはもう寝る〜。」

社「寝る前にドーラさんに部屋の場所教えてあげてくれ。」

ひ「は〜い、おやすみパパ〜。」

社「おやすみひまわり、ドーラさん。」

ド「…? おやすみ。」

築は風呂へ、ひまわり達は二階の各々の部屋へ向かった。

風呂を上がり戸締りを確認して二階に上がろうとした時、リビングの電気がついてることに気づいた。

社「(誰か起きてきたのか?)」

リビングの扉を開けるとそこには寝たと思っていたドーラがいた。

社「えっ…。」

ド「あっ…。」

社「こんな時間にどうしたんですか?」

ド「あの、築には言っておきたいことがあって…。」

社「：ちよつと待つててください。」

築はキツチンへ行きお湯を沸かしインスタントコーヒーを入れて持つてきた。

ド「これは？」

社「どうぞインスタントコーヒーです。」

ド「ズズツ、苦っ！」

社「あれ、もしかして苦手でした？」

ド「いや、まさか苦いとは思っていなかったただけだ。」

社「もしあれでしたら紅茶とかに変えますけど？」

ド「このままで良い。」

社「そうですね、それで言うておきたいことは？」

ド「ああそのことじゃが：、いやまだ良い。」

社「ええ：、気になるんですけど。」

ド「悪いがまだ言わんでおくことにした。」

社「気になるな。」

ド「（わしがドレイクということはまだ秘密じゃな。せつかく出会えたあつたかい人達なのじゃから）」

社「というかそのパジャマはひまわりのですよね？」

ド「そうじゃ。」

社「よく着れましたね。」

ド「少々胸がキツイがこれしかないのな。少し動いただけでも……」

ド「ドーラが腕を後ろに回した時、ブチンと音がした。」

社「……は。」

ド「ほら簡単に止めるやつが取れてしまうのじゃ。」

その音の正体はドーラのパジャマの胸のこのボタンであった。

社「ちよつ、ドーラさん見え……!」

ド「ん? あつ、こうなるから下着着ろとひまわり殿が言っていたのか。」

社「下着着てないんですか!?!」

ド「やはりダメなのか。」

社「はあく、明日学校帰りにひまわりに買ってくるよう頼もう。」

ド「ではわしは寝るとするか。」

社「私もそうします。」

ド「なんじゃつけ、おやすみ?」

社「おやすみなさい、ふああ。」

次の日の朝。

ひ「パパ、葛葉くん達起こして来て〜！」

社「はい。」

部屋順的にまず起こすのはドーラ。

コンコン

まずはノックだけ。

ド「…。」

社「起きないか、入りますよ。」

ガチャ

ド「ん…。」

ドアを開けると布団を抱きながら丸まって寝ているドーラが寝返りをした。

社「ドーラさん朝です、起きてください。」

ド「ん…？」

社「色々説明があるので起きてください。」

ド「ん、はあ…。」

ゆっくりとあくびをしてドーラが起きる。

社「おはようございます、ぐっすり眠れましたか？」

ド「ああ、寝心地の良いベットにしてもらったからの。」

社「では私は葛葉くんも起こすので先に下に行つててください。」

ド「分かった。」

ドーラの次は葛葉の部屋へ行く

コンコン

?社「葛葉くん入るよ。」

ガチャ

ドアを開けると買った分厚い黒のカーテンがすっかりしまつており、陽の光を完全に遮断していた。

社「すごく暗いな、葛葉くん朝だよ。」

そう言つて築はカーテンをちよと開けた。

バタン!!

葛「ツスー、あんまり開けないでもらつて良いですか？」

築は飛び起きた葛葉に驚いた。

社「えっあつ、ごめん！」

葛「そこ開けられると顔面に直射されるんで。」

社「そっか、身体弱いんだっけ。」

葛「…おはようございます。」

社「あ、ああおはよう。」

葛「…。」

社「…。」

葛「…で、天気良いっすねえ。」

社「そ、そうですね…？」

葛「下りますか…？」

社「あつ、はい。」

朝から葛葉の謎の空気を味わった築であった。リビングへ行くとひまわりがドローラに今日の仕事の説明をしていた。

ひ「あつおはようパパ、葛葉くん。」

社「おはよう。」

葛「おはようございます。」

ひ「今ちょうどドローラさんに今日の仕事の説明終わったから葛葉くんの方はパパがお願いね。」

社「了解。」

葛葉も築から仕事を説明された。

社「それじゃ私は先に出るよ、2人とも家事を頼んだよ。」

葛「了解っす。」

ド「任せろ！」

社「では行って来ます。」

ド・葛・ひ「行ってらっしゃーい！」

その後少ししてから。

ひ「ひまももう行くね。」

ド「いつてらっしやい！」

葛「いつてらっしやーい。」

ボタン…

ド「…じゃあ各々始めますか。」

葛「そうっすね…。」

家に2人きりという気まずい状況の中、課せられた仕事を始める2人であった。

勝手にド葛本社 第四話 「再開と信頼」

ひまわりが家を出た後ドーラは朝の洗い物を、葛葉は洗濯を各々始める。

ド「えーとこのすぼんじを使って…。」

朝ひまわりが社のと自分の分の弁当、それからドーラ達の昼飯を用意した時に使ったものと、食べ終わった昼飯で出た洗い物をするのがドーラの仕事だ。

ド「これは何で作られているんじやろうか、わしらの使ってたものより硬い素材でできてるんじやな。」

人間界の皿や鍋に興味が生まれたドーラ。

ド「ん？こつちの皿はさつきより軽いし柔らかい素材でできているのか。あまり力を入れないようにしないとすぐに壊れてしまいそうじやの。」

陶器とプラスチックの素材の違いに気づき、たった二つの皿を洗うのに10分以上かけているドーラである。一方葛葉という…。

葛「一応社さんには教えてもらったけど、あつちにいた頃は全部任せてたからな。なんか新鮮だな。」

初めてする洗濯に新鮮さを見出していた。

ピッ：

葛「つと、これで良いんだっけ？んー、考えてもわかんねえわ。あ、でここに表示されてる時間が終わったら次の作業に移るって言うってたな。」

洗濯が終わるまでやることがない葛葉は、今自分にどのくらいの魔力が残っているか気になった。

葛「その前に、ドーラさんは今何してるかみとかないと。」

見られたらすつごくマズいので確認しに行くことにした。

ガチャ：

葛「…。」

リビングの扉を少しだけ開け、そこからドーラを覗く作戦だ。

ド「この黒い取手のついた皿はなんじゃ。デカいな。」

葛「フライパンを知らないのかあの人（超小声）。」

ド「…？そこに誰かおるのか。」

葛「今のが気付かれた!?？」

即座に脱衣所まで下がって洗濯し終わった感を出して待つ葛葉。そこにリビングからドーラが出て来た。

ド「…？ここら辺から音がしたんじゃけどな。あつ葛葉殿、さつきリビングの辺りに

来たかの？」

葛「え、今洗濯し終わったんですよ。」

ド「そうじゃよな、わしの勘違いのようじゃ。スマンの。」

そう言つてリビングに戻るドーラ。

葛「…地獄耳にも程があるだろ。」

ドーラの周りではあまり変なことへはできないと思つた葛葉だつた。

ピー、ピー…

葛「あ、ほんとに洗濯終わった。」

カゴに洗い終わった洗濯物を入れ外に干しに行く。

ガララ…

葛「ズボンはそのまま干して良いと。で、細かいのは物干しハンガー、Tシャツ系は

ハンガーに、か。」

社の教えを思いしながら干していく。

葛「これはこつち、これはこつち、…ん？なんだこれ。」

ズボンやシャツに埋もれてた何かを見つけ、手に取ると。

葛「なっ！これ、ひまわりさんのパ…。」

洗濯機に入れた時には気づかなかつたひまわりの下着に驚く葛葉。目を背けながら

ササつと干していく。

葛「俺が洗うのに無神経なのかあの人は、クツソ顔が熱い……。」

思わぬことに赤面しながらも淡々と干していった。その頃ドーラはやつと洗い物を終わらせたところだった。

ド「ふう、これで終わりか。何をしようかの？」

特にやることもなかったので気になっていたテレビを見始めた。

ド「こんな薄い板の中で人が動いておるなんて、人間はすごいのを作るな。」

現代の技術に感銘を受けるドーラ。昨日社が使っていたのを真似てリモコンで操作する。

ド「おお、色んな場面が変わる。面白いな。」

チャンネルを次々に変えて遊び始める。

ド「どれか見てみるか、えい。」

適当にリモコンを押し、映った番組を見るようだ。

ド「なんじゃこれは。」

偶然にも映ったのはとある恋愛ドラマのクライマックスシーンだった。

ド「人間の男女の家族の話か？」

その時、恋人同士でキスをしたシーンがアップで映る。

ド「な、何をしてるんじゃない？変じゃ、見てるだけなのに身体が熱くなってる…。変な感じじゃ。」

初めてみるキスシーンに心が反応していた。

ド「心臓がドクドクしてる。人間の家族はこんなことをするのか…。」

恥ずかしながらも画面に見入っていた。そこに洗濯物を干し終えた葛葉が入って来た。

葛「終わりました、って何してるんですか？」

ド「…いい、いや何もしとらんかったぞ。」

いきなり入ってきた葛葉に驚き、すぐにテレビを消したため変なポーズになっていたところだけ葛葉に見られたドローだった。

葛「あれっすね、腹減ってないですか？」

ド「え、言われてみれば確かに減ってるかも。」

葛「ひまわりさんがなんか飯用意して言っちゃましたよね。…食べましょうか？」

ド「そうじゃな…、食べようか。」

気付けば時刻は12:00を過ぎていた。2人は無言で食べる用意を始めた。

葛「あれっすね、完全に冷めてるんで温めますか。」

ド「どうやるんじゃない？」

葛「これに入れてボタン押すだけっす。」

ド「便利じゃの、冷えてる飯は美味しくないからの。」

葛「っす。」

チン！

ド「これで出来たんか？」

葛「取り出して、あつつあ!!？」

ド「熱いものなら任せてくれ！熱さには慣れておるから大丈夫じゃ。」

葛「感謝…。」

用意を終え食べ始める二人。

ド「いただきます！」

葛「いただきます。」

ド「んゝ美味い！知らない料理じゃが、流石ひまわり殿じゃな。」

葛「これはチャーハンですね。俺もあんまり食べたことはないっすけど、今までで一

番の美味さっす。」

ド「ちゃーはん、か。面白いな名前だな！」

それから特に会話も生まれずに食べ続ける二人。何かをしていれば無言でも気にならないらしい。そのまま食べ終わるまで何もなかった。

葛「ご馳走様でした。」

ド「ごちそうさまでした！」

葛「ドーラさんはこの後また洗い物ですか？」

ド「そうじゃな、これらを洗って終わりじゃ。」

葛「わかりました。俺は自分の部屋にいるんでなんかあつたら…、では。」

ド「了解じゃ。」

ドーラは再び洗い物を、葛葉は自分の部屋でさっきの続きをし始めた。

バタン…

葛「ここなら見つからないだろう。よし、やるか。」

残りの魔力を確認するのは簡単だ。身体中の魔力を一箇所に集めて具現化させるだけだ。

葛「…ハッ！」

気合を入れると葛葉の右手のひらに青いモヤが現れる。

葛「嘘だろ、これしかないのか。使えるのはほとんど無いな。どうやって補充するんだっけ。」

魔力の補充方法を思い出していると、他の大事なことを思い出した。

葛「なんかあつたって誰か言ってたよなく…、あつ豚だ!!？」

そう、世話係の豚の存在を今のいままですっかり忘れていたのである。

葛「そういうやここ（人間界）に来て落下した時にはぐれたのか。あいつに聞かねえとわかんねーのに、つたくめんどくせえな…。探すしかないか。」

とは言うものの、豚がいまどこにいるかなんて知るはずもない。

葛「はあく勿体無いけど使うしかないな、『千里眼』！」

葛葉の片目が光り願った特定の物が見えるようになる特殊能力である。今の魔力で使えるギリギリの力だ。

葛「どこだ…、もしかして誰かに捕まって喰われたか？あれは俺のモンだぞ…。あついたぞ！」

なんとか豚を見つけた。まだ喰われてはいない様だ。

葛「結構遠いな、見失う前に捕まえに行くか。」

飛ぼうと思ったが万が一のために魔力を残しとこうと思い、歩いて探しに行くことにした。リビングにいるドーラに一言言ってから出ていく。

葛「ドーラさん俺ちよつと出かけてきます！」

ド「えっ、あ、わかったぞ！」

バタンツ！

玄関が勢いよく閉まった。

葛「嘘だろ、確かにこの先なのに…！」

サワツ：

葛「ヒヤアツ!! ってまたお前かよ！」

行き止まりに立ち尽くしていると、再び足元に触れた黒猫に驚いた。

葛「なんなんだよ、俺は食いもん持っていないぞ。」

猫「ネ〜ゴ…。」

その黒猫は薄く開いた黄色い目で葛葉を見て鳴き、そこに積み重なっているゴミを飛び乗って行く。

葛「…そうやって行けば良いのか？」

猫「ナ〜ゴ…。」

半信半疑ながらも何かを黒猫から感じ、その跡を追う葛葉。

葛「なるほどこうやってこの壁を乗り越えるんだな。てことはこの先に豚がいんのか
!」

行き止まりかと思っていたその壁を越えた先に小さな広場があった。

葛「おい! どこにいった豚！」

葛葉が呼ぶと正面から声が。

豚「あ、ラ…ラグーザ様…。」

葛「…！そこにいんのか豚！」

豚の声の方に進もうとして広場に出た途端…。

バサッ！

葛「ぬあ!!」

待ち伏せていた野良猫たちに押し飛ばされた。

葛「なんだこの量…?!? 20〜30匹はいるぞ！」

豚「ここは、この野良猫たちの、集まり場所なんです…！」

葛「クソツ！にしても数が多すぎる…、どうしたら、ん？」

どうやって豚を助けるか考えていると、また足元に何かが触れた。

猫「ニヤ〜ゴ…。」

葛「さっきの黒猫、すまんが今は遊んでられねえんだ！」

その黒猫を端へ寄せようとした時、黒猫が葛葉の方を踏み台に広場の真ん中まで跳んだ。

猫「…。」

葛「おい、こつちに来い！」

すると黒猫はまた薄く開いた目で葛葉を見て、今度は何も言わず振り返った。

猫「…ナ〜ゴ、ニヤ。」

黒猫が静まり返った広場の真ん中でそう鳴くと、周りの野良猫は静かに広場から逃げていった。

葛「え、お前ここの長かなんかか？」

猫「フニャ…。」

黒猫はそう鳴くと葛葉の足元に触れ広場から出て行った。

葛「なんだったんだ、あの猫。ハッ！おい豚、大丈夫か？」

豚「はい、ラグーザ様…。よくご無事で。」

豚の声はすぐ弱っていた。

葛「お前、あの時から何か食べたのか？」

豚「落下の途中でラグーザ様と離れてしまった後、近くにいるだろうと思い探したのですがここは人間界なので人に見つかるはずなので路地裏に隠れたんですよ。それがここで…、今までここで捕らわれてました。」

葛「そうだったのか、それとお前に言わなきゃいけない事があるんだ。」

葛葉は豚に今の自分の状況を伝えた。

豚「…ラグーザ様が、人間の家に住ませてもらっている？」

葛「俺を助けてくれた人に恩を返さなきゃなんないだろ？それに人間界に他に住むところなんてないし。」

豚「ですが…、万が一、ラグーザ様が吸血鬼だとバレたらどうするんですか？」

葛「バレないようにするしかない。」

豚「そんな、簡単に言いますけど…：うっ。」

葛「おい大丈夫か!?!？」

ギョルルルル…

豚「すいません、何も食べてないんです。」

葛「はあく、心配させんなや！」

葛葉は豚を服の中に隠し、路地裏をあとにして家へ戻った。

ガチャ…

葛「…ただいまです。」

ド「お、葛葉殿帰ったか。」

葛「また上にいますね。」

ド「はい。」

そそくさと自分の部屋に戻る。

バタン…

葛「はあー、疲れた。」

豚「ぷはっ、本当に家に住んでるんですね。」

葛「んだよ、信じてなかったのかお前。」

豚「そりやいつもぐうたら寝てるラグーザ様が人間界でうまくやってけると思ってたま
せんでしたからね。」

葛「あーなんか急に肉食いたくなってきたなー。」

豚「すいません嘘ですって！そんな肉に飢えたマンティコアみたいな目で見ないでく
ださい！」

葛「まあ良いや、聞きたいことがあるからなんか食える物探してくる。」

キッチンに向かい何か食べれそうなものを探しているとドーラが来た。

ド「何しとるんじゃ？」

葛「え、あついや、別に何もしてないですよ？」

ド「そうか、それともうそろそろ洗濯物乾いたと思うんじゃが……。」

葛「あつ忘れてた。」

自分の仕事をすっかり忘れていた。

ド「ひまわり殿はあの時計つてのに書いてある3の時に帰ってくるって言ってたぞ。」

葛「そうなんすね……。(あと2時間後には帰ってくるのか。早めにやらないとな。)」

手当たり次第にキッチンを探したが特に食べれるものがどこにしまっただけあるのか分
からず、結局何も見つからなかった。仕方がないので洗濯物だけ取り込んでおくことに

した。

葛「ちゃんと乾くものなんだな。」

初めて洗濯を一から自分で行った葛葉にとってそれは喜びなのかもしれない。

豚「ラグーザ様……？」

頭の上から豚の声が聞こえた。

葛「ぶ、豚?!? お前何してんだよ! バレたらヤバいってお前が言ってただろうが!」
上を向いていつては見たものの、そこには豚の姿はなかった。

豚「あ、もしかしてこの能力のこと忘れてました?」

葛「お前どこにいんだよ。」

豚「『ビジブル』」

豚がそう言うと葛葉の足元にフツと現れた。

葛「お前それ、魔術か!」

豚「そうです。ラグーザ様が以前に父上様に覚えると言われ渡されていた本で学んだのですよ。もしもの時に使えるって兄上様も言っていたの覚えてませんよね。」

葛「あゝ、なんか言ってたような気がしてきたわ。てかそれ使えるんだつたらなんで野良猫なんかに捕まってるんだよ。」

豚「それがまだ未熟だったため気配が残ってたらしいです。」

葛「なるほどね、でもそれ使えばお前もここで過ごせるじゃん。」

豚「そうなんですけど、あまり長時間使えないんですね。これ結構集中力使うんで長くても30分くらいですね。」

葛「俺も使えるのか？」

豚「簡単ですよ。消える時は『インビジブル』。現れる時は『ビジブル』って唱えるだけです。」

葛「よし、『インビジブル』。」

唱えたが特に体に変化はない。自分じゃ消えてる感がないようだ。

葛「なあこれ消えてんのか？」

豚「さすがラグーザ様、魔術特性をお持ちのようで。全く気配を感じません。一度、余計なことを考えて集中を途切らせてみてください。」

葛「…、どうだ？」

豚「全く感じません、何も変わらないなんて。この術は魔力を詠唱時にしか使用しないので時間は関係ないし、消費もほぼ無いです。」

葛「これは使えるな。よし！」

洗濯物を畳んで、早速外へ食べ物を探しにくくことにした。

豚「ラグーザ様！この魔界で使用できる紙幣をこちらで使えるように変換するのでお

待ちを。」

葛「お前色々持ってきてきたけど、そんなままで持ってきてたのな。」

豚「どう考えても必要でしょう！」

葛「どうせお前が持ってくるって思ってたから俺は持ってきてないけどね。」

豚『「コンバージョン」』。はいこれが人間界で使えるお金です。」

葛「おお、なんだこれ紙と丸い金属？」

豚「それぞれの価値まではわかりませんが、多分この金色の一番でかい丸が高額でしょう。」

葛「ならこれ持って行くか。」

お金を握り締め、部屋を出てリビングへ向かう葛葉を止める豚。

豚「待ってください！」

葛「なんだよ！」

豚「せっかく覚えた魔術、使わないんですか？」

葛「あ、そっか。なんだっけ『インビジブル』だっけ。」

豚「あ待ってください！見えなくなりますから！『インビジブル』。」

葛「なんだ同じ術使えばうっすらお互いのこと見えるのか。」

こうして家からバレずに抜け出す方法が見つかった葛葉であった。近くの通りに出

て何か食べ物を買えるところを探す。

豚「ラグーザ様、あそこに人間界での一般的な便利屋であるコンビニがありますよ！」

葛「なんだそれ？行ってみるか。」

とりあえず見つけたコンビニまで行ってみた。

葛「何が売ってんだろ。」

豚「そうですね、ワタシが知ってる情報だと食べ物から軽い日用品、本、雑誌なども売っているところって聞いたことがあります。」

葛「本当に便利屋じゃねーか！早速なんか買うぞ。」

豚「お待ちください！ラグーザ様は魔術を切らないですよ！」

葛「そーいや忘れてた。『ビジブル』。」

店の影で魔術を解除し、いざ入店する。

ウーーン…

店「いらつしやいませー。」

葛「うっ？…なんだこう言う挨拶かよ。」

豚「人間界では挨拶は基本になってますからね。まあお店での挨拶は返さなくて良いですけど、対人の場合はしっかりと答えてあげてくださいよ？」

葛「分かってるよ気付かれるから黙ってる！」

豚「ふぎゅっ！」

肩にしがみついて講釈を垂れる豚の額をデコピンして黙らせる。店に入って雑誌コーナーを過ぎ、突き当たりにある飲み物コーナーの前で立ち止まる。

葛「めつちや飲み物ある。どれか買おうかな？」

豚「…補足いいですか？」

葛「んまあ長く無いならいい。」

豚「ラグーザ様の容姿だとこちらから見て左側の酒類の物は買えないのでご注意ください。」

葛「なんでだ？俺あんま飲まないけど酒飲めるじゃん。」

豚「簡単に言いますと人間界では生まれてからどのくらい経ったかを示す年齢というものが大体の物事の基準とされています。それは売買にも適応されておりこの酒類は20歳以上では無いと買えないのです。」

葛「お前俺が何歳だと思ってるの？軽く100は超えてんだぞ。」

豚「ですけども！ラグーザ様が20歳を超えているという証明ができないんですよ。今のラグーザ様の容姿だとどうしても20歳には見えないんですよ。」

葛「見た目で判断されんのかよ…、まあいつか酒買わねえし。」

豚「他にもありますけど、その時が来た時に言いますね。」

一通り説明し終え、適当に飲み物を買ひ弁当コーナーへ行く。

葛「これ全部こっちの料理か、色々あるな。」

豚「こっちの弁当と呼ばれる箱型の入れ物に入った方は結構お腹いっぱいになります。それからそっちにある三角形の包みに入っているのはおにぎりといって、日本の古くから食べられている物です。」

葛「俺はさつき食べたからいいけど、お前はどれが食いたい？」

豚はゆつくりとコーナーを見て気になったおにぎりに決めた。

豚「これをお願いします！」

葛「シーチキン？どんな生き物だよ…。これだけか？」

豚「え、もう一ついいんですか？！」

葛「まあお前が持ってきた金だしな…。」

豚「じゃ、じゃあこれも！」

豚は嬉しそうにおにぎりをもう一つ頼んだ。

葛「これをどこで買うんだ？」

豚「その正面のレジというところです。」

葛葉は恐る恐るレジに近く。

店「お待ちのお客様、こちらへどうぞ。」

葛「あっはい！」

豚「そこに買う物を置いてください。」

店「えー、飲み物2本…。」

店員が会計を進めていく。

店「…で、合計500円ですね。」

豚「ラグーザ様、先程のお金を出してください!」

葛「えーと、これか!」

チャリーン…

店「…。」

葛「あれ、違った?」

豚「まさか足りない…?!?」

店「500円ちようどですね。ありがとうございます!」

葛「あれ、終わり?」

豚「そのようですね。買ったもの持って出ましようか。」

会計での金銭感覚がわからないまま店を出る。

葛「本来の目的達成できたし、いつか。」

豚「そうですね!」

そのままコンビニの影へ行き買ったものを食べ始める。

葛「…どうだ？」

豚「…！お、美味しいですよ！」

葛「まじで!?？一口くれ！」

豚「…どうですか？」

葛「…うまいけど、ひまわりさんの作った飯の方がうめえ。」

豚「これより美味しいのですか！ああワタシも食べたい…。」

買ったものを食べ終え、家へ帰ろうとすると。

葛『『インビジブル』。』

豚『『インビジブル』。あれ？』

豚の魔力が切れてしまった。

葛「お前、魔力切れかけてたのな。」

豚「使い過ぎました…。」

しようがないので葛葉の服の中に隠れて帰ることになった。

葛「あれ、こつちだよな。」

豚「道覚えてないんですか？」

葛「途中までは覚えてんだけど…、あれ〜？」

豚「心配ですよ…。」

その後家近くの通りまで戻ったのはいいものの、そこから家とは真逆の方へ行つてしまつた。

葛「あれ、ここどこだ？」

豚「どこに行つてるんですか？」

葛「…迷つたかも？」

豚「やっぱりこうなると思つたあゝ!!」

葛「落ち着けてまだ何か手掛かりがあるかもつて、ん？」

葛葉が道の先を目を凝らして見る。するとそこにはドーラとひまわりが歩いていた。

葛「やつべえ!!こつちだ！」

豚「ぶぎや!!？」

すぐに道の端に隠れた。

葛「どうするか…。」

豚「ぷはっ!どうしたんですか？」

葛「ひまわりさん達があつちから来てた。」

豚「ていうことは家はあつちじゃないですか!どんな回り道したんですか!」

葛「そんなことより、このままいくとバレる。俺はバレずに家に帰りたいんだ。」

豚「インビジブルで姿消せば、あ。ワタシが消えないのか。」

葛「その手があったか！」

豚「え、何ですかそのキラキラした目は！まさかワタシを置いて行くのですか!?!?」

葛「俺は消えて通り過ぎるからお前は物陰に隠れながら頑張っについてこい！」

豚「そんな無茶ですって！」

葛「じゃあな『インビジブル』！」

豚「…?!? 待つてくださいラグーザ様！」

葛葉は豚の声も聞かずに走って行ってしまった。

葛「(このまま通りすぎてクリアだ！)」

ひ「あれ！葛葉くんじゃん。何してるの？」

葛「…え、見えてるの？」

あまりの驚きにその場で固まる葛葉。

豚「だから待つてて言ったのにく！」

自身も魔力が切れかかっていたことを忘れていた葛葉だった。

ひ「家にいないと思っいたらこんなところにいたのね。ドーラさんが気づいたらいなくなってたって言ってたから心配してたんだ。」

葛「…スウー、そうっすね、さ、散歩したくなっつて。すいません何も言わずに出で行ってしまっつて…。」

ひ「なんだ、そうだったんだ。でも今度からはちゃんと誰かに行つてから出かけるよ
うにね！」

葛「ほんとすいませんでした。」

ド「まあ葛葉殿も反省してるようじゃし。そうじゃ！葛葉殿もこのまま買い物一緒に
買い物へ行かんか？」

葛「行かせてもらいます。」

反省の意を込めてひまわり達の買い物に付き合うことにした。その葛葉を物陰に隠
れながら追い続ける豚。

豚「ラグーザ様をどこへ連れて行くんでしょう!?？」

ひまわりはいつも学校帰りに寄っている商店街に来た。

ひ「ここでいつも買い物をしてから家に帰るんだ。」

ド「たくさん食べ物があるな。これは売ってるんか？」

ひ「もちろん！そうだな、ドーラさん今日何が食べたい？」

ド「えっ、わしはひまわり殿が作ったものならなんでも良いぞ！」

ひ「えへへ嬉しいな！でもリクエストはない感じ？」

ド「そうじゃな、わしはまだこの料理をよく知らんしな。」

ひ「そっかあ、じゃ葛葉くんは何かある？」

葛「俺も特には…、ああ肉系が食べたいですかね。」

ひ「お肉、ね。おつけく今日の夜ご飯決定！さあ買いに行こう。」

商店街をぐるぐる周り必要なものを買い揃えて家へ帰る。その3人の後を未だ何を
してるか分からずついて行くしかない豚であった。

ひ「葛葉くんはどこ辺まで散歩行つたの？」

葛「ほんと近場までつすね。コンビニあたりまで。」

葛葉の言葉を聞き、何か思い出したドーラ。

ド「葛葉殿が言っておるコンビニとやらはあつちの坂上にあるやつか？」

ドーラが方向を指差しながら聞く。

葛「そうです。ドーラさんも行ったことあるんですか？」

ド「わしが築と出会ったのはあのコンビニじゃったもん。」

ひ「ええ〜！パパと初めて会ったのそこなんだ！」

葛「出会いが運命みたいですね。」

ド「そうなのか？」

葛「そんな事なかなか無いですよ。」

ひ「でも葛葉くん。あそこ覚えてる？」

ひまわりが指をさしたところには一本の電柱が立っていた。葛葉が何の事か思い出している。

ピカッ！

葛「うわっ！めっちゃ明るい、ってここは俺が気を失う前にいたところ…？」

ひまわりは葛葉の方に振り返る。

ひ「そうだよ！ふふっ、ひまが葛葉くんと初めて会ったところだよ。」

ド「他のものより明るいな…。」

葛「俺、この光に誘われたみたいにここに来たんだ。」

ド「これも運命というやつかもな…。」

3人は微笑みを浮かべながら家へ帰った。その明るい電柱の光は3人を包み込むように見えた。

豚「ラグーザ様、ワタシのことまた忘れてませんか…？」

ここまでずっと物陰に隠れながら後を追ってきた豚は葛葉に対する不満をどう解消するか悩んでいた。

ガチャ…

ひ「ただいまあ。」

ド「ただいま。」

葛「ただいま。」

買物に時間がかかってしまいすぐに夕飯の支度をするひまわり。

ひ「ひまはこれから急いで夜ご飯の準備するから、葛葉くんはお風呂追い焚きつけてきて！ドーラさんは暇のお手伝いしてくれる？」

ド「わしにできることなら手伝うぞ！」

葛「うつす…。」

ドーラはひまわりとキッチンへ向かい夕飯の支度をし、葛葉はひまわりに言われたことをするために風呂場へ向かう。すると廊下の窓を叩く音に気づく。

コンコン…！

葛「なんだ？」

窓の外には疲れ切った豚がいた。

豚「…ラグーザ、さま。ワタシのこと忘れてましたよね。はあはあ…。」

葛「あ、いや、そんなことは、あるかも…。」

豚「後でお話があります。先にお部屋に戻ってますね…。」

葛「バレないように、な…。」

葛葉に顔を合わせないまま物陰に潜み、二階へと消えて行った。

葛「若干ピキってるな、あれ…。」

豚に対して少しだけ罪悪感が生まれたが、終わったことだしという気持ちでその感情は無くなっていった。追い焚きを終えリビングへ戻るといい匂いがしてきた。

ひ「葛葉くんお風呂ありがとね！今こっちで色々作ってるから食べれる準備お願い！」

葛「何作ってるんですか？」

ひ「ふふ〜まだ内緒！」

ド「わしにも教えてくれんのじゃよ。」

何か嬉しそうに料理を進めているひまわり。

葛「用意するのは箸だけで良いっすか？」

ひ「今日はナイフとフォークも使うから、ドーラさん後ろの棚の真ん中から出してくれる？」

ド「ナイフとフォーク？これか？」

葛「それっすね。」

人数分を準備しテーブルに運んで並べて行く。

ひ「あつ、パパの分はまだ準備しないでいいよドーラさん。」

ド「そうなのか？」

ひ「パパはいつつも帰ってくるのが遅いからね。」

ド「よし、こっちは並べ終わったぞ！」

葛「ひまわりさん、この辺の出来たの運びますね。」

ひ「うんお願い！」

ド「わしも手伝おう！」

ひまわりが作った料理を交互に運んでいく二人。

ひ「最後にこれ運んで終わり！」

葛「俺運びます。」

ド「それじゃあわしは座っておこう。」

葛葉が運び終え、席に座る。

ひ「それでは、手を合わせて！」

ド・葛・ひ「いただきます！」

ド「今日の料理はなんじゃ？」

ひ「今日は葛葉くんのリクエストのお肉料理です！鶏肉の照り焼きステーキですね。」

葛「ホントに肉料理にしてくれたんですね。」

ひ「リクエストされたし、最近肉料理無かったしね。」

短時間で仕上げたものとは思えないほど、綺麗に焼き目がついており焼き加減もちよ

うど良いものだった。

葛「これ、うまいですね…。俺これ好きな料理つす。」

ひ「良かった、気に入ってもらえて！」

ド「ひまわり殿は本当に料理が上手じゃな。昼に食べたチャーハンも美味かったぞ！」

ひ「えへへく嬉しいな…。今まではね、この時間は一人で食べてたんだ。」

ド「築は？」

ひ「パパは今日みたいに平日の日はほとんど帰りが9：00以降なの。だから、こうやってパパ以外の人と家で過ごすのが新鮮で楽しいな…。」

少し寂しい表情を浮かべながらひまわりは箸を置く。

ひ「でも今はこうしてみんながいるからひまは全然寂しくないんだ！」

ド「そうじゃな！わしらがやるよ。」

葛「そうですね…。」

わいわい話をして、それぞれ片付けた。

ひ「ひま達洗い物するから先に葛葉くんお風呂入っちゃって。」

葛「ちよつとやる事あるんで、それ終わらせてから入ります。」

ひ「やること？ま、分かったよ。」

葛葉は自分の部屋に行き、静かに鍵を閉めた。

葛「…豚、どこだ。出てこい。」

すると葛葉のベットのの中からモゾモゾと出てきた。

豚「ふあい、ラグーザ様…。」

葛「誰がそこで寝て良いって言った?!?」

豚「ハッ!しまった、つい気持ち良くて!」

葛「飯食ったばっかだけ喰われてえのかお前は!!?」

豚「困ります!すいません!」

鍵は閉めていたものの葛葉の声はリビングに届いていた。

ド「…何を騒いどるんじやろう?」

ひ「葛葉くん、大丈夫?」

葛「やべ、聞こえてる!」

豚「?!?」

ひ「何かあったの?」

葛「いやツスー、む、虫がいてですね…、驚いただけです。」

ひ「そっか、結構聞こえてたから静かにね。」

葛「気を付けます…。」

パタン：

豚「ラグーザ様、気を付けましょうね。」

葛「チッ！」

ガツン！

豚「プギャー！」

葛葉は注意された原因である豚に煽られたことにイラ立ち、軽く豚の頭を殴った。

葛「いいか？ここは俺の部屋なんだ。雑用係のお前が寝ていいところじゃないんだ。」

豚「ワタシいつからラグーザ様の雑用係に？世話係じゃなかったですっけ…。」

葛「ここ（人間界）では世話はしなくていい。だから雑用係にした。」

豚「はあ…。それでワタシはどこで過ごせばいいのですか？」

葛「そうだな。」

部屋を見渡して何か隠せそうな場所を探す。

葛「あ、ここはどうだ？」

豚「どこです？」

葛葉が指したのは扉脇のクローゼットだった。

豚「クローゼット…？」

葛「そんなに服ないし、しまう物もないからそこで過ごしてくれないかな。」

豚は少し悩む。

豚「うーん…。」

葛「やっぱダメか？」

豚「ここ以外となると、もうない感じですか？」

葛「あとは…、ベランダ。」

豚「クローゼットで。」

こうして豚は葛葉の部屋のクローゼットで過ごすようになった。

葛「そっぴゃお前、他に何持ってきたんだ？」

豚「え、そりゃあ色々ですよ。」

葛「見せて。」

豚「必要に応じて出します。」

葛「なんで。」

豚「無駄遣いするからです。」

葛「…誰が。」

豚「あなたが。」

葛「…何も言えねえ。」

豚「大体ラグーザ様が必要とするであろうものばかりですので、ご自身で気付かれた

ら出します。」

葛「あつ、じゃあ枕あるか？」

豚「はい。」

豚は持つてきたリュックから葛葉が使つていた枕を取り出す。

葛「俺が必要とするつてこういうことか。」

豚「理解しましたか。」

葛「俺これ使おうかと思つたけど買つてもらつたのあるからいいや。」

豚「枕類も買つてもらつたのですか!?!?」

葛「大体は。」

豚「感謝ですね。」

葛「本当にな…。」

タンタンタン…

誰かが階段を上がってくる。

葛「誰か来る!」

豚『『インビジブル』!』

コンコン…

ひ「葛葉くん起きてる?」

二階に上がってきたのはひまわりだった。

葛「(豚は、消えてるか。)起きてますよ。」

ひ「葛葉くんがお風呂入らないから先に入っちゃったよ。」

葛「あ、忘れてた。」

ひ「それと、ちよつとお部屋入って良い？」

葛「ちよつと待つてくださいね。(豚の荷物を隠さねえと!)」

葛葉は急いでクローゼットに荷物を隠す。

葛「大丈夫だよな…、入って良いですよ。」

ガチャ…

ひ「失礼します…、ごめんね夜遅くに。」

葛「大丈夫つすよ、全然眠くなかったので。」

ひ「さっきの虫のせい？」

葛「そうつすね、変な虫のせいで。」

葛葉は微かに感じる豚の気配のする方へ視線を送る。

ひ「何かいるの？」

葛「あ、いえ何も。それより何か急用ですか？」

ひ「ううん、今日一日どうだったかなって。」

葛「今日一日、そうですね…。まず洗濯は簡単でしたけど干す時に、あつ。」

ひ「干す時に…?」

葛葉は干していた時にあつた出来事を思い出す。

葛「いや、なんでもなかったです…。」

ひ「洗濯物もしっかり乾いてたからこれからもお願いね!」

葛「了解っす。」

葛葉は場を繋ごうと気になっていることを聞く。

葛「そういえば、ひまわりさんの母親ってどこにいらっしゃるんですか?」

葛葉は発言した瞬間にとんでもない間違いをしたことに気づいた。その質問は聞きたくとも簡単には聞けない質問であることを理解していたはずだった。しかし場を繋がねばという焦りからか、判断力が低下していたのか軽々と口にしてしまった。

ひ「…。」

さつきまでの笑顔を隠すように、ひまわりは俯く。

葛「あつ、なんでもありません。ごめんなさい、聞かなかつたことに…。」

その様子を見て葛葉は自分のしたこと愚かさを感じていた。ひまわりはスツと顔を上げる。

ひ「ううん大丈夫だよ。」

葛「すいません。」

葛葉はひまわりが向けたその笑顔が偽物であることに気づいていた。ひまわりはまた顔を隠すように葛葉から顔を背ける。そして語り出す。

ひ「あのね、ひまのママはひまを産んですぐに亡くなつたつてパパから聞いたの。ひまが物心ついた頃にはパパ一人で育ててくれたの。ひまはね、ママを知らないの。パパ二人でと写つてる昔の写真の中のママしか。」

ひまわりは自分の母親について葛葉に教える。

ひ「パパは昔からひまが悲しむからつてママの話をひまの前ではしないの。だからひまもママがいなくなつて悲しくはないんだ。でもパパは今でも悲しんでるんだ、ママがいなくて。だからひまがママの代わりにパパを手伝わないといけないんだ。」

葛「ひまわりさん…。」

ひ「パパの手伝いをしてるうちに料理も掃除も上手くなつてきたんだ！それにパパも喜んでいるみたいだしさ、ひまも嬉しいんだ！」

葛「…じゃあ、なんでそんな悲しい顔で笑うんですか。」

葛葉はひまわりが隠している気持ちに気付いた。

ひ「別に、いつもと変わらないよ！」

葛「いつものひまわりさんの笑顔と違うんですよ。俺でもわかるくらい見分けやすい

です。」

ひ「…。」

葛「俺が馬鹿な質問したからひまわりさんが悲しんでいるのは俺が悪いですけど、自分の気持ちに背いて悲しくなっているんだったら話は違いますよ。」

ひ「ひまは、悲しくなんかない。」

葛「自分の母親がいなくて悲しくない子供がどこにいるんですか。どこかで母親に対する気持ちがあるはずですよ。あなたはそれから逃げてる。社さんのためだと嘘をついて！」

ひ「…違う！ひまは、ママがいなくても、パパがいれば、それで。」

葛「じゃあなんで泣いてるんですか。」

ひ「ぐずつ…。」

ひまわりは葛葉に自分の隠してた気持ちを気付かされ母親に対する気持ちが溢れていった。

ひ「ひまだって、他のみんなみたいにママがいて欲しい…、みんなみたいにママに甘えたい、けどお、ひまのママはいないんだもん…。ひまのわがままじゃ、パパを困らせるだけなんだもん。ひまが諦めないで、パパも辛いんだもん。うわくん…。」

ひまわりは今まで秘めていた思いを全て放った。悲しい顔で作っていた笑顔が崩れ、

涙を流し泣いた。

葛「それが普通なんですよ。その気持ちを今まで秘めれていたんだから、ひまわりさんはとても強いですよ。」

ひ「うわあ〜ん…。」

葛葉はひまわりに対し強い、というとひまわりは葛葉の肩にもたれかかって泣いた。葛葉はなくひまわりの頭を優しく撫でていた。ひまわりが泣き止むまで。ひまわりは子供のように心から泣いた。溜め込んでいたものを全て解放するように。

それからしばらく時間がたった。ひまわりは泣き疲れたのか葛葉の肩にもたれかかったまま眠りについていた。

葛「寝たのか？」

そつとひまわりを抱えて部屋まで運ぶ。

葛「…ひまわりさんの、母親がいない気持ちは俺には分かりませんがそれでも周りのために自分を犠牲にできるその心は、誰よりも強いと思います。だから…。」

葛葉は言葉に出して誓った。

葛「これからはどんな事があっても俺がひまわりさんを護ります。だからもう一人で

抱え込まないで下さい。俺ができるのは、これしかないですから…。」

葛葉が部屋を出かけた時。

ひ「…うん。」

葛「！」

ひまわりは涙まじりの声で返事をした。

葛「明日も忙しいのにこんな辛いことさせて、すいませんでした。」

ひ「いいの、逆に葛葉くんに打ち明けられて良かった。」

葛「俺は何も知らないのに、勢いで物言つて…。」

ひ「ひまはそのお陰で気持ちさが晴れたよ。今までパパにも隠してた気持ちだが、自分でも隠してた気持ちを心強い君に打ち明けられたんだから。」

ひまわりが葛葉に向けた笑顔は、太陽に向かって咲く向日葵のような、そんな笑顔だった。

葛「フツ、ひまわりさんにはその笑顔が似合いますよ。今日はもう遅いですし、俺は風呂入りますね。」

ひ「うん、おやすみ。」

葛「おやすみなさい。」

ガチャ…

ひ「ありがとう……！」
バタン……

社「…21時か。」

これはひまわり達が夕飯を食べ終わり、片付けてる頃の社築である。いつも通りの残業を終え会社を出る。

社「いつもより早く上がれたな。アイツのとこいくか。」

築はケータイを取り出し、とある奴に電話をかける。

プルルル……

？「珍しいね、そっちからかけてくるのは。」

社「まあね、今から店行って話したいんだけど良い？」

？「なんだ飲みにくるんじゃないのね。良いけど、他のやつも呼んどく？」

社「いや、お前だけで良い。」

？「そう、じゃ待つてる。」

ピツ……

築は会社の近くの飲み屋街へ向かう。今向かっている店は築がよく飲みに行く場所

だ。

コンコン…ガチャ…

? 「いらつしやい、社。」

社 「急にスマンな、チャイカ。」

チ 「どうしたの急に。私に何を聞きたいの。」

社 「先週あつたことなんだ…。」

勝手にド葛本社 第五話 「午前中」

築はチャイカにドーラと葛葉のことを話した。するとチャイカはふう、と息をついてから話し始めた。

チ「またアンタのお節介が出たの？」

社「いやまあ、ひまわりもいて欲しいっていうから…。」

チ「アンタ前もそう言ってたじゃない。娘が願ったから住まわせてるって、人はおもちゃじゃないんだよ」

社「別におもちゃなんて思っていないけど…。」

チ「例えの話！んで、何を聞きにきたの？」

築は気難しい顔をした。

社「…まだ、信用し切れてないんだ。ドーラさんは日本のことを知らない外国人つてのはわかってるんだけど、それを装った悪い人とかかもしれないって思ってる自分もいるんだ。葛葉くんは見た目が怖いしさ。」

チ「なるほどねえ。それで、家に置いとくのが不安なのね。」

社「ああ。」

チ「とりあえず、はいこれ。」

チャイカは築にコーヒーを渡した。

社「えっ、なんで？」

チ「アンタ残業明けてここ来たでしょ。これからいろいろ話すから脳を起こすのに必要でしょ。私の奢りだから構わず飲んで。」

社「すまない……。」

そう言つてチャイカがくれたコーヒーを飲む。

社「はあ、お前の淹れたコーヒーは違うな。」

チ「嬉しいこと言うじゃない。ちなみに何と比べてんのよ。」

社「インスタント。」

チ「金払え。」

社「はははっ！」

チ「やつといつもの社に戻った。」

社「そう？」

チ「さて、じゃあさっきの話を続けるわね。」

社「頼む。」

チャイカは息を整え、伝わりやすいように紙とペンを持つてきた。

チ「まず、アンタがここ。んでひまちゃんもここ。」
真つ白な紙の真ん中にそれぞれの名前を書いていく。

チ「これでとりあえずアンタらの関係図ができた。こっからアンタが書くの。」
紙とペンを築に渡す。

社「俺が？」

チ「だってアンタがその人達をどう思ってるかなんて知らないし、自分で書いた方が
しつかり実感するでしょ。」

社「確かに…。」

築はドーラ達に対する今の印象を書く。

ドーラ・日本語はちよつと変だが外国人にしては上手い。好奇心旺盛。

葛葉・礼儀正しい。静かめ↑会話が好きじゃないかも。

チ「ふーん、これが今の印象ね。これだけ見ると悪い人達ではなさそうってのは分か
る。」

社「それに家に住ませる代わりに家の家事を任せただけど、それもしつかりやつ
ててくれるんだよね。」

チ「尚更ね。」

チャイカが何か思いつく。

チ「これはアンタ次第だけ…。」

社「!?…まあそれが一番分かりやすく簡単だけどね。」

チ「アンタが決めることだからね。」

築はしばらく黙り込んだ。

社「少々人として気が乗らないけど、悪い人達じゃないことを証明するには必要なこ

とだと思っから…、やろう！」

チ「そうかい。」

社「色々準備しないとだからもう帰るわ！」

築は席を立て店を出ようとした。

チ「待ちな。」

そう言うとかウンター裏の部屋からがちゃがちゃと何かを持ってきた。

チ「アンタが必要なものってこれらでしょ？」

そこにあつたのは小型のカメラとそれを遠隔で操作できる小型のパソコンだった。

社「え、そうだけど、なんで揃ってんの？」

チ「ふう。オカマには人に言えないものが3つはあんのよ。」

社「そうなのか…。」

チ「気にせず持つって頂戴。ずっと店にあつて邪魔なのよ。」

社「ありがとうチャイカ！」

ガチャン：

チャイカに礼を言い、店を後にした。

チ「：それで見たくないものが映ったらなんて、まあそこまで踏まえての覚悟があつたんでしょね。」

築はチャイカにもらった機械類を持って帰路についた。

ガチャ：

社「ただいま：。」

リビングの灯りは消え、家は静まり返っていた。それもそのはず、実際家に帰ってきたのは仕事が終わった21時から2時間後だったからだ。

社「あ、連絡しておくべきだった。」

キッチンには晩ご飯だった照り焼きチキンがラップかけて置いてあった。

社「冷たい：。せつかくひまわりが作ってくれたのに、ごめん。」

冷たくなってしまったチキンをレンジに入れた時、皿の下から紙が落ちてきた。それはひまわりの字で書かれた手紙だった。

社「なんだこれ。ひまわり？」

そこにはこう書かれていた。『今日はドーラさんと一緒に買い物に行つたんだ！その途中に葛葉くんにあつて今日の晩ご飯はお肉が良いって言つてたから照り焼きチキンにしてみたよ。二人とも美味しいって言つてくれて嬉しかった！その片付けの後にパパの分も作つておくとしたらドーラさんもやってみたいって言つたから教えて一緒に作つてみたんだけど、そしたらドーラさん料理上手なの！びっくりしちゃつた。それでパパの分はほとんどドーラさんが作つちやつたんだよ！ドーラさんの手料理、ちゃんと味わつて食べてね！

ひまわりより』

社「これ、ドーラさんが…。」

築は驚いていた。今までひまわりの料理を食べてきて、見てきた築でもひまわりが作つたものと勘違いするほどの出来だつたからだ。

社「ドーラさんが作つてくれたのなら尚更勿体ないな。」

レンジで温め直したチキンを静かなリビングで食べ始めた。

社「…美味しいな。」

築は食べながらどこにカメラを置くか考えていた。

社「そこしかないな。」

今日はカメラだけ仕掛け、残りは明日仕掛けることにして風呂に入りそして寝た。

ひ「パパく？会社遅れるよ。」

社「あーい。」

今朝はひまわりの呼ぶ声で目が覚めた。

社「ふああ。」

ガチャ：

ド「きやつ！」

寝ぼけたまま扉を勢いよく開けてしまったため、もう少しで廊下を歩いていたらドーラさんにあたるところだった。

社「ご、ごめんなさいドーラさん！大丈夫でしたか？」

ド「大丈夫じゃ！むしろ寝ぼけててぼーっとしてたのが悪い。」

社「ぶつけてなくて良かった。」

朝から事故が起きるとこだった。ドーラは怪我はなかったが何かそわそわしていた。

社「どうしたんですかドーラさん？」

ド「あ、いやなんでもない！」

ドーラは焦りながら階段を降りていく。その途中で築は思い出す。

社「あ、ドーラさん。昨日の照り焼きチキン、とても美味しかったですよ！また何か作ってください。」

するとドーラの頬が少し赤くなった。

ド「…！」

ドーラは何も言わずに洗面所へ向かった。

社「どうしたんだろう？」

ひ「ドーラさん可愛い…。おはようパパ。」

社「おはようひまわり。ドーラさんなんかあったのか？」

ひ「…さあ、何かあったんでしようね。」

社「？」

社と同じタイミングで部屋を出ようとしていた葛葉はその全てを見ていた。

葛「…青いね。」

ひ「あつ葛葉くんおはよう！」

葛「おはようございまスー…。」

葛葉は昨日の夜にあったことを思い出してひまわりと目が合わせられなくなっていた。

社「おはよう葛葉くん。」

葛「おはようございます。」

ひ「なんかひまと反応違うくない？」

葛「そんなことないっすよ…。」

ガララ：

そこに顔を洗い終わったドーラが入ってきた。

葛「お、おはようございます…。」

ド「おはよう葛葉殿。」

社「あの、ドーラさん。私何かしましたっけ…?」

ドーラはさつきのことを思い出して築のいない方を向く。

ド「い、いや。何も悪くないと思う…。気にしないでくれ。」

社「そうですか…。」

ひ「パパほんとに会社遅れるよ?」

社「あ、まずい!」

築は急いで顔を洗いに向かった。

葛「なんか朝から慌ただしいですね。」

ひ「昨日も帰りが遅かったらしいからその疲れが取れてないのかも。」

葛「大変ですね。」

ド「『とても美味しかったですよ!』か。’:ンフフツ。」

ひ「ドーラさん、何か嬉しいことでもあったの?」

ド「えっ! いや、何も? : いつもと変わらんとと思うぞ!」

ひ「そう? すごいニコニコしてたから何かあったのかなって。」

ド「そんなに顔に出てたのか?!?」

葛「すごいしつかりと。」

ド「〜!」

ドーラは真つ赤になつた顔を隠しながらソファの方へ逃げていった。

社「ふう、少し落ち着いた。葛葉くん次いいよ。」

葛「はい。」

社はチラツとテレビの前にあるソファに顔を埋めているドーラを見る。

ひ「: パパ、ドーラさんに何したの?」

横で弁当を準備しているひまわりが小声で聞いてくる。

社「いや何もしてないよ! ただ朝部屋から出た時にぶつかりそうになつたぐらいだよ。」

ひ「それでこの状態にはならないでしょ。その時にほんとにはぶつかつてたんじゃないの?」

社「でもなんで顔が赤くなるんだ？」

ひ「まあ、そのく、当たったんじゃない？」

社「ドアが？」

ひ「…ドローさんの胸が。」

社「なっ!?? そんな感触なかったぞ！」

ひ「いいから早く謝ってきなよ！」

築はひまわりに急かされるようにドローのもとへ向かう。

社「あのく、ドローさん？」

ビクッ！

ド「な、なんじゃ…？」

社「その、朝のことなんですけど…。」

ド「…んっ！」

社「すいませんでした！」

葛「…なんで？」

築がドローに対し土下座したタイミングでリビングに帰ってきた葛葉はその場の状況が理解できずにいた。

ひ「パパがね、ドローさんに対してやらかしちゃったの。」

葛「ええ!?？」

弁当の用意を済ませ他の準備をしながら築のことを遠い目で見て説明するひまわり。

葛「俺が顔洗つてる間に何が…。」

ド「…え?」

社「この通りです! 済みませんでした!」

ド「な、何に対して謝ってるんじや?」

社「朝部屋のドアを開けてドーラさんにぶつかりかけた時に、その、ドーラさんの胸に触れてしまったことです…。」

葛「(あれ? ぶつかってなかったよな。)」

ド「…え?」

社「あの時、葛葉くんも見ていたよね!」

葛「はっ!?」(いや当たってないようにも見えたし、当たってるようにも見えた。これはどっちを言うべきだ? でも社さんもひまわりさんも全てを認めてる顔をしてるから!) …はい、あなたはあの時触れていました。」

社「…。」

ひ「…。」

葛「…。」

三人が黙り込みながらドーラの反応を待つ。

ド「あの時にわしの胸を触ったのか？」

社「…はい。」

築は怒られること、幻滅されることを覚悟していた。

ド「…そんなことで謝らなくても良いのに。」

社「そんな事!!？」

ド「別に胸なんかに触れるのは構わんぞ？」

社「え？」

その瞬間、キッチンに立っていたひまわりが猛スピードでドーラをリビング廊下へと連れ出す。

葛「ヤベエ女人だ。」

ちなみに築はドーラの爆弾発言をもろに受け、思考が停止していた。

3分後…

ひまわり達が戻ってきた。

社「ドーラさん、大丈夫ですか？」

するとドーラの顔が再び真っ赤になり。

ド「さっきのはダメじゃ!!？」

と言つてまたソフアーに顔を埋めた。

社「：でしようね。」

ポカンとしてる築に近づくと葛葉。

葛「社さん、会社。」

そんなことが起きた今日の朝だった。

社「行つてきまーす！」

築はそれから急いで着替えて出勤して行つた。

ひ「なんとか間に合つたかな？」

葛「結構ギリギリでしたね。」

ド「なんだか申し訳ない気がする：。」

さつきのことを気に病んでいるドーラに対し二人が声をかける。

ひ「まあ、あれはパパも悪かつたんだし。そんなにドーラさんが思うほどでもないよ。」

葛「今後気をつければいいと思いますよ。」

ド「そうか：？」

ひ「うん！」

葛葉が時計を確認する。築のことで頭がいっぱいになって気付いていなかったが、ひまわりが学校に行く時間になっていた。

葛「あれ、ひまわりさんも時間大丈夫ですか？」

ひ「あつ、まづい!?？」

ひまわりは身につけていたいたエプロンを急いで脱ぎ、自分の部屋に向かった。

葛「親子だなあ…。」

ド「…。」

葛「(ん?)」

葛葉は『親子』という言葉にドーラが反応したことに気づいた。

葛「ドーラさん、何か…。」

ひ「遅刻だあく！」

気になりましたか?、と聞こうとしたが勢いよく階段を降りてきたひまわりに邪魔さ
れて言えなかった。

ひ「葛葉くんそこのお弁当取って！」

葛「はい、どうぞ。」

ひ「ありがとう！」

そのままバタバタと玄関で身だしなみを整えて家を出て行った。
ひ「行つてきます！」

ボタン！

葛・ド「行つてらつしやい。」

葛「…。(氣まずい。)」

ド「あ、さつき何を言いかけたんじや？」

氣になつた表情で聞いてきた。

葛「ああ…、いや、大したことじやないんで忘れていいですよ！」

ド「そうか。聞きたくなつたらいつでも聞いてくれ。」

葛「はい…。あ、じゃあ俺洗濯してきますね…！」

氣ごちなさを隠せずに、その場から立ち去ることしかできなかつた。

葛「はあ、あの人と二人になると会話ができなくなるのなんぞだ？他と違う何かを感じるんだよなあ。」

謎に生まれる氣まずい状況、それがなんでなのか色々考えてみたけど今じや何もわからなかつた。そんなことを思いながらいつも通りの仕事をこなして行つた。

ド「今日は昨日よりも少ないな。」

今朝の弁当と朝食で使つた食器洗う。

ド「それにしても朝のは自分でも驚いた。初めての料理ではあったが「美味しかった」と言われただけなのに、心臓がおかしいくらい鼓動したからの…。」

ドーラは今朝の動悸がなぜ起きたのか分からずにいた。

ド「あ、昨日のてれびを見ていた時にもなったな、今まではなかったのに。まだ人間界に慣れてないせいかなあ…。」

こちらもまた色々考えては疑問に思っていた。それから10分ほど経った。葛葉は洗濯し終わった物を干すため外に出ていた。

葛「ん？なんか午後から雨降りそうな感じがする…。」

真上は綺麗な青空なのに遠くの空に真っ黒な雲が広がっていた。

葛「これ、乾くか？」

一応全て干したが、乾くまでに雨が降りそうだった。葛葉は不安そうにリビングへ戻る。そこではやることを終えたドーラがテレビを見ていた。

ド「あ、おかし葛葉殿。」

葛「うっす…。なんか、天気、悪くなりそうですねえ。」

ド「そうなのか？」

葛「遠くの空が真っ暗でしたから。…ドーラさんは今何を見てるんですか？」

葛葉は自らふった天気の話が良い判断であったが、そんなに広げられないことに気づ

いた。

ド「いや、特にやることがないから適当につけてるだけじゃ。これ見てるだけでこっちのことがわかるからな。」

葛「そうなんですね。あの、もし良かったら天気予報とかって見てもいいですか？」
葛葉はどうしても気になる今後の天気を知るため、ドーラに頼む。

ド「天気予報…？そんなものがあるのか、見て良いぞ！わしも見てみたい。」
そう言つて葛葉にテレビのリモコンを渡す。

葛「ありがとうございます…。（えーと、貸してもらつたのはいいけど天気予報つてどこで見れるんだ？この数字でも適当に押してたら出てくるか？）」

葛葉は1→12のチャンネルボタンを順々に押していく。

ド「…。」

葛「…。」

ドーラが次々に変わっていく画面を食い入るようにみている横で全然天気予報が見つからないことに焦りを感じてる葛葉。

ピッ…

葛「スウー…。」

全てのチャンネルを回しても天気はやってないわ、一部チャンネルは見れないわで心

底焦つ裏が増している葛葉。

ド「天気予報はないのか？」

葛「アツ、いや、あのく、まだ…、みてないとこあるんで、そこにあると思います…。」

ド「ふくん…。」

葛葉が焦っている理由は、自分が見てたテレビを貸してやったのになんで早く天気予報を見せないんだよ！、とドーラが苛立っていると勝手に勘違いしているからである。実際ドーラは自分の知らないテレビの使い方をこつそりと葛葉を見て学んでいるのである。

葛「早く見つかって！お願い！ドーラさんの視線を感じるたび焦ってくるから！」

その時葛葉の頭の中に直接声が聞こえた。

豚「(ラグーザ様！天気予報を見る方法がわかりました！)」

豚が魔力で語りかけてきた。

葛「(教えてくれ！)」

葛葉は豚が言う通りにリモコンを操作する。

ピツ…

葛「(あつた！)」

豚が言うには、ドーラが適当に触った時にBSになっていたためそこを変えればみれ

る、と言ふことだった。

葛 「豚ナイス！」

豚 「ふふん！」

葛葉は魔力を切り、豚との会話を遮断する。

葛 「ドーラさん、これが天気予報ですよ。」

ド 「おつ、見つかったのか。」

葛 「これからの天気…、やっぱり雨が降るそうです。」

ド 「洗濯物はどうするんじや？」

葛 「午後から降るらしいんで、飯食ったら取り込まないですね。」

ド 「それじゃ乾ききらんだろう？」

葛 「うん…。」

するとまた豚の声が届いた。

豚 「そんな事もあるうかと思つて準備しときました！」

葛 「何する気だ？」

豚 「見ててくださいい！」

豚がそう言うのとテレビが一瞬暗くなつた。その後画面が真っ白になり変な番組が始

まつた。

葛「「なんだこれ？まさかお前が!?!？」」

豚「「任せてください！」」

突如始まった番組では簡単にできる家事の特集を行なっていた。

葛「「おい、これが何になるんだよ！聞こえてんのか？」」

豚の方で切ったようすでこちらの声は届いていなかった。

ド「葛葉殿。今てれびで写ってるやつ、やれるんじゃないか？」

葛「えっ？」

葛葉は振り向き、テレビを確認する。そこには簡単にできる部屋干し講座が写っていた。

葛「部屋、干し…？」

ド「家の中で洗濯物を干せる物なのか？」

半信半疑のまま実際にやってみることにした。

葛「外の物干し竿を家中に持つてくる、らしいので手伝ってもらえますか？」

ド「いいぞ！」

テレビの通りに物干し竿を移動する二人。それを窓際にあつた部屋干し用の金具にかけた。

葛「これで室内干しになるそうです。」

ド「ただ外から中に移動しただけだが、これで乾くのか？」

葛「乾かなかつたら雨のせいにはなりませんし、大丈夫でしょう。」

それから葛葉は自分の部屋に戻った。ドローはりビングで再びテレビを見に戻った。
ボタン…

葛「豚。」

豚「…はい。」

クローゼットからそーつと顔を出して返事をする。

葛「ちよつと出てこい。」

ガラガラ…

豚「…はい。」

葛「さっきのやつ、あれなんだ。」

豚は葛葉の前に正座し、一連の行動の説明を始める。

豚「えー、あれは回復した魔力を使った遠隔操作魔術『リモートコントロール』です。主に操作したい物の構造を理解していれば大体のものをどこからでも操作できる術です。まず人間界のテレビという物の構造を分析し、それからこの術を使ってワタシの脳内を映しました。」

葛「…お前、有能じゃね？」

豚「そうですか？」

葛「人間界でのハプニングに対する対処が初めてとは思えねえ。」

豚はここで葛葉が怒ってないことに気づき、ほっとする。

葛「ていうか、さっきの遠隔操作魔術は分かっただけでその後の自分の脳内を映させたのってどうやったんだ？」

ほっとした顔をしていた豚だったが、それを聞いて顔が変わった。

豚「ラグーンザ様。魔界に存在する魔術の全てを記してある『アルバダ魔術録』ってご存知ですよね？」

葛「ああ、俺が父上から幼い頃に貰った魔術一覧本だろ。」

豚「そうです。そして魔界には使つてはいけない魔術があるのもご存知かと。その使つてはいけない魔術を禁術と言われるのですが、その禁術が記されている『イムルカ魔術録』というのが存在するんです。」

葛「イムルカ魔術録：？聞いた事ないな。」

豚「これは魔術という禁止行為、黒魔術に使われる術が載っている本なんです。別名『イムルカ禁術録』。」

葛「なんでお前そんなに詳しいんだよ。」

豚は深呼吸をし、葛葉に隠していたことを話し出す。

豚「話は遡ること、ワタシがアレクサンドル家に侵入しラグーザ様に捕まった頃のこと。ワタシは元々、黒魔術に使われるはずの生贄だったんです。」

遠くにあつたはずの雨雲がいつの間にか空全体を覆っていて次第に雨が降ってきた。

葛「お前が、黒魔術の生贄だった…?」

豚「はい。」

葛「お前は魔物だろ?」

豚「…正式には実態を持たない魔物がワタシの体に入って魔物化したつてのが正しいですね。だから元はただの家畜の豚です。」

葛「今喋ってるのは豚の方か?それとも魔物か?」

豚「豚の方です。実態を持たない魔物というのただの魔物の魂です。元はワタシの体に乗っ取ろうとしたのでしようが、弱すぎてワタシ自身が取り込んでしまいこうなりました。」

葛「だからお前は学習もするし、二足歩行で歩かし、喋るんだな。」

豚「そうです。」

葛「それでどうなったんだ?」

豚「ワタシが魔物化したのは生贄に使われる二日ほど前のことでした。今までなんかより物事を理解できるようになり、簡単に檻から抜け出せました。出口を探して彷徨っ

ていると黒魔術を行う祭壇のようなどこへ出ました。その祭壇に置いてあったのが『イムルカ魔術録』でした。」

葛「…。」

豚「ワタシは好奇心でその本を開きました。たくさん記してある魔術を見ているうちにその魔術全てを覚えてしまったのです。」

葛「…は?!? お前、禁術全部覚えてんのか?!?」

豚は深く頷いた。

豚「自分でも驚きました。魔物化したことによつて記憶力が大幅に高まった結果だと思えます。」

葛「そのあとは？」

最初は興味持たずに聞いていた葛葉だったが、気づけば豚の話に釘付けだった。

豚「生贄がないことに気づいた黒魔術師たちがワタシを探しにきました。ワタシは捕まらないように必死で逃げました。どこか入り口を探しながら。ちようどワタシくらしいの大ききさで通り抜けれる穴を見つけたとき、奴らに見つかり捕まりましたが咄嗟に覚えたての魔術を使い、ワタシを掴んだ手を吹き飛ばしてなんとか逃げ出すことができました。」

葛「それから俺の家の敷地に迷い込んだのか。」

豚「そうです。何か大きなところへ隠れるつもりで訪れました。まさか大貴族の家だったなんて…。」

葛「まあ、逆に俺らでよかつただろ？」

豚「そうでしたね、結果的には。」

豚は再びいつもの顔に戻った。

葛「それでさっきの自分の脳内を映した魔術つてのがその禁術なのか。」

豚「そういうことです。その術は自分の脳内を相手に移して考えを強制的に変えられる術なんです。」

葛「確かに悪用厳禁な術だな。そんなのが出回れば魔界どころか世界が終わっちゃう。」

豚「だからと言ってはなんですけど、この『イムルカ系』は使う際に『アルバダ』の3倍の魔力を消費します。」

葛「なるほど、連続使用はできないんだな。」

豚「なので、今すぐごく疲れています…。」

ぐてつと横になる豚。

葛「てか、禁術をこんなしようもないことに使うなよ…。」

豚「禁術と言われてますが、使い方次第では通常魔術と変わらないですから大丈夫で

すよ。」

葛「そうなんか…?」

リビングからドーラの声が聞こえる

ド「葛葉殿、そろそろお昼の時間じゃぞ。」

葛「あ、もうそんな時間か。ちよつと行つてくるわ。」

豚「ラグーザ様、ワタシにも何か持つてきてください。」

葛葉は手で返事をして部屋を出ていく。リビングに降りるとドーラが昼飯の準備をしていた。

葛「今日の昼飯ってなんですか?」

ド「おつ、今日はひまわりが『弁当』を作つていつてくれたぞ!」

葛「社さんに朝作つてるやつですよ。」

ド「どうせならみんなの分作っちゃおう! って言つてたぞ?」

葛「じゃあ、今日の昼飯は弁当なんですよ。」

ド「そうじゃ! もう温めたから運んで食べよう。」

葛「あ、温めてくれたんですね。ありがとうございます。」

葛葉はドーラから弁当を受け取り、テーブルに座った。

ド「いただきます!」

葛「いただきます。」

蓋を開けると半分はおかず、もう半分はご飯になっていた。

葛「すごい小さい、でもこれならでもでも食べれますね。」

ド「小さいがしつかり詰まって美味しそうだ！」

葛「(ドーラさん知らない料理だからか、食事の時テンション高いよなあ…。分かるけど。)」

見た感じおかずの方には、野菜を使った物、小さなハンバーグ、それからウインナーが入っていた。

ド「なんだこれは?…ん、美味しい!!」

葛「うん、美味しい。」

葛葉からしてみればハンバーグなどはいつも夕食に出ていた。どれも魔界で名のあるシェフが作っていた物だったが、それに劣らないほど美味しいと感じていた。

ド「どれも名が分からないが美味しいなあ!流石ひまわり殿が作った料理じゃ!」

葛「この丸い肉はハンバーグと言われる料理ですよ。」

ド「葛葉殿、知っているのか?」

葛「どれも昔から食べていた物ですからね…。でもそれより美味しいですけどね。」

ド「そうか、葛葉殿は高貴な方じゃったな。」

葛「家柄なんてどうでもいいですよ。あんな堅苦しいもの……」

ド「……そう言えばなんじやが、なんで葛葉殿が家出したのか教えてくれんか？」

葛「……」

葛葉が口籠ったのを見てドーラが察する。

ド「あ、言いたくないことじやつたら無理して言わんでいい。わしが興味本位で聞いたことじやつたから。」

葛「あ、いえ。言いたくなかったわけではなく、どう説明したらいいか……」

ド「答えてくれるのか……？」

葛「そうですね簡単に言うとは、元々家を出る気だったんです。」

ド「えっ？」

豚「えっ？」

その葛葉の発言はドーラだけでなく、二階で盗み聞きしていた豚も驚くものだった。

社「ご馳走様でした。」

築は会社で昼飯を食べ終わり、残った昼休憩の時間に今朝家につけたカメラの映像を
確認する。

社「これで見れるか？」

カメラをオンにするトリビングの映像が映った。ちょうど葛葉とドーラが弁当を食べながら話をしているところだった。

社「(二人に特に変な変化はないか……。普通に弁当食べてるしな。)」

築は自分がやっている行為に罪悪感を抱いていた。それもそのはず、チャイカに言われた考えというのは『これはアンタ次第だけど、自分の家にカメラを設置してそれではアンタが監視するってのはどう?』と言うものだった。これは確かに実用的で一番簡単な方法であったが、彼らのプライベートを勝手に覗くと言う罪悪感が社にのしかかっていた。

社「(午前中は忙しくて見れなかったけど、何もしていないことを願おう。)」

そのまま見ているとドーラが立ち上がりキッチンの方へ向かった。どうやら食べ終わったようだ。

社「片付けか、ちよつとカメラ近づけるか。」

少しカメラを拡大させた時。葛葉と目があつた。

社「(え!?!気づかれた?)」

ド「葛葉殿食べ終わつたら……。どうした?」

葛「ん、いやなんか目線を感じたんで。」

ド「?そうか。」

社「(これが若い子の動体視力なのか?)」

築はなるべくカメラをいじるのを控えた。

葛「(あの黒いのなんだ?)」

勝手にド葛本社 第六話 「午後」

昼休憩の終わりが近づき、カメラを閉じる築。

社「今のところ、何もやってないみたいだな。」

築はいまだに罪悪感を抱いていたが、ドーラ達が何かしら悪さをするんじゃないかと疑いの気持ちも抱いていた。

ド「わし洗い物するから葛葉殿は戻って良いぞ。運んでくれてありがとう。」

葛「うっす。」

葛葉が部屋に戻ろうとした時。

ピカッ！ゴロゴロ！

大きな雷が起きたと同時に雨が勢いよく降ってきた。

ド「なんじゃ噴火か!？」

葛「うはあアアア!!!」

ドーラはもともと住んでたところが火山の集合地だったため噴火の際に起こる雷など驚くはずがないが、葛葉はビビりなのでその場にうずくまり情けない声を出していた。

ド「まさかこつちでも聞くことになるとは…、で、大丈夫か葛葉殿？」

葛「…クウーン。」

葛葉は静かに頷いていたが、大丈夫ではなかった。

ド「そうか。しかし、随分近かったな。」

外を見れば空が黒く、雨が滝のように降っていた。

ド「洗濯物中に干しといて正解じゃったな。これはひどいの。」

葛「ふ、ふう…。」

ド「雨がすごいぞ。急に降ってくるんじゃない。」

葛「テレビつけてみて下さい。何かニュースやってませんか？」

ピツ

すると緊急のニュースがやっていた。

ド「異常気象…？」

ニュースによると、この時期の急な大雨は過去にも事例が無かったほどのことであり

気象庁も原因が分かっていないという。

葛「なんか夏みたいな天気ですよね。」

ド「そうなのか？」

葛「大体7〜8月くらいってこつちだと夏っていう季節になるんですけど、その頃つ

て急に大雨が降ってきたりするんですよ。」

ド「でも今って冬間近なんじゃろ？」

葛「はい。だから異常気象なんでしょうね。」

ド「おかしな天気ってことか。」

豚「(ラグーザ様、ちよつとお部屋に来てもらっていいですか?)」

葛「(分かった。)」

葛葉は豚に呼ばれ部屋に向かう。

葛「なんだ？」

豚「この天気についてです。」

葛「ただの異常気象じゃないのか。」

豚「はい。これは何らかの魔物が起こしているものだと思います。」

葛「::は？」

豚「この人間界には魔界から来ている魔物が多くいます。大体は人に見つからないように過ごしていますが、中には見つかって『UMA』なんて言われたものもいます。」

葛「あのなく、そんなことは知ってるけどだからって魔物のせいにするのは違うくない？」

豚「良いですか？魔物達は人に危害を加えようとするものが多いんです。だから今こ

うして危害を……。」

葛「そんな妄想ごとは一人でやってくれ。」

豚「あ、ちよつとラギーザ様！」

バタン：

豚「あゝ、行っちゃった……。」

葛「つたく、くだらねえ。」

ド「あ、葛葉殿！」

リビングへ戻るとドーラに呼ばれた。

葛「どうしました？」

ド「さっきあれが鳴ったんじや。」

ドーラが指さす先にあったのは電話だった。

葛「ああ、出れなかったんですか？」

ド「うん。」

葛「なんか用があつたんならまたかかってくるよ。」

プルルルル：

葛「ほら。」

ド「出でてみてくれ。」

ガチャ

葛「はい。」

電話に出ると相手は築だった。

社「葛葉くんか？良かったそつちは停電とかしてないんだな。」

葛「今のところ雷は一回だけですな。」

社「洗濯物とかは？」

葛「早めに雨雲に気付いて部屋の中で干してます。」

社「えっ!?部屋干しできたの…、すごい、ありがとう。」

葛「うっす…。」

ド「(誰と話しておるんじやろうか?)」

社「それで本題なんだが、ひまわりの迎えに行つて欲しいんだ。」

葛「え、まだ早くないですか？」

社「それが学校が停電してしまつて復旧に時間がかかるらしく、雨もひどいから早く帰らせるらしい。」

葛「なるほど、もう向かったほうがいいですか？」

社「そうだな、ひまわり傘持つて行つてないから持つていってくれ。」

葛「了解です。」

社「ありがとう。頼んだ。」

ガチャ

ド「誰だった？」

葛「社さんでした。」

ド「そうか、何の用じゃった？」

葛「学校がこの雨で早めに帰すことになったからその迎えを頼まりました。」

ド「もう行くのか？」

葛「はい。」

葛葉はひまわり用の傘を持って迎えに行った。

葛「雨強っ。」

当然ひまわりの学校の場合は知らないため千里眼を使い学校へ飛んで行く。

葛「あれか。」

大きめの丘の上にひまわりの姿を見つけた。学校の校門前に降りてひまわりを待つことにした。

キーンコーンコーンコーン…

学校のチャイムがなるとゾロゾロと生徒達が出てくる。

葛「(トト)にいればひまわりさんも気付くだろう。」

しばらく待つていると何かに気づく。

葛「(なんかめっちゃ見られる。何でだ、ここって待つ場所じゃないのか・いやでもそんなこと書いてないしな…)」

なんて考えているが通り過ぎる生徒達が葛葉の魅力に惹かれていることに気づくことはなかった。

葛「…ん？あれひまわりさんか？」

下駄箱のところでもバタバタしている二人組を見つける。片方はひまわりでもう片方は笹木だった。

葛「あのピンク髪はひまわりさんの友達か。」

葛葉は校門を通り昇降口に向かう。

ひ「雨で帰り早くなったのは嬉しいけど、濡れて帰れって言ってるみたいだね。」

笹「ええやん早く帰れるだけでも。」

二人は靴を履きながらどうやって帰るか話していた。

葛「(…)にいれば気づくかな。」

葛葉は会話を邪魔しないように声をかけずにいた。

笹「ひまちゃんはどうやって帰るの？うちは濡れて走って帰るつもりだけ…、ど？」

立ち上がって外を見るとそこに見知らぬ青年が傘を持って立っていた。(笹木視点)

ひ「それじゃ風邪ひいちやうよ。下のコンビニで傘買う予定だから咲ちゃんも…。顔を上げるとそこに傘を持った葛葉がいた。(ひまわり視点)

ひ「葛葉くん!!?」

笹「知り合い!!?」

葛「どうも。社さんに迎えを頼まれてきました。」

笹「パパ公認!!?」

ひ「そうなの?わざわざありがとうだね。」

葛「あ、これひまわりさん用の傘です。」

笹「え、ひまちやんコレいたのか…?」

そう言つて小指を立てる笹木。

ひ「ち、違うよ!」

葛「(何で小指?)」

笹「パパに頼まれて迎えにくるのはコレでしょ!!?」

ひ「違うって!」

葛「(コレって何だ?)」

笹「見せつけられた…、じゃあとはお二人で。」

そう言つてきていたパンダのパーカーを被り帰ろうとする笹木。

葛「待つて下さい。」

笹「…何すか？」

葛「傘、ないんすか？」

笹「…ない！」

葛「じゃあこれ使つて下さい。」

葛葉は使つていた方の傘を笹木に渡す。

笹「え。」

葛「もう一本あるんで使つてもらつて。」

笹「…ありがと。良いのひまちゃん。」

ひ「良いよ？」

笹「ふーん。じゃ相合い傘楽しんでね。バイバーイ。」

ひ「なっ！」

そう言つて猛スピードで走つて行つた。

葛「なんか元気いっぱいな人ですね。」

ひ「う、うん。」

葛「俺たちも帰りますか。」

ひ「…。」

葛「どうしました？」

ひ「なんでも、ないよ。」

葛「そうですか。」

ひまわり「佐々木に言われたことで今起きていることを理解してしまっていた。

ひ「(咲ちゃん何であんなこと言うかな…、顔真つ赤で葛葉くんのこと見れないよ。)」

ひまわりにとつて相合い傘は異性とは初めてのことであり、とても恥ずかしがっていた。友達とは全然違った感覚だった。

葛「(ひまわりさんの方、ちよつと肩濡れてる。この傘小さいのか。)」

葛葉はそつとひまわり側に傘を傾けた。気付けば雨は落ち着いてきていた。

ひ「あ、あの！」

葛「どうしました？」

ひ「商店街で買い物して良い？」

葛「了解つす。」

商店街は上に屋根があり、傘を畳んで歩いた。

ひ「今日はどうしようか。何かある？」

葛「そうですねえ、寒いんであったかいものが食べたいですね。」

？「おやひまちゃん彼氏かい？」

八百屋のおばちゃんが話しかけてきた。

ひ「違うよおばちゃん！」

八「何恥ずかしかつてんの！食べたいの聞いちやつてくるくせに！」

ひ「それは…、でも違うよ！」

八「そうなの？おばちゃんの早とちりだったかしら。あ、お兄さん。寒いんだったらカレーとか良いわよ！」

葛「カレー、良いですね。」

ひ「そう、じゃカレーしょ！おばちゃんなに安い？」

八「任せな！これ、これ、これ。はい、500円！」

人参、ジャガイモ、玉ねぎ、ほうれん草などが入った袋を渡された。

ひ「えっ、安すぎない!!？」

八「良いのよ、ひまちゃんの未来の彼氏見れたんだから。」

ひ「だ、だから違うって！」

八「毎度！」

葛「良かったですね、安くて。」

ひ「うう、恥ずかしい。」

ほとんど話を聞いてなかったせいで全く恥ずかしくない葛葉だった。

ひ「お肉はあるから、帰ろうか。」

葛「あ、持ちますよ。」

ひ「ん、ありがとう…。」

商店街を出ると雨は少し弱まっていた。

葛「変な天気つすね。」

ひ「こんな天気初めてかも。」

ひまわりも空を見上げて呟く。そしてまた傘をさし2人肩を並べて帰路に着く。

ひ「ただいま〜！」

葛「ただいま。」

特に会話もなくそのまま家についた2人。するとリビングからドローラが出迎えてくれた。

ド「おかえり2人とも。雨どうじゃった？」

葛「途中夕飯の買い出しで商店街寄ってるうちに弱くなったんでそんなでもなかったですよ。」

ド「そうなのか？」

なぜか不安げな顔をしているドーラ。

ひ「どうかしたの？」

ド「それが、さっきまた築から電話がきてひまわり殿の学校付近が雨で大変な事になって心配なんだってきたから、わしも心配じやったんじや。」

ひ「えっ!!? そんなことなかったよね？」

葛「学校から商店街って近かったですけど、そんなことにはなつてなかつたですよ。」
ド「わしも築も2人が無事だから良いけど、どう言うことなんじやろうか……」

ひ「とりあえずひま、お風呂入つてくるね。雨でちよつと濡れちやつたから。それから夜ご飯の準備しよ！」

葛「じゃあこれ運んでおきますね。」

ひまわりは風呂へ、ドーラはリビングに、葛葉は自分の部屋へとそれぞれ向かった。
バタン……

豚「あ、お帰りなさいラグーザ様。」

葛「なあ、雨を操る魔物っているのか？」

豚「え？」

葛「……信じたくないけどさっきのお前の話、あながち間違いじゃねえかも知んないぞ。」

豚「ほらやつぱり！で、雨というか天候を操る魔物ですがそのような魔物はいませんね。ですが。」

葛「何だよ。」

豚「何かに気付く。」

豚「…天候に関する魔術が2つ。1つはアルバダ、もう1つはイムルカにあります。」

葛「まさかだろ。」

豚「そのまさかです。アルバダは天候を移動させる術、イムルカは天候を呼び起こす術なんです。」

葛「アルバダの合わせ術なんてのは？」

豚「規模が違います。これはアルバダとイムルカの合わせ術です。」

葛「…てことはここ（人間界）にイムルカを知ってる奴がいるってことか？お前の他に。」

豚「認めたくないですが、そういうことです。」

葛「…早めが良い。今夜だ、準備しとけ。」

豚「まさか…！」

葛「確認しに行くだけだ。」

豚「分かりました。」

コンコン…

葛「!?？」

ガシッ!

豚「(え?)」

ムギユツ…

豚「(ブヒッ!)」

葛「はい。」

ガチャ…

ひ「あ、ひまお風呂上がったから葛葉くんも入ってね。」

葛「あー、俺はまだ良いっすよ。」

ひ「ダメだよ! 風邪ひいちやうから!」

少し言葉に力が入り体のバランスを崩してしまい、ひまわりが倒れかけた。

ひ「あっ!」

ガシッ…!

ひ「うう…。えっ、葛葉くん!?」

ひまわりがバランスを崩したとき、葛葉が咄嗟に支えていた。

葛「危ないですよ、そこ。若干出っ張ってるんで。」

ひ「う、うん。ありがとう…。」

葛「…なんか買ひ物の帰りに様子が変わるんですけど、どうかしました？」

ひ「あのさつ、変なこと聞いて良い？」

葛「良いですよ。」

ひ「まわりは顔を上げ、葛葉に聞く。」

ひ「ひまと一緒にいるとき、どうしたら良い？」

葛「…どうって？」

ひ「なんて言うんだろう…、えーと。さつきはさ、ほら、か、彼氏って言われてじゃん。ああゆうの、葛葉くん嫌がるだろうから否定できる関係を証明できる呼び方、的をやつ。」

葛「なるほど…。」

ひ「やっぱ変だよ、ごめん…。」

葛「いや確かに大事なことですよね。学校に行った時も言われましたし。誤解を招くようなことは否定しとかなないと後々迷惑になりますからね…。ひまわりさんの。」

ひ「えっ！別にひまは迷惑とかじゃないんだけど、葛葉くん的にはどうなの？」

葛「ひまわりさんが迷惑じゃないなら別に…。」

ひ「…。」

葛「…。」

葛「い、いや、やっぱ決めときましよう！」

ひ「そ、そうだね！」

何だか恥ずかしくなった空気に負け、お互いの関係性を決めることになった。

葛「とりあえず、何か案ありますか？」

ひ「うーん、兄妹、姉弟、友達、友達、くらいかな？」

葛「姉と妹、どっちだが良いですか？」

ひ「え、葛葉くんは兄と弟どっち？」

葛「…同時に言いますか？」

ひ「…良いよ。」

葛・ひ「せーのっ。」

葛「弟。」

ひ「おねえちゃん！」

見事に別れた。

葛「決まりつすね。」

ひ「うん！」

葛「じゃあ俺風呂入ってきます。」

ひ「あ、そうだったね！」

部屋を出る時、葛葉がふと気づく。

葛「…てことは俺はひまわりさんのことを『姉』呼びしないといけないんですね？」

ひ「あ、確かに。」

葛「どう呼んだらいいですか？」

ひ「それはもう葛葉くんが呼びたいように。」

葛「じゃあ、『姉ちゃん』で…。」

ひ「お、おお…。」

葛「ぐっ、何だこれ恥ずかしっ！」

ひ「それならひまも『くん』外さないとしやない…？」

葛「別にこれからも付けなくて良いですよ。」

ひ「く、『葛葉』…？」

葛「…ふっ。」

ひ「あっ！何で笑ったの!!？」

葛「いや、なんか面白いですね…。」

ひ「ヒドいよ!？」

葛「ハハッ、まあこれからよろしくお願いします。姉ちゃん。」

ひ「この際、敬語もとうろよ。葛葉。」

葛「…言うのも言われるのも、慣れるのに時間要りますね。これ。」

ひ「む、葛葉も敬語とつてよ!」

葛「ええ、わ、分かったよ…。」

ひ「姉弟間で敬語はないでしょ!」

葛「…慣れていきま、いくよ。」

2人の関係性をすっかり決めて、また一つ信頼が強くなった。リビングへ降りるとドローラが電話をしていた。

ガチャ…

ひ「パパから?」

ド「ああ、何だか築の方も雨が強くなってきたらしくたくしー?とかばす?とか使うから遅くなるってき。」

ひ「パパも傘持つて行ってなかったのか。」

葛「急でしたからね。」

ド「んー、わし迎えに行つてこようかな。」

ひ「外くらいし、危ないし、まずパパの会社知らないでしょ?」

ド「前行ったことあるぞ?」

ひ「え!!? そうなの?」

ド「ここ初めてきた時にな。」

ドーラは人間界に来たときに降りたビル群が築のいる会社だと思っていた。

ひ「なら大丈夫かな: ? パパ残業のことなんか言ってた?」・

ド「今日はみんな7時くらいに終わるらしいって言ってたな。」

ひ「今から迎えに行ったらちようどじゃない?」

葛「そんな会社近いの?」

ひ「ん、ひまも行ったことないからわかんないけどパパ曰く一本道って言ってた。

朝も40分くらい前に出かけるもん。」

ド「それならわしも準備して出ようかな。」

ひ「そうだね。こっち来て!」

ひまわりはドーラを連れ2階へ上がって行った。少しすると着替えの済んだドーラが降りてきた。

葛「準備できたんすね。」

ド「うん、だけどいちいち着替えるのはここの決まりなのか?」

葛「それもありませんけど、あんまり素の状態で外行く人いないっすよ。」

ド「確かにみんな何か着ていたな:。」

ひまわりが遅れて降りてくる。

ひ「ふう、ぴったしだね！」

ド「これ勝手に来て良かったのか？」

ひ「誰も着ることがないから大丈夫！」

葛葉はひまわりの心の内を知っていたから少しその言葉が引つ掛かった。

ド「じゃあ行ってくる。」

ドーラは傘を2つ持ち、社を迎えに行った。

ひ「行つてらっしゃい！気をつけてね！」

ボタン…

葛「…あの服といい、前出かけたときの服つて。」

ひ「うん、ひまのママが着てたの。」

葛「本当に良かったんですか？」

ひ「良いの。今はドーラさんがひまのママみたいだから。」

葛「…ですね。」

ひ「さ、夕飯の支度しよ！それと、また敬語になつてるよ。」

葛「んっ、慣れねえ…。」

家を出た直後のドーラ。すぐ近くの曲がり角を曲がり、姿を隠す。

ド「ここなら大丈夫か？」

服を少し開け、背中から大きな翼を広げて空に勢いよく飛び上がる。

ド「久しぶりに飛んだな。さて、築の匂いはどこだ？」

嗅覚を研ぎ澄ませ、正確な位置を探る。

ド「見つけた。あっちだな！」

人目につかないよう雨雲の上まで飛んだおかげで服はほとんど濡れていなかった。大きな翼をはばたかせ、一直線に築の元へ飛んでいった。

課「みんな今日は台風みたいな感じだから早めにながって良いよ！」

築の勤める会社の課長の声がおフィスに響き渡る。『お疲れ様』と1人、また1人と順々に帰宅し始める。

社「私もそろそろ帰ろうか。」

素早くパソコンを閉じ、帰る支度を済ませる。

社「お疲れ様でした。」

定時より早く会社を出るのはとても久々のことであつた。今日ばかりはいつも残業を渡してくる課長も止めてこなかつた。

社「さて、バスもタクシーも混んでるんだらうな…。」

すると聞き慣れた声で呼び止められる。

課「社くん！ちようど良かった！」

この感じは、と身構える。

社「何ですか？」

課「いやあーね？今日付けの資料が間に合わなくつてさ、君家近いしお願いしたいんだよね。」

社「私の他に残つてませんか？」

課「それがみんな電車なもんだから残れなくてねえ…。頼むよ社くん！」

この課長は毎回同じ頼み方をする。一応残業代は出ているらしいがほとんど増えていなかった。築は会社の中でトップレベルの技術者だからか面倒な仕事を任されることが多い。今回ののもその一つだ。

社「で、でもこのまま雨が強くなつてつたら私でも帰れなくなりますよ！」

課「はあ、そんな時は会社で寝泊りすれば良いじゃん。」

急に態度を変えてきた。

課「俺の頼みだよ？素直に聞けよ。仕事ができてもこれじゃ、一生そのままだよ！」
流石の築でも初めて手が出そうになった。

課「ほら鍵渡すから残ってやってこい！」
強引に鍵を渡されかけた時。

「帰るぞ、築。」

振り返ると、そこには傘をさしたドーラがいた。

社「ド、ドーラさん?!? 何でここに！」

ド「傘持って行ってないってひまわり殿が言うから迎えにきた。」

社「えっ、いや、よくここがわかりましたね…。」

ド「まあな。さ、帰るぞ。」

課「おい社！お前私の言うことを聞かんのか？平のお前なんてすぐ切れるんだぞ！」

社「…ドーラさん、俺やっぱり残業が。」

するとドーラは無言で課長に近づく。

課「な、何だ！」

ド「ふっ。」

チリッ…

ドーラが少し火を吹いて課長の髪を焼いた。

課「ひえ…?」

ド「一度しか言わん。お前がやれ。」

そう言つて築の方へ戻つていく。

社「ドーラさん、何を?」

ド「内緒じゃ。」

2人の後ろでは腰が抜け、その場に崩れ落ちる課長の姿があつた。そのまま帰路へ着く2人。ビル街を抜け住宅地に入つていく。

社「そういえばその服…。」

ド「ん?これはひまわり殿が着てけてな。」

社「そうですか。久々に見たな、この服がびつたりな人…。」

ド「ひまわり殿にも言われたぞ、それ。」

社「ふふつ、やっぱ家族ですね。」

ド「…なあ、築。」

社「はい?」

ド「わしらつてどんな関係だ?」

社「…どんな?」

ド「今日家を出る前にひまわり殿と葛葉殿が互いの関係性を決めていたのが聞こえて

な。」

社「へえ、どんな風になったんですか？」

ド「葛葉殿が弟、ひまわり殿が姉らしい。」

社「ああ、確かにそう言う感じの関係性ですね。」

ド「じやろ？だからわしらってどうなるんじやろうなって。」

社「あの子たちが姉弟なら、俺たちは夫婦になりますけど……？」

ド「悪くないな。」

社「あつ良いんだ。」

ド「築は嫌なんか？」

社「いや、ドーラさんが嫌いじゃないなら良いですけど……。」

ド「じゃ、わしらは今から『夫婦』と言うことで！」

なぜか嬉しそうにしているドーラだった。

社「ていうか、ここ懐かしいですね。」

築がふと見上げるとそこには2人が初めてあったコンビニがあった。

ド「ここに着くんじやな。」

社「え、ここ通らずに来たんですか？」

ド「あ、えつと、そこの下を通って行ったんじや！」

社「そうなんです。次はこのコンビニの道を通つていくと早いですよ。」

ド「そうなのか、じゃあ次はそうする。」

築は心のうちで「あ、また来てくれるんだ！」と思った。その後はお互い無言のまま家まで着いた。家のドラを開ける前に築は一言ドーラにお礼を言う。

社「ドーラさん、今日はわざわざ会社まで迎えに来てくれてありがとうございます。何陰で課長のいつもの仕事の押し付けや、バスで帰る費用も掛からなくなりました。何より迎えに来てくれたのが、嬉しかったです……！」

ドーラは不意な築の照れ顔につられて顔を背けた。

ド「そ、そうか。わしは築に恩しかないからな……！こんなことで良いなら何度でもやるぞ……！」

社「何度も、となるとあらぬ誤解が生まれそうなので……、時々とかなら、なんて……！」
築が冗談と願望の混じったことを言う。

ド「まあ、考えとく……。」

社「ふふつ、期待しときますね！」

ガチャ……

社・ド「ただいま。」

ドアを開けるとカレーのいい匂いが漂って来た。

社「今日はカレーか。」

ド「かれーというのは美味しいのか？」

社「人それぞれで味が違いますけど、美味しいですよ。特にうちのひまわりのは。」

ド「それは楽しみだな！」

ひ「あ！パパたち帰って来た！」

社「ただいま、ひまわり。」

葛「お帰りなさい、2人とも。」

ド「ただいま。葛葉殿、ひまわり殿。」

ひ「ひま達待ってたからお腹減ったよ。」

社「そうだな、すぐ着替えてくるから先に飯食べようか！」

ド「じゃあわしはひまわり殿の手伝いをしよう。」

葛「俺運びますよ。」

勝手にド葛本社 第七話 「事件」

全「いただきます！」

今日の晩ご飯はひまわり特製カレーだった。

ド「んん！美味しい！」

ひ「ほんと!? 嬉しいなあ。」

社「ひまわりのカレーは世界一だな、ほんとに。」

ひ「パパまで。」

葛「いや、マジで美味いっす。」

ひ「葛葉まで!?!」

築がピクツと反応する。

ひ「あ、葛葉くん…。」

社「2人が姉弟の関係ということにしたのはドーラさんから聞いている。共に過ごしているのにお互い敬語なのも直すべきだと思っただけだからな。」

ド「だからわしらもお主らの親になる！」

葛「…え?」

社「俺が父で、ドーラさんが母っていう設定ね。ドーラさんの言い方だとガチっぽくなっちゃうから。」

ひ「てことはパパがパパで、ドーラさんがママ…?」

社「まあ、そういうことだな。」

ひまわりはとても嬉しそうな顔をした。

葛「良かったね、ねーちゃん。」

ひ「うん!」

葛「じゃあ2人も敬語取らなきゃね。」

社「え? いや、大人には大人のタイミングってものが…。」

ド「何を今更。」

社「ドーラさんは最初から無かったから楽ですけど!」

ド「わしは尊敬する奴にしか敬語は使わん。」

ひ「ほら、パパ頑張つて。」

社「ぬく…。」

葛「ほら、パパ頑張つて。」

ひまわりの言葉を若干煽り口調で繰り返す葛葉。

社「葛葉、お前…。」

ド「早く言え。」

社「ド、ドーラ…。」

ド「言えるじゃないか。何を迷ってるんだか。」

社「な、慣れねえ。」

何かに悶絶する築を横目に食べ進めていたドーラだったが、実は築の呼び捨てに心臓がずつとドキドキしていた。

ド「(なんでじゃ、ただ呼ばれただけなのに…。)」

夕飯を食べ終え、各々片付けを始める。

ひ「後はひまとママで洗うから置いといて！」

ド「まま、と言われるのは慣れんな。」

社「じゃ、先に風呂入ってくる。」

葛「俺はちよつとテレビ見ても良いですか？」

社「ああ、良いよ。それと敬語残ってるよ。」

葛「あつ。」

葛葉は今日の急な雨について知りたいことがあったため、テレビを付けた。

ひ「ニュース？」

葛「天気を見たくて。」

ド「テレビはなんでもわかるんだな。」

葛「豚、聞こえてるか。」

葛葉は豚にテレパシーを送る。

豚「はい、なんでしよう?」

葛「今日の雨についてだ。あれは魔物の仕業なのか?」

豚「証拠がないので言い切れませんが、ほぼそうです。」

葛「テレビも異常気象って言葉で片付けてやがる。今夜出る、準備しとけ。」

豚「(え、出るって、何に?)」

葛「(この犯人探し。)」

豚「(急ですね。)」

葛「(人間に害を与えかねんからな。)」

豚「(…そうですか、わかりました。)」

葛葉はテレビを消し二階へ向かう。

ひ「何かあったの?」

葛「今日の急な雨はなんだったのかなって思ってた。」

ド「不思議な雨じゃったな。」

ひ「なんて言ってた?」

葛「ただの異常気象だつて。」

そう言つて自分部屋へ戻つた。

ガチャ：

葛「魔物については目星ついてるか？」

豚「まあ魔術を使えるレベルですから、おそらく人獣型かと。」

葛「今回の雨の発生場所とかつては？」

豚「ここから北西にある山の頂上付近からだ。明らかな魔力を検知しました。」

葛「そうか。ていうか、お前そんな優秀だったっけ？」

豚「何を今更！もともと優秀ですよ！」

葛「へえ。とりあえず出かけるには他のみんなが寝てからだな。」

豚「了解です。」

社「葛葉く、風呂空いたけど入るか？」

風呂を上がった築が階段下から葛葉にそう伝える。

葛「俺あとで良いから母さんたち入っちゃつてく。」

社「そうかく。」

すると豚が不思議そうにこちらを見ている。

葛「なんだよ。」

豚「いや、いつもは母上と呼んでいるので違和感が。言い分けてるんですか？」

葛「あー、なんだろ。そんな気はなかったんだけど、なんか母さんって方がしつくりくるんだよな。ドーラさんの場合だと。」

豚「へえ、ラグーザ様にも人に合った対応ができるんですね。」

葛「…食うぞお前！」

葛葉は自分でも気づかなかったことを豚に気付かされ、照れ隠しのために豚に背を向けた。

社「ひまわり、先にドーラと入って良いぞ。」

洗い物を終えた2人は一緒に風呂場へ向かった。築は2人がそれを確認してからリビングの隠しカメラの位置を確認し始めた。

社「ここから見ても分かりにくいのに、よく葛葉は見えたな。偶然だとしても完全に目が合った気がしたもんな。」

築は偶然だったとしても思い、カメラの位置を変えた。

社「ここなら大丈夫か…。」

しばらくするとドーラたちが風呂から上がってきた。

ひ「ふうさっぱりした！」

ド「あ、築はまたコーヒーとやら飲んでるのか。わしも飲もう！」

社「お、ドローもコーヒーの旨さに気付いたのかな。」

ひ「ええ、あれただ苦いだけじゃん。」

社「ひまわりにはまだ早いかな。」

ド「ひまわりも飲めるように慣れば分かるもんじゃよ。」

ひ「なんで2人して子供扱いするの！もう葛葉に言ってくる！」

そう言つて勢いよく葛葉の部屋へと向かった。

社「やっぱりひまわりは元気な方が良いな。」

ド「いつも通りじゃないか？」

社「そう見えるようにしてるんだよ。」

ド「えっ？」

ドローは入れ終わったコーヒを持って築の前に座る。

社「ひまわりは昔から人前で笑顔を絶やさなかつたんだ。それこそ自分の母親が亡くなつた時もね。」

ド「悲しくなかつたのか？」

社「アイツはひまわりと同じテンションでいつも遊んでいたんだ。だから俺よりも母親のほうが好きだつたんだ。でも……。」

ド「なんで泣かなかつたんだ？」

社「葬儀が終わって、いろんな親戚が帰った後に俺はひまわりが母親の写真の前で泣いてたのを見たんだ。ひまわりは人の前では泣かないんだ。」

ド「そっか、でも築の前では泣かないんだろ？」

社「ええ、ひまわりは分かかってるんです。自分が俺の前で泣くと、俺が母親の分まで頑張ってしまうって。俺はそれで一回失敗してるんです。」

ド「なるほどな…。ひまわりは今も一人であつてこと？」

築はコーヒーを一口飲む。

社「今は誰かアイツのように心を開ける相手を見つけたんでしょね。だからひまわりの笑顔が心からのものになったんです。」

ド「…それは、分かるものなのか。」

社「ええ、ここにいればいずれか分かりますよ。」

ド「いずれ、か…。」

そう言つてコーヒーを一口飲んだ。

ガチャ！

ひ「聞いてよ葛葉！」

突然の来客に驚き、瞬時に豚の方にダイブする葛葉。

葛「…どうしたのねーちゃん。」

ひ「パパ達がひまのことを子供扱いしてくるの！」

葛「それは、良くないね。」

葛葉は下敷きになった豚をゆっくりと背中後ろに隠す。

葛「早くインビジブルしろ！」

豚「インビジブル！」

ひ「どうしたの？」

葛「いや、一応部屋入る時ノックして欲しいかなって……」

ひ「あ、ごめん。」

葛「うん……」

ひ「あ、今日学校迎えに来てくれてありがとうね！改めてだけど。」

葛「面白かったから良いよ。あと、俺がねーちゃんの友達に貸した傘返してもらってね。」

ひ「あー、咲ちゃんに貸してたやつね。」

葛「咲っていうのか。」

ひ「笹木咲。結構近くに住んでる昔からの友達なんだけど、なんだか運が悪いのか不憫な子なんだよね。」

葛「他にどんな友達がいるの？」

ひ「あととはね、弓道部の…。」

ひまわりは学校の友達の話をも30分ほど話した。

葛「いろんな人がいるんだね、学校って。」

ひ「え、葛葉通ったことあるよね？」

葛葉は学校がみんな共通して通うということを知らなかった。

葛「あー、結構休んでたんだよ…、その、体調面でね。」

その場しのぎの言い訳を咄嗟に言う。

ひ「そうだったんだ！今は大丈夫なの？」

信じた。

葛「大丈夫。だからあまり記憶無いんだけどね。」

ひ「…ところで葛葉って何歳なの？」

葛「え、ひゃ…。」

ひ「ひゃ？」

歳など久々に聞かれたものだからつい、本当のことを言いそうになった。

葛「いや、えーと…。」

するとテレパシーが伝わって来た。

豚「ひまわりさんは高1、人間界でいうところ16歳です！それを基準に考えてくだ

さい！」

葛「俺は、15かな…。」

豚のサポートもあり、相応な年齢を答えられた。

ひ「え！ひまと変わんないじゃん。良かった！弟的立場なのにひまより年上だったらどうしようかと思ってたんだよね！」

葛「ははっ。」

葛葉は実年齢なんて言ったら大変なことになると実感した。それといつかは話さなければならぬことも。

ひ「あ、結構話してたから時間が。明日も早いし、寝るね！おやすみ！」

葛「ああ、おやすみ。」

バタン…

葛「ふう、危ねえ。」

豚「全くです。」

葛「さっきのナイス。」

豚「ラグーザ様、それなんです…。」

葛葉は豚から日本での学校の制度について知らされた。

葛「…じゃあ俺は高1だったけど親の都合で引越してきて、それから家出した設定

になるのか？」

豚「そうでないと中学卒業してないことになり、義務教育なんたらでアウトです。」

葛「めんどくせえな。」

豚「もつとしたの年齢にすれば良かったのに。」

葛「仕方ないだろ。この見た目で13、14って言えるか。」

豚「だから無理やり弟設定を守ろうとしなくて良かったんですよ！」

葛「それがと姉ちゃんが困っちゃうだろ。」

豚「はあ…。」

葛「それより、下の2人は寝たか分かるか？」

豚「いえ、気配が残ったままなので…。眠気を誘うこともできませんが。」

葛「ありだけど、体とかに影響は？」

豚「もともと妨害目的なのですが、力を加減すればいくらでも調整できます。」

葛「教えてくれ。使ってくる。」

葛葉は豚から『スリープ』を教えてもらい、一階へ向かった。

社「…お、風呂か？」

リビングにあるテーブルに向かい合って座りながらテレビを見ている2人がいた。

葛「うん。」

葛葉はすれ違い様に2人に向け、『スリーブ』を使った。

ド「ん、くう〜！」

ドーラは大きく体を伸ばした。

社「どうしました？」

ド「いや、なんか眠くなってきた。」

社「確かにもうこんな時間ですし、俺も寝ようかな。」

築はリビングを出て脱衣所へ向かう。

社「葛葉くん、俺たち寝るからね。」

と、ドア越しに一言言っ行って行った。

葛「ふう、これでよし。」

葛葉は脱衣所を出てリビングに誰もいないことを確認して、テレパシーで豚を呼び家を出た。

葛「で、どの方向だ。」

豚「あっちです。」

指差す豚を服に入れてトンつと軽く地面を足で弾く。空高く飛び上がると背中羽を広げ言われた方角へ飛び向かう。夜の空はどこか魔界と似ていた。

葛「あくなんか魔力を感じる。」

豚「あ、それワタシです。『コンパス』って言う術使ってるんで。」

葛「んく気のせいだったわ。」

気づけばひまわりの学校の真上にいた。

葛「…なあ、確かこの辺だって言ったよな。」

豚「そうですね。あ、その建物の後ろにある山でしょうか。」

豚が言うのは学校の裏にある山だった。

葛「…まさかな。」

豚「何か言いました？」

葛「降りるぞ。」

羽をたたみ山の中腹あたりの開けた場所に急降下する。地面ギリギリまで落ちるとそこに

誰かがいるのが見えた。

葛「誰だ？」

大きく羽を広げ、ゆっくりと着地する。こっそりと動く影は2つあった。そのうちの1つがこちらに近づいてくる。

？「その姿、人間では無いな。」

葛「お前らが今日の大雨の犯人か？」

? 「どうやら相当高貴な身分なのか質問が多いな。」

葛 「何のためにやってんだ？」

? 「…。」

葛 「答えろよ。」

? 「そろそろ口を慎めよ。蠅の分際で。」

その一言であたり一体に強烈な敵意が広がった。

葛 「蠅つてのは、自己紹介か。」

? 「止まらぬ口は力尽くで閉じてやろう！」

そいつは懐にある短剣に手を伸ばす。

? 「待て！」

もう1人が止める。

? 「申し遅れた。私は『レユル』。そっちは『カール』だ。お主の名は？」

葛 「アレクサンドル・ラグーザ。これは携帯食の豚だ。」

レ 「ふむ、確か吸血鬼一族の一家の名だったはず。」

カ 「ケツ！そんな貴族さんが何の用だ。」

葛 「今日の大雨の犯人はお前たちか？」

レ 「…それを聞いてどうする？」

葛「内容によっちゃ、さっきの続きをしないといけなくなる。」

カ「何でお前がそんなことをするんだよ。」

葛「お前には関係ないだろ。」

カ「ただの食糧である人間に何でそんな苛立ちを覚えるか。」

その発言を聞いた葛葉の敵意が殺気に変わる。

レ「なら構えよカール。吸血鬼、教えてやる。私たちは今急激な魔力不足なのだ。あの雨はただの雨でなく催眠効果を付与してある。もうそろそろ下の学校に集まってくる頃だ！」

レユルとカールは学校の方へ向かって飛んでいった。

葛「まずい！」

葛葉も急いで学校へ向かう。すると校庭には沢山の人が集まっていた。降りて確認してみると皆、意識が朦朧としていた。

レ「これで分かったか、吸血鬼アレクサンドル。」

声の方向を見ると学校の屋上に何やら呪文を唱えている2人がいた。

葛「お前ら！」

葛葉が飛びかかろうとした時、豚が葛葉を呼ぶ。

豚「ラグーザ様あれ！」

豚が指さした方向にいたのは、ひまわりだった。

葛「何で……！」

そこで葛葉は学校からの帰り道でひまわりの肩が少し雨に当たっていたのを思い出した。

葛「あの時か……!!? 豚、ひまわりさんを頼む。」

葛葉は豚を置き、学校の屋上目がけ勢いよく飛んだ。

リ「恩を受けた人間でもいたか？」

葛葉はその勢いのままリユルに飛びかかる。それを横にいたカールに抑えられた。

カ「剣を持たずに何ができる！」

カールに払われる葛葉。屋上際のフェンスを掴み、枝のように折った。

カ「どんな怪力だよ。」

折ったフェンスに魔力を流し、不格好だが鋭利な剣を作った。構えて斬りかかる葛葉。短剣で応戦するカール。しかしカールの短剣が折れ、蹴り飛ばされる。

リ「ほう、カールを退かしたか。」

次にリユルに向け攻撃を仕掛ける葛葉。

ガキンツ！

リ「『カウンター』。」

葛葉は半透明の壁のようなものに攻撃を弾かれ、その衝撃が自分に返ってきた。

葛「……！」

リ「お前には今の状態じゃ勝てないからな。この人間をいたたくとするか。」

そう言うとりユルの足元の魔法陣が光りだし、下の人間たちから出てきたオーラ状の魔力がリユルに吸い込まれていった。

葛「ハア！」

また斬りかかるが魔力を蓄えたりユルに軽々と止められた。

リ「こんな弱い魔力で加工したものなど、おもちゃに等しいわ！」

リユルは止めた剣を粉碎した。そして丸腰になった葛葉に魔術を向ける。

リ「これは『フレイム』。お前をすぐに灰にするものだ。もう魔力のないお前にとって楽に死ぬるのは良いことだろう。さらばだ！」

リユルは葛葉に向け『フレイム』を放った。その炎は葛葉の体を包み込み大きく燃え上がった。

リ「ふふっ、これで邪魔者はいなくなっちゃった。」

豚「ラグーザ様の仇！」

豚はリユルに勢いよく飛びつく。

リ「なんだ、家畜風情に何ができる？」

豚「ラグーザ様は変わってきていたのに！お前が邪魔するんじゃない！」
殴り続ける豚を掴みあげるリユル。

リ「先に邪魔をしたのはそっちだ。」

そう言つて豚を燃えてる葛葉の方へ投げ飛ばした。

豚「うう、ラグーザ様……！」

葛「泣くなよ豚。」

豚「!?」

燃える火柱の中から葛葉の声が聞こえた。その瞬間、葛葉を包んでいた炎が右手に集まっていた。

リ「何!？」

葛「悪いけど、俺はこんなじゃ死なないよ。」

葛葉は右手に集まった炎をリユルに向け、唱えた。

葛『『フレイム』』。

右手から放たれた炎はリユルの体を包み込み激しく燃えた。

リ「グアアア！なんで、物理攻撃以外跳ね返せないはず！」

葛「それは『カウンター』だろ。俺のはただ周りにあつた炎を集めて返しただけだ。」

豚「そ、そんな。」

リ「くっ！『ウオーター』！」

リユルは苦しみながらも体に水をかけ消火した。

リ「ハア、ハア、今度こそお前を……！」

リユルが持っていた杖を葛葉に向けた。

豚『『サンダー』！』

豚が唱えたと同時に黒い空から一本の光が落ちた。その光は水で濡れたリユルの全身を巡り、消えた。

葛「何をしたんだ……？」

豚「濡れたコイツに雷を落としただけです。」

葛「感電、か。」

さつきまで動いてたりリユルは一瞬にして黒い塊と化した。

カ「リ、リユル様……。」

葛「まだ生きてたのか。」

豚「ラグーザ様、コイツは生かして話を聞きましょう。」

そう言うのと豚は拘束魔術で縛っていった。

葛「これで催眠は溶けるのか？」

豚「ワタシがこれからリユルと同じ催眠を使って自宅へ帰させます。しかし……。」

葛「なんだ？」

豚「少しとは言え、魔力を吸われているので中には体調を崩すものもいるかと。」

葛「…なあ、人間に魔力は無いよな。」

豚「ええ。その代わり精神力を交換することで魔力になります。」

葛「だから体を壊す、か。まあしようがない。やつてくれ。」

豚「はい。」

この後豚により全員帰らせ、ひまわりとカールを連れ家に戻った。

葛「カールを頼む。俺はひまわりさんを。」

催眠で寝た状態のひまわりを抱えながらベットへ寝かしに行く。

葛「これで、よし。」

起こさぬようゆっくり下ろして布団をかけた。

葛「おやすみ、姉ちゃん。」

自分の部屋に戻ると催眠がとけたカールを椅子にくくりつけ、話ができる状態になっていた。

葛「おい、話す気あるか。」

カールは葛葉を睨むとそれからずっと下を向いていた。

葛「しゃべんねえなら…。」

豚「ラ、ラグーザ様？」

葛「寝る。」

豚「…えっ？」

そのままベットに飛び込み深い眠りについた。

朝起きるとカールと豚の姿が無く、クローゼットを開けてみると豚だけいた。

葛「あれ、カールは？」

豚「え、あ、おはようございます。えっと、カールは小さくしてこの瓶の中にいます。」

見せてきたビンの中には確かに小さくなったカールがいた。

葛「魔術ってすげえな。」

顔を洗いに下へ降りると築に呼び止められた。

社「あ、葛葉くん。」

葛「おはようございます。」

社「ああ。今日なんだが、実はひまわりの体調がよくないみたいだから学校を休むことにしたんだ。だから看病を頼めるか？」

葛葉は急いで2階へ戻り、ひまわりの部屋へ行く。

葛「姉ちゃん入るよ！」
ガチャ！

部屋に入ると先にドーラがいた。

ド「あ、おはよう。」

葛「姉ちゃんの具合は!？」

ド「そんな焦るほどでもない。ただ体がいつもより弱ってるだけだ。」

葛「それ、だけ？」

ド「ああ、安心しろ。」

葛「良かった…。」

ひまわりの様子を確認した葛葉は再び下へ行く。

社「と言うことだから今日は昼食も自分たちで頑張ってくれ。」

ド「何かわしらでも作れるものないんか？」

ドーラが階段を降りながら問いかける。

社「お湯を入れて待つだけのカップ麺ならあつたはず。」

葛「今日はそれで我慢しますか。」

社「あ、時間が。」

ド「今日はいつもより早いんじゃない。」

築は急いで靴を履きながら玄関にある鏡で身嗜みを整える。

社「ひまわりの弁当がないから途中で買わないといけないですよ。」

ド「なるほどな。」

社「じゃ、ひまわりのことお願いします。行ってきまーす！」

ド・葛「いつてらっしやーい。」

築が家を出た後、2人は顔を合わせた。

ド「どうする？」

葛葉は完全に自分のせいだと思い、ひまわりの世話を全部自分に任せて欲しいと頼んだ。ドーラは何か手伝うことがあれば言ってくれと言って、いつもの家事を始めた。

ひまわりのことで頭がいっぱいな葛葉はいつもの家事が全然手につかず、ぼーっとしがちだった。

ド「大丈夫か葛葉…？」

自分の仕事を終えたドーラがいつもと違う葛葉を心配がり、声をかけてきた。

葛「あ、ああ…、もう終わるんで大丈夫です。」

ド「なあ、わしらは親子の関係になったんじゃから敬語を外そうって言ったじゃろ？」

葛「そうだった…。」

何を話しても意識がここにはないような反応をする葛葉。するとドーラは葛葉の頬を手で包む。

葛「…ほーあはん、はんへふは？」（ドーラさん、なんですか？）

ド「わしの手はあつたかいじやろう。いつも元気な葛葉も静かになってしまったらわしは悲しいぞ。」

葛「…。」

カイロのように暖かいドーラの手。そのおかげで葛葉のマイナスな気は薄れていった。

ド「今のわしからすれば2人とも大事な家族なんじゃ。そう一人で抱え込むでない。」
葛「…うん、ごめん母さん。」

ド「ふふつ、初めて『母さん』と呼んだな。ひまわりもそう呼んでくれるかな。」

葛葉は途中だった洗濯を終わらせた。

葛「これで終わった、と。」

今日も昨日の雨雲の残りのせいで雨だったため部屋干しだった。リビングへ戻るとドーラが二階からちようど降りてきたところだった。

ド「あ、終わったのか？」

葛「うん。具合どう？」

ド「まあ特に辛そうでもないし、これから楽になっていくじやろ。」

ドーラは前に社にやったように自分の尾の鱗をひまわりに振りかけてきたのだ。

葛「なら、安心だね。」

ドーラは葛葉の浮かない顔を心配そうに見る。

ド「そうじゃ、葛葉。少しひまわりのそばにいてやってくれんか？」

葛「え？どうして。」

ド「わしは築に言われたことをしないといけないのを忘れておった。その間に様子を見ていて欲しいんじゃない。」

葛「そうなんだ…。うん、分かった。」

葛葉は早速ひまわりの部屋へ向かった。

ド「よほどひまわりのことが心配なんじゃないな。」

コンコン…

葛「姉ちゃん、入るよ。」

ガチャ。

この部屋に入るのも最初に寝泊まりした以来のことだった。

葛「具合どう？」

葛葉は寝ているひまわりにそっと近づき、様子を見る。

葛「特に苦しんでも無いな。良かった…、昨日のせいで姉ちゃんに変な影響が出てたらつて、ずっと心配だったんだ。」

初めて胸の内を話せて、葛葉はすつきりしていた。しばらくひまわりの顔を見つめてかあら立ち上がり、自分の部屋へ向かった。

ガチャ。

葛「豚、昨日捕まえたやつは？」

クローゼットの中からカールの入った瓶を持った豚が出てくる。

豚「ここに。」

葛「準備しろ。」

豚はテキパキと机と椅子をセットしカールを元に戻した。

葛「よお。話す気になったか？」

カールはいまだに葛葉を睨んだまま答える。

カ「何で魔族が人間と暮らしている！」

豚「お前が質問するんじゃない！」

葛「良い、答えてやる。その代わりに俺のにも答えるよ。」

怒る豚を抑え、冷静に話す葛葉。

葛「俺が人間と暮らしている理由は、俺はこの人に助けられた。だからその恩を返すためにここにいるんだ。」

カ「人間如きに助けられるなど、魔族の恥だな！」

葛「次は俺の番だな。お前らは昨日何をしようとしていたんだ。」

カ「ハッ！俺が答えるとても？」

カールは葛葉からの質問に答えようとせず嘲笑っていた。

葛「答える、答えねえじゃない。答えるしかねえんだ。」

その一瞬、部屋中に強大な魔力が溢れた。

カ「!?？」

豚「これは……！」

葛「答えろ。」

カ「その力でどうする気だ？俺を殺せば何も分からずじまいだぞ？結局は俺を殺せないただの威嚇ってわけだろ！」

一度は圧に押されたが自分の立場を武器にして立ち上がってきた。

葛「分かった。豚、強制的にはかせろ。」

豚「了解です。」

カ「強制的……？まさかお前、イムルカの魔獣を使う気か！」

豚「時間切れだ。『コンフェション』」

カ「ガッ……！」

カールの体は電撃が走ったように跳ね、気を失ったように全身の力が抜けていった。

葛「昨日お前らは何してた。」

カ「…魔力回復のために人間を集め、あの場所を拠点に魔力回復所を設けるつもりだった。」

葛「何のために。」

カ「分からない。」

葛「誰かに命令されたのか。」

カ「分からない。」

葛「豚、こいつを魔界に送り返す。」

豚「良いんですか？」

葛「こいつを戻せば親玉が動くだろ。」

豚「ですが、これ以上の被害が出る可能性がありますよ。」

葛「ああ。それも対策していく。」

豚「ではあとはワタシがやっておきます。」

カールのことは豚に任せ、葛葉はひまわりの部屋へ戻る。

葛「…変なことに巻き込んでごめんね。姉ちゃん。」

ドアの前でそう呟いてしまった。すると。

ひ「葛葉…?」

部屋の中からひまわりの声がした。

葛「えっ!?」

驚いてドアを開けると、顔を赤らめたまま体を起こしていたひまわりがいた。

葛「起き、てたの…?」

ひ「うん、ついさっきね。」

葛「そうなんだ、それで、具合はどう?」

ひ「まだちよつと体が重いかな…。」

葛「そう…。お、俺母さん呼んでくるね!」

葛葉が部屋を出かけたその時。

ひ「待って!」

葛「…!」

ひ「ねえ、さっきのどうということなの…。葛葉。」

いつも「勝手にド葛本社」を読んでくださっている皆様へ。

どうもめーけろーです。

にじさんじのいちオタクとして、脳内で再生される「もしも」の妄想をただ書いているだけなのに予想を遥かに超えた閲覧数、誠に感謝しております。100%自己満足な作品を、これほどまで読まれるというのは少々恥ずかしいことですが。

さて、何故急に出てきたかと言いますと。

「読んでくださってる皆さんの感想がちよつと聞きたいなあ」って思ったからです。

ただの二次創作に感想なんかねえよ！とか、こんな下手な小説とも言えないものに感想なんかない！なんていう人も居るかもですけど…。

ただ、その書いてくれた感想で私のモチベが上がったり、上がらなかったり。私の作品がより良くなったり、ならなかったり。

と、まあ私得なんですけどね。読者目線の感想が見てみたいっていうのが1番の理由です。

今でも私の中では様々な今後のストーリーが出来ていまして、上手くまとまって伝え

られれば面白くなると思うものがあるんですよ。しかしながらそのストーリーをどうやって繋げるかが大きな課題となっっているんですよ。

今はまだまだ未熟者ですが、いつかは「めーけろーって人の二次創作小説面白いよね」って言われるようになりたいです。そのためのお力添えとして、よろしく願います。

ハーメルンの方限定となりますが、「○○○の話も書いてください」や「○○×○○が見たいです」等の要望があれば書いていただきたいです。私の気分転換で短編を書いたり、本編に出したりできればやってみたいと思います。私自身、主に葛葉さんを推している所以他のライバーさんの中に名前ぐらいしか分からない人も居るんですよ。そのため、本編にも本人たちと良く絡んでいる方々が多く出てくるんですよ。「もしも」の話なのでもっと配信やライブでも見たことない絡みを書いてみたいんですが、自分では思い付かないんですよ。そこで皆さんの要望が参考にできればと考えたんです。

今あるカップリングやコラボ名でも良いですし、こんなのが見たい！っていう架空のコラボでも良いです。一つだけ制限をさせて欲しいのが、『にじさんじ内限定』でお願いしたいです。海外勢も可です。（その場合は頑張ってアーカイブ追います。）

皆さんの大切な感想をお待ちしております。これからも「勝手にド葛本社」をよろし

くお願いします。第八話の投稿はいつになるか目処は経ってないですが、気長にお待ちください。

それでは。

(ツイッターもやっています。@mororo_roi)

ろー

めーけ

勝手にド葛本社 第八話 「大事なこと」

「…さっきの言葉って何のこと？」

しらを切ろうとするもひまわりの目を見て気圧されてしまった。

「ひまが体調崩したのって、葛葉に関係あるの？」

「昨日、学校帰りに姉ちゃんの肩が濡れてたからそのせいかなって…。」

雨に濡れていたのは本当のことだ。葛葉は嘘をつくときは本当のことを混ぜると良
いと昔兄に言われたことがある。

「…。」

「(納得してくれたか…?)」

「それじゃ、巻き込んでってどういうことなの…?」

もう言い逃れることができない、葛葉はそう思った。すると。

「(ラグーザ様、大変なことが!)」

豚から報告が入った。

「姉ちゃん。ごめん、今はまだ安静にしてて。治ったら話すから。」

そう言ってひまわりの部屋を出て行った。すぐに自分の部屋へと戻ると、豚が驚いた

顔でこつちへ向かってきた。

「どうした。」

「これを！」

豚が渡してきたのは一枚の手紙だった。

「何だ、これ。」

そこには『これは始まりである。』とだけ書いてあった。

「カールを強制送還術で送った後に入れ違うように出てきたんです。」

「どうやら大変なことになっちまったんだな。」

「というと？」

「昨日のが始まりなんだろう？てことはこれからああいうことが起きてくるってことだろう。」

「昨日みたいなのが……。」

葛葉は悩んでいたことについて一つの結論を出した。それはこれからにおいてとても大事なことだった。

「俺さ、姉ちゃんに正体打ち明けるわ。」

「なっ!?？」

「こうなった以上、ただの人間として守っていくのは難しいだろうし、どこかでバレる。」

「なら今の内から自分で行ったほうが良いだろ。」

「…何言ってるんですか。」

豚の声のトーンが少し下がっていた。

「正体を明かす？ 守っていく？…何を言ってるんですか。」

これは豚が本気で怒っている時の声だ。

「相手は助けてくれたとはいえただの人間ですよ？ それに自分たちが魔族って明かしたらどうなると思ってるんですか！ 拡散されて、晒されて、見せ物にされて…。」

「姉ちゃんはそんなことしねえ。」

「何でそう言い切れるんですか。会ってまだ一週間ほどですよ？」

「姉ちゃんだから。」

「いつの間にあれと仲良くなった気でいたんですか。」

「なあ、姉ちゃんのことをそれとか、あれって呼ぶんじゃないよ。」

葛葉が豚を睨む。

「何ですか、そんなに姉弟ごっこが楽しいんですか？」

その瞬間、葛葉は豚を掴み上げた。

「そんなに俺を怒らせたいか？」

「ぐっ、さすがに今回は呆れているだけです。」

しばらく黙った後、豚を離した。

「ケホッ。」

「じゃあ良いよ。あとは俺だけでやる。お前は帰って良いよ。」

「…少々わがままが過ぎるのでは。」

「ごうも考えが違うのは初めてだな。」

「分かりました。ではワタシは魔界に帰ります。」

「好きにしろ。」

豚が黙って自分の荷物をまとめ始めたのを横目に葛葉は部屋を出て行った。リビングへ戻ると、ドーラがテレビを見ていた。

「おっ、どうじゃった？」

「うん。さつき一回目を覚ましたよ。」

「ほう！で、なんて？」

「まだちよつと体が重いつてさ。」

「そうか。それで、今度は何が心配なんじゃ？」

「えっ。」

葛葉は周りから言われて初めて自分がそういう顔をしていることに気づいた。

「さつきまではひまわりのことが心配そうじゃったのに今度はまた別のことが心配なん

「じゃな？」

「そんなことないよ。何なら姉ちゃんが良くなって嬉しいよ。」

「ああ、それはわしも嬉しい。」

「…。」

「葛葉。」

「なに？」

「なんかあつたらわしに言つてな。ここじゃわしがお前の母さんじゃからの。」

「…うん。ありがとう母さん。」

ドーラの言葉に頷きながら豚のこととひまわりのことに頭を抱えていた。

「葛葉。」

ドーラに呼ばれ顔を上げると、自分が座っているソファアをぼんぼんと叩いている。

「…どうしたの？」

「良いから。」

葛葉はその動作が意味することを理解していた。

「いや、恥ずいよ。」

「座るだけじゃろうが。」

「…。」

葛葉は恥ずかしながらもドーラの隣に少し間を空けて座った。すると何故か体がポカポカしてきた。

「葛葉は顔に感情が出やすいんじゃないな。」

「そう…?」

「さつきも今も何か悩んでる時に顔にはつきり出しておつたもん。ひまわりのことやこゝでの生活のことか分からんけど、話してみると意外に楽になったりするもんじゃよ。」

「…。」

葛葉は一部話を置き換えてドーラに打ち明けた。

「なんか、その…、俺の召使的なやつと超久しぶりに意見が合わなくてさ。今までも俺が意見を押し通してアイツがしょうがなくなっていくてきたみたいな感じだったんだけど、今回はアイツが珍しく反対してきてさ、でも俺は俺の考えを曲げることが嫌で…。」

ドーラは静かに頷きながら葛葉の話を聞いていた。

「その召使い殿と喧嘩してしまつたんじゃないな。」

「喧嘩っていうのかな。」

「意見が合わずにお互い苛立ってしまったんじゃないか?」

「そうなんだけどね。」

「良いことじゃないか。」

「えっ?」

「喧嘩をする、意見が合わなくて反発し合う。良いことじゃ。大事なのはその後じゃ。その後どうするかが重要じゃ。ずっと相手が悪いって思っただけを正当化してしまうことがダメなだけで、冷静に相手の言い分を理解することが大事なんじゃ。」

「…。」

「今は相手の言い分を思い返して理解するときじゃ。」

「そう、か。」

「どうじゃ、相手の言っただけでも理解できるか?」

葛葉はもう一度豚が言っただけのことを思い出す。確かに自分が魔族だと伝えた場合のデメリットも分かる。

「…アイツは俺のことを心配して反発したのか。」

「わかったのならよかった。」

「ありがとう母さん。ちよつと出かけてくる!」

葛葉はソファを勢いよく飛び立ち、家を出て行った。

「気をつけるんじゃないぞー。…ふふつ、やっぱり顔に出やすいのう。」

ドーラは悩みが解けて出かけて行った葛葉のすつきりとした顔を思い出し、笑っていた。

勢いで家を出たものの豚がどこへ行ったかなんてわかるはずがなかった。葛葉は周りに誰もいないことを確認し、空へ飛び上がった。

「『千里眼』！」

空から豚のことを探すが、本体どころか魔力の痕跡すら見つからない。

「あいつ、どこまで行きやがった。」

葛葉は思いつく場所に向かった。着いたのは豚を見つけた路地裏だった。

「豚〜?」

薄暗く、曲がりくねっており奥まで見えない。その入り口で豚を呼ぶ。

「また行かなきゃなんねえのか…。」

葛葉が恐る恐る足を進めていく。その時、葛葉の足元で何かが動いた。

「だああああああああ!!!」

大きく後ろに飛び跳ね奇声をあげた。

「つてまたあの時の猫かよ!!?」

「ネ〜ゴ…。」

「なんだその脱力し切った目は。お前さては豚か?」

「その子は豚じゃ無いよ。」

突然人の声があった。驚いて振り返ると自分と同じくらいの間人が立っていた。

「その子は猫の『ロト』。僕の飼う猫さ。」

「ネーゴ…。」

ロトは飼い主に駆け寄り抱き抱えられた。その姿を葛葉はじつと見ていた。

「こんなところで何か探し物でもしてたんですか？」

話しかけられてふと我に返る。

「あつ、えつと。俺もペットを探してて。」

「逃げ出しちゃったんですか。」

「そうっすね…。」

「何か特徴ありますか？」

「えっ?。」

「僕も探すの手伝いますよ。」

正直、探すのを手伝うと言われ助かると思った葛葉だったが、自分が探しているのが喋る豚だということに気づき断った。

「そうですか…。」

「手伝わせせるのも悪いんで。」

「ここら辺だと猫は結構いるんですけど、あつちの学校の裏の山とかだといろんな動物がいますよ。」

「そうなんですね。」

「さつきも子豚が歩いてましたもん。」

「えっ!?!?」

豚の情報に思わず声が出てしまった。

「…ペットつて子豚だったんですか?」

「まあ、はい…。」

「(まずい。豚飼ってる人間なんて普通いねえ!)」

「…面白いですね。」

「え。」

「普通の人で豚飼ってる人初めて見ました。家が農家とかですか?」

「いや、普通つすね。」

「珍しいですね。」

「そうですね…。」

「僕が見た時はちょうど山の入り口辺りにいました。5分くらい前なんでそう遠くは言っていないと思います。」

「ありがとうございます！」

葛葉は急いで山へ向かう。

「そうだ。名前教えてください！」

葛葉は振り返り自分の名前を言った。

「葛葉っす！」

そう言うと山に向かって走っていった。

「…葛葉ね。彼とはいろいろありそうだね。」

抱えていたロトを下ろす。

「見張つといてねロト。」

「ナゴ。」

言われた山は昨日リユル達がいいた山だった。

「アイツなんでここに。」

葛葉はそのまま山を登っていく。しばらくすると少し開けた場所に出た。

「いい景色だな。」

そこからはひまわりの学校と街を一望できた。葛葉は微かに魔力を感じた。ここよ

りも上の位置から発せられていた。

「豚か。」

周りを確認し一気に山頂まで飛び登る。やはり豚がいた。

「何してんだ。」

「……ラグーザ様。」

葛葉は羽をしまい豚に近づくと。

「魔界に帰る準備ですよ。」

「簡単には帰れないはずだろ。」

「ワタシー匹くらいなら行けます。」

豚の周りには書き途中の小さな魔法陣と来るときに持ってきていたリュックがあった。

「本気で帰る気なのか。」

「好きにしろと言ったのはあなたでしょ。」

葛葉に背を向けながら黙々と準備を続ける豚。

「……まあな。」

「わざわざ見送りに来たんですか？」

「ちげえよ。俺は……。」

「…。」

自分の言いたいことを言い出せずにもたもたする葛葉。

「お前の言っていることにも一理あつたなつて、思ったんだよ…。」

作業していた豚の手が止まる。

「確かに俺が魔族だつて伝えて何一つ安全だなんていう証拠は無い。これは俺が俺を信頼してくれてるひまわりさんを信頼してるからそう思つてるだけなんだ。」

「…。」

「だとしても。俺はあの人に受けた恩を返そうと思つてる。俺にしかできないことで返すべきだと思つてんだ。」

「…それにどんな支障があれどですか？」

「ああ。」

「初めて自分で自分の非を認めたと思つたら、結局わがままはそのままですか。」

「お前が手伝つてくれれば、その、俺は助かる、つていうか…。」

豚は大きくため息を吐いた。

「ワタシは手伝わらないなんて言つてないですよ。人間に正体を明かすのが納得いかないだけです。ただ、そこまでしてやり遂げたい何かをラグーザ様自身で見つけたという喜びが勝つてしまいましたね。」

「どういうことだ。」

「思っていたよりも早く成長してるってことです。」

「成長……。俺が？」

「とりあえず色々報告したり確認したり、やることができたので魔界には一度帰りますね。」

「報告って、父上に??？」

「そうです。こっちでしばらく暮らすというラグーザ様本人の意志も伝えておきます。何か問題でも?」

「いや、問題しかないだろ。簡単に父上が許すとは思わないんだけど。」

「ラグーザ様自身で決めたことですし、大丈夫でしょう。」

豚は魔法陣を描き終えて少し後ろへ下がる。

「『ポータル』。」

地面の魔法陣が光だし人間界に來た時の入り口に似たモヤモヤしたものが開いた。「これで一応帰れるのか。」

「今のワタシだとこれが限界ですね。あんまり維持もできないのももう行きますね。」
周りに散らかった荷物をリュックに詰めてポータルに入っていく。

「あ、そうだ。正体を明かすのはラグーザ様に任せます。くれぐれも気を付けて。」

「ああ。父上によろしく。」

豚が入った後、ポータルは弱々しく消滅していった。葛葉は覚悟を決めて家へ戻った。

「ただいま。」

リビングへ入るとさつき座っていたドーラの隣にひまわりがいた。

「おかえり葛葉。ひまわりが起きてきてな、お腹減ってたらしいから軽く食べれるものを作ったんだ。」

「母さんが作ったの？」

「わしはひまわりに言われた通りにしただけじゃ。」

「それでも作れたのはすごいね。で、何これ。」

「これはね…。」

ソファアに深くもたれこんでいたひまわりが体を起こして説明しようとする。

「いいよ姉ちゃん、そのままです。」

「そう?。」

「だってまだ調子悪いんですよ。」

「うくん、ちよつとまだぼーつとしてるくらいだよ。」

「どこか痛いとかは？」

「もう大丈夫だよ。それにドーラの作った『おかゆ』があるし！」

「そうそうおかゆっていうんだ。お米をトロトロになるまで煮込むんだ。」

「へえ…、美味いんすか。その、見た目的に。」

「それが美味いんじゃ。」

「あ、葛葉も食べる？」

そう言って持っていたスプーンですくって葛葉に向ける。

「あ、いや、それ…。」

「ん？あつ、ごめん！これじゃうつちやうよね…。」

「いや、まあそうっすね。っていうか良いよ。俺らまだ昼飯食べてないし。」

「そーいやそうじゃったな。どうするか。」

ドーラがソファアールから立ち上がりキッチンへ向かい、何か探し始める。

「ごめんね、ひまがご飯用意できなくて。」

「体調悪いんだししょうがないよ。」

「一応築にはカッパなんちゃらがあるって言われたんじゃが…、あれどこだ。」

「あ、それなら流し台の下のところに入ってるよ。葛葉見てあげて。」

「お、あった。」

葛葉がキッチンの方を覗くと、大きな袋に入った色々な種類のカップ麺があった。

「これ食べ物なんすか。」

「築曰くそうらしいぞ。」

「それはね、『インスタント麺』って言うってお湯を入れるだけでラーメンとかうどんがで
きるんだ。めっちゃ忙しい日とか、時間がない時とかにすぐできて便利なの。」

「へえ、面白いな。」

「ひまわり、お湯つけてさっきの方法で良いのか？」

「うん、そのやかんに水足して使って。」

「俺これにしよ。母さんは？」

「ん、わしはその赤いやつでいいや。」

ドーラはやかんを火にかけ、葛葉はその間に準備をし始めた。

「えーっと、書いてある通りにやると。俺のは開けるだけっすけど、母さんのは粉スー
プってのが入ってたんだけど。」

「粉スープは先入でいいんだよ。」

「じゃ、入れます。後はお湯入れるだけだな。」

「沸いたらわしが入れておくから、テーブルの準備頼んだ。」

「任せてくださいませ。」

葛葉はササツと食べる準備を進めていると。

ヒューー！

「おわっ！何の音っすか。」

「あ、お湯が沸いたんだよ。」

「わしも最初はこの音に驚いた。さ、持っていくぞ。」

お湯を入れそれぞれの前にカップ麺がきた。

「俺のは3分だけど、母さんのは5分なんだ。」

「葛葉はそれにしたんだ。ひまはねドーラの方が好きなんだ。」

おかゆを食べ終えたひまわりが葛葉の隣に座る。表記された時間を待っていると葛葉のが先に出来上がった。

「母さんのはもうちよつと時間かかるんだね。」

「そうじゃな。先に食べていいぞ。」

「じゃ、いただきます。」

蓋を開けるとさつきまでカサカサになっていたのがふっくら美味しい匂いを纏っていた。

「うおっ、すごいな。」

箸で麺と具を混ぜ、口に運ぶ。

「…、めっちゃうめえ。」

「でしょ！美味しいよねえ。」

止まらず食べ進める葛葉。それを羨ましそうに見ていたドーラだったが、気付けば自分のも出来上がっていた。

「どれ、わしも食べよう！」

蓋を開けると大きな茶色の四角いものが目に入った。匂いはとても美味しそうである。

「何じゃこれ。」

「これはね、油揚げって言ってこの『きつねうどん』には欠かせない食べ物なんだ。」

ドーラはその誘惑に負け、ゆっくりと油揚げをかじる。

「あっつ！美味しい！」

「あはは！火傷しないようにね。それスープいっぱい吸うから。」

それからドーラも葛葉も夢中で食べ進めた。

「ふう、思ったよりも美味しかったな。」

「まだまだいっぱいあったし、次も楽しみじやな。」

「これ美味しいけど食べすぎると体に悪いんだよね。」

「そうなんだ。」

「あ、ひまわり。また少し寝ると良いぞ。」

「なんで？」

「今は結構良くなってきたと思うからもう一回くらい寝れば完璧に治ると思う。」

「じゃあ4時くらいまで寝るね。起きたら買い物に付き合ってね。」

「ああ。」

ひまわりはそのまま2階へと上がっていった。

その様子を仕事の合間に確認していた築。

「全然普通に過ごしているんだよなあ。」

何一つ不審な動きをしない2人に勝手に監視し続けている罪悪感をずっと感じていた。

「社くん、ちよつといいかね。」

聴き慣れた声に背筋がゾワつとする。

「な、なんでしよう。課長…?」

絶対昨日のドーラについて言われる、そう確信した。

「なんだか昨日は申し訳ないことしてしまったね。あんな美人な嫁さんが迎えにきてくれたのに無理矢理残業させようとしてしまった。」

いつもは自分の間違いを絶対に認めない課長が頭を下げてきた。

「い、いや課長！大丈夫ですよ！」

「昨日彼女相当怒っていたから、これからはもっと社員のことを思うようにしようと思っただ。」

「そうなんですよ…。」

気持ち悪いくらいに課長が変わった。ドーラが、あの一瞬で人を変えた。

「それでな、我が部署の業務活動を見直そうと思つてさつき社長に直談判したんだ。」

「えっ!?？」

とんでもない行動力。

「したら新社員も入ることが決まつて、残業手当と勤務時間にも変更が許されたんだよー！」

「よかったですね…。(ドーラさん、あなたの一言で会社が大きく変わりました。)」

課長はその場で社員一同に変更点を説明し始めた。

「つてことがあつただよ。」

「ここはチャイカのバー。築は今日あつたことをチャイカに話した。」

「だからアンタの帰りが早かったワケね。この時間に来るなんてあり得なかったもの。定時が早くなったのは嬉しい？」

「ん、定時を早くして週に3時間以上の残業するようになったけど。嬉しいまではいいかないけど、予定に合わせて帰れるから良いっちゃ良いかも。」

「そう、ならよかったじゃない。アンタの心配してる家に早く帰れて。」

築は飲んでいた烏龍茶をそつと置く。

「それがさ、何も起きないんだよ。」

「あら、良いことじゃない。それとも何か起きて欲しかったの？」

「何も起きないとただプライベートを覗いてるだけなんだよ。」

「覚悟決めてそうしたんじゃないの。」

「そうなんだけどさ、あの人たちはそんな悪い人たちではない気がするんだ。」

「へえ、なにかあったの？」

「いや、家事をやらせてるんだけどその中でドーラさんがひまわりの料理の手伝いをしてくれてるんだよ。この前嬉しそうに俺の分の夕飯を作って置いてくれてたんだ。それがひまわりが作ったのと同じくらい美味かったんだ。」

「それひまちゃんが作ったやつじゃないの？」

「俺がひまわりの料理を見分けられないとでも…？」

「そうかアンタイカれた娘溺愛野郎だったわ…。」

築は残ってたお茶を飲み干し、話を続け始めた。

「てことがあってね、明日また帰りに寄るからその時返すわ。」

「あら、もう帰るの。」

「時間も夕飯時に間に合いそうだしさ。」

「じゃ、また明日。」

カラーン…

築が帰った後、片付けを始めるチャイカ。

「…勝手に会いに行ったら怒られるかしら。でも気になるのよね、社の周りから感じる

あの魔力が誰のものなのか。」

チャイカはドーラの正体を疑っていた。

葛葉が洗濯を終えリビングでドーラと畳んでいるとひまわりが起きてきた。

「どう体調は。」

「さつきよりも全然良い感じ！」

「よかったね姉ちゃん。」

「じゃあこれ終わったらみんなで買い物行くか。」

「早く終わるようにひまも手伝うね。」

3人で洗濯物を畳み、買い物準備をして出掛けた。

「今日はなにを作るの？」

「そうだね、ずっと寝てたからなにも考えてないや。」

「ひまわりも病み上がりなんだし、あんな重いのはやめとくか？」

「そうなるよ、お魚にしよう！」

色々考えているうちに商店街へ着いた。

「えーと魚屋魚屋……。」

「ひまちゃん。」

「あつ、お魚屋さん！」

「いらつしやい！おっなんだか見ない顔だね。」

「えーと、こつちが弟の葛葉でこつちが……。」

「母のドーラじゃ。」

「あら、外人さんか。社さんいつの間にか再婚してたのさ。」

「……そ、そんなことより今日ひま調子悪くて寝てたんだ。だから病み上がりにも食べれるお刺身無い？」

「大丈夫か？そんならこの辺だと油もクドく無いしタンパクで美味しいぞ。」

ひまわりと魚屋が話す様子を何か引つかかったように見るドーラ。

「どうかしたの。」

「あつ、いや大丈夫。」

「あのさ、姉ちゃんがドーラさんのことを『ママ』って呼ばないのは…。ごめん今の無し。」

「分かってる、今のわしじゃ本当の母親の代理にはならんのだろう。ただの名称にしかすぎないその呼び方に、なぜか執着してしまってるんじゃ。」

「無理に考えなくたって良いんじゃない？」

「え…？」

「こんな生活してる人なんか他にいないっすよ。本当の家族の中で違う奴らが混ざって生活してるなんて。だから母さんがそう呼ばれたらと思うのも分かるし、姉ちゃんの中でそう呼べないってのも分かる。」

「葛葉…。」

「無理に考えて焦る必要は無いよ。」

「ありがとうね〜！」

「毎度！気をつけて帰んなよ！」

「うん！なに話してたの？」

「いや、すっかり治っていつもの姉ちゃんだなんて。」

「話してたら楽しくなってきたきちやった。」

「それは良かった。ほら行く、母さん。」

「（焦らなくてたつて良い、か）ああ、そうだな。」

3人並んで仲良く帰路につく。家に着き玄関を開ける。

「ただいま。」

「あつ、おかえり…。」

「え？」

「なんでパパいるの!？」

「まだ5時過ぎつすよ!？」

「今日は早いんじゃない。」

「あく、それについてはこれから話すよ。」

とりあえず買ってきたものをキッチンへ運び社の話を聞く。

「えーと話の発端は昨日のドーラさんなんだけど。」

「え、わし？」

「昨日俺を迎えにきた時、ドーラさんが話した人覚えてます？」

「ああ、あの腹立つ奴な。」

「その腹立つ人、俺の上司なんですよ。」

「上司？」

「パパよりも偉い人のこと。」

「…えっ！」

「まさかリストラ？」

「いやいや無い無い！怖いこと言うな！」

「良かった。」

「あれがきっかけでその上司がマルつと変わっちゃってさ。あ、良い方にね。それで業務活動、時間、残業等の変更が入ってなんと定時で上がれちゃったっていう。」

「母さんすげえな。」

「え、いやわしなにもしてない…。」

「凄いやんドーラさん！」

「だから早く帰ってこれたわけね。でもさつき帰ってきた感じだったけど、それまでなにしてたの？」

「ん？ああ友達のとこ寄ってきたんだ。」

「チャイちゃんのとこ？」

「そう。あ、心配するな酒は飲んでないぞ。」

「チャイちゃんって誰じゃ？」

「パパの友達で面白くてすつごい可愛い人！バーやってるんだ。」

「今度みんなで行くか。」

「それいいね！」

「(なんかモヤツとするんじやよな…)」

社の話も終わりそれぞれやることを始めた。

「ひまわり良くなったみたいだな。」

「うん！今日は2人がみててくれたからね。」

「そうか。ありがとうね、2人とも。」

「いえいえ。」

「あ、ひまわり！わしもなんか手伝おう！」

さっきのが無かったようにひまわりに寄り添うドローを見て一安心すると同時に、自分がこれから言わなきやならないことを思い出した葛葉。どう話すべきか考えるため、一度部屋に戻った。

「葛葉く、ご飯だよ〜！」

それからしばらく時間が経った。下からいつもと変わらないひまわりの声がする。

「すっかり治ったな…。」

どう打ち明けるべきか悩んでいたけど、どうやったって混乱を招くはず。だからってサラッと打ち明けることでは無い。今後に関わる大事な話だ。なんて思いながら階段を降りていく。

「さっ、ご飯にしよ！」

「うん。」

「葛葉く、これ運んでくれ。」

「ドーラ、それ俺が運ぶよ。」

葛葉はこんな時間がこれからも続けば良いのにといい、軽く微笑んだ。

「なんで笑ってんの？」

「なんでもないよ。腹減った、早く食べよ！」

「ふふつ、どうしたの葛葉？」

「ひまわり、みんな揃ったから食べるぞ。」

「は〜い。」

「それじゃあ、いただきます！」

「今日はひまが病み上がりだからお刺身だよ。」

「お刺身ってなんじゃ？」

「これはね、The 日本食と言っても過言じゃない料理で新鮮な魚を丁寧に下処理して薄く切った料理なんだ。この醤油につけて食べると美味しいよ。」

「どれどれ…、おっ！美味しい！」

「ドーラさんも好き？」

「わたしは肉の方が好きじゃが、この刺身は肉と同じくらい好きじゃぞ！」

「さすがいつものお魚屋さんだなく。ドーラさんも好きになっちゃうんだから。」

「あの人の刺身食べちゃったら他の刺身じゃ何か足りないって思うよな。葛葉も、美味しいだろ？」

「家だと刺身なんて出たことなかったんで、初めてですけど美味しい…。」

「えっ、食べたことなかったの？」

「魚料理は出るんですけど、生は無かったっす。」

「そうなんだ。なんかこうやって皆揃ってご飯食べれるって良いね。」

「そうだな、これからは休日だけじゃなくて毎日この時間に食べれるんだからな。」

「ありがとうね、ドーラさん。」

「わたしはなにもしてないんだって！」

ドーラのものにも意図していない働きにより社の会社が大きく変わった。その話をしながらいつもより賑やかに時が過ぎた。それから片付けをし、順々に風呂を済ませて

いった。

「ふうさつぱりした。あれ、まだいたんですかドーラさん。」

最後に社が風呂から上がってくるのとリビングにドーラが座っていた。

「ああ、昨日飲んだコーヒーがまた飲みたくなつてな。」

「あ、じゃあ俺も飲も。」

「わしやるよ。コーヒー淹れるの慣れたいし。」

「良い？ならお願いするよ。」

ドーラがキッチンでお湯を沸かしながら社に話をし始める。

「なあ築。」

「はい？」

「お前は、ひまわりがわしを『母』と呼ばないことに気付いておるか？」

「…はい、でも！」

「良い。わしもなんとなくは分かつておる。買い物行っている時に葛葉に言われたんじゃ。焦るなつて。」

「ドーラ…。」

「昨日の今日でわしらの関係に慣れるという方が難しいんじゃ。聞いていれば、築も葛葉も度々話し方が戻つておるし。」

「それは、すみません。」

「ほらな。」

「あつ、ごめん。」

「こういうのも含めて焦らないようにするにはどうすれば良いのか。わしなりに考えてみたんじゃない。」

沸いたお湯を注ぎ、できたコーヒーを築のどこへ持つていく。

「ありがとう。」

「で、その答えが。」

「ゴクリ……」

「順序を踏むべきだと。」

「そういう感じね。」

「まだぎこちないのはお互いに壁があるからじゃ。その壁を少しずつ壊せば良くなるんじゃない。」

「その壁つて、俺含めた他3人分ありますけど。」

「確かに……。じゃあまずは築からで。」

「なにするんですか?」

社はコーヒーを飲みながらドーラの答えを待つ。

「わしの、本当の姿を見せよう…。」

「…えっ?」

社は飲んでいたコーヒーの味が一瞬で無くなった。

コンコン…

「姉ちゃん、入っていい?」

葛葉は覚悟を決め、ひまわりに真実を打ち明けに部屋を訪ねた。

「いいよ。」

部屋に入ると学校の準備をしているひまわりがいた。

「明日からは行けそう?」

「うん、今日ずっと寝てたからまだ眠くなくて。葛葉が来るなんて、どうしたの?」

葛葉は静かに深呼吸をする。

「姉ちゃんさ、俺が治ったら話すって言ったの覚えてる?」

ひまわりの手が止まる。

「その話をしにきたんだ。」

「…分かった。」

そういつて準備していた鞆を横にどかして葛葉の話を聞き始める。

「まず、今日姉ちゃんが体調崩したのには俺のせいなんだ。」

「どういうこと?」

「昨日、急な大雨が降った時。俺が姉ちゃんを学校まで迎えに行った

帰り、姉ちゃんの肩が少し雨に濡れてたんだ。」

「それだけ?」

「あの雨は催眠作用のある魔術でその雨に濡れた人たちが、昨日の夜中に学校に無意識に集められたんだ。」

「…催眠? 魔術? なんのこと。」

「操ってた奴らは集めた人達から生命力を魔力に変換した物を吸収してしまった。だからひまわりさんは体調を崩したんだ。」

「待ってよ…、なに言ってるか分かんない。」

いきなり言われた事に当然理解が追いつかず混乱するひまわり。

「訳分かんないけど、なんで葛葉のせいなの?」

「俺は、助けてもらった恩を返すためにひまわりさんを守るって決めてたんだ。それなのに守れ無かったから。」

「守るってなに…。葛葉になにができるの。」

「とっさでなにもできなかつた。ただ力任せに払うだけで。」

「なんでその場所に葛葉がいたの…。魔術ってなに、催眠ってなに、操られたって、魔

力って、払うってなに……。なんなの葛葉……。」

ひまわりが不安まじりな顔で葛葉を見つめる。

「俺は……。」

「わしはな……。」

葛葉は背中から羽を出し、目を赤く光らせる。ドーラは火の粉と共に翼と角、尻尾を発現する。

「吸血鬼なんだ……。」

「ファイヤードレイクなんじゃ。」

同時刻、同じ家の中、1階と2階ではそれぞれの正体を明かした。反応は2人とも同じく、理解が追いつかず固まっていた。それは驚きからか、魅せられたからか。それとも恐怖か……。

「わしは人間じゃない。魔界から出てきたドラゴンなんじゃ。」

「……まあ、普通の人じゃ無いなって思っていましたよ。」

「驚かないのか？」

「俺と初めて会った日もその姿だったの覚えてないんですか。コンビニの上から話しかけられた時、その姿で家に来たときは違う格好だったから気のせいかと思っただけです。これみて納得しました。」

「なんとも、思わないのか…?」

「いや、色々思うことはありますよ。でもただ姿が変わっただけで俺を襲ったり、何かを壊したりはしないだろうなって。」

「どうしてそう思う?」

「今までの行動見てたら分かりますよ。敵意とか悪い人じゃ無いつてことくらい。逆に人じゃない方が家に居てて怖く無いまでありますよ。」

社は落ち着いたようにコーヒーを飲む。

「でも、わし火とか出るぞ。」

「でしようね。」

「飛んでしまうぞ。」

「そりゃあね。」

「怖く無いのか…?」

「え、なんでですか。まるでアニメみたいで俺は好きですよ。」

「えっ好き!?!」

ボウ!

突然の社の言葉に驚き口から火が出た。

「ヒエッ。」

「あ、すまん。」

「ドーラ。家の中でそれ禁止。冗談抜きで燃える。」

「すまん。」

「…吸血鬼って。」

「黙っててごめん。でも…!」

「ごめん、出て行ってくれ。」

ひまわりが葛葉から顔を背ける。

「え…。待ってひまわりさん!」

「今はもう話したくない。」

ひまわりが葛葉を無理やり部屋の外に押し出そうとする。

「まだ、待って!」

抵抗する葛葉。

「出てって!」

バン!

大声で怒鳴られドアを閉められた。閉まり際に見えたひまわりの顔は涙が流れていた。

「…ごめん、姉ちゃん。」

勝手にド葛本社 第九話 「戸惑い」

目をつぶつてもひまわりの顔を思い出し、うまく寝つけなかった葛葉。どんな顔して朝いれば良いのか、なんて話したら良いのか、色々考えたがなにひとつ答えは出なかった。それでも起きて部屋から出なければいけない。ここでうずくまっている方が返って気まずいまである。どうしようしようしようと考えながらも体は真っ直ぐ階段を降り始めていた。この先にはひまわりがいる。どんな顔、どんな声で話そうか。

「あ、やっと起きてきた。おはよう葛葉。」

まるで昨日の出来事がなかったかのように接してきたひまわりに、葛葉が気まずくなっていた。

「あ、おはよう…。」

そっけないように返したつもりだったが驚きと焦りが顔に出ていたのが洗面所で分かった。

「なんで、普通なんだ…?」

ひとまず顔を洗って気を落ち着かせる。今の状態をひまわりに勘付かれるわけには

いかない。あつちが気にしていないようならこつちも同じように接しないといけないのだ。

「おつ、葛葉おはよう。」

気を落ち着かせていると社が入ってきた。

「おはよう父さん。」

「歯磨きしたいんだが、良いか？」

「ごめんすぐ退けるよ。」

「すまん。」

葛葉が横に退けると社は歯ブラシを咥えたままネクタイや寝癖を直し始めた。

「父さんはさ、嫌なことがあった時とか次の日どうしてる？」

葛葉は無意識にそんなことを聞いた。社は手を止めて葛葉の方を見る。そして再び手を動かしながら答える。

「うーん……。ふおれはほういうほひ……。」

「なに言ってるか分かんないよ。」

社は歯磨きを終え口をゆすいでから話し始めた。

「俺はそういう時とりあえず冷静になれるまでなにも考えないかな。あれ嫌だったなつてなってる時はそれを鮮明に思い出せちゃうからすぐに同じ状態になるんだよ。だか

らなにも考えないでその記憶を薄れさせる。そしてから落ち着いて考え直すかな。」

「なにも考えないか…。」

「葛葉つぱく言うなら…。」

「ん?」

「焦るな、かな。」

ニヤツと葛葉の方を向いて洗面所を出て行つた。

「はあ!?ちよ、待つてつて!なんで知つてんだよ!」

昨日ドーラに言ったことを改めて聞かされるとだいぶくるものがあつた。

「…でも良いアドバイスにはなつたな。」

社のおかげで落ち着きを取り戻せた。そのままリビングへ戻る。

「おはよう葛葉。」

「おはよう母さん。」

ドーラと朝の挨拶を交わし、何気ない会話をひまわりに振る。

「具合はどう?」

「うん。おかげですつかり治つたよ。今日からまた学校行くからよろしくね。あ、それと。」

ひまわりは葛葉に手招きをした。

「どうしたの？」

「これなんだけど。」

ひまわりがこっさり見せてきたのは小さな箱だった。

「なにこれ。」

「これひまがパパにいつも作ってるお弁当ってやつなんだけど、ドーラさんが食べた
いって言うからみんなの分作ったんだよ。」

「へえ、でもなんでこんな密かに渡すの？」

「それが、ドーラさんこれが超特別な食べ物と勘違いしててさ。見せたらすぐにでも食
べ出しちやいそうで…。」

「なるほどね。」

「だからお弁当ここに入れとくから、お昼に出して食べてね。」

弁当を戸棚の隅に隠した。

「弁当がそんなに気になってたんだ。」

「そうらしくて、昨日夜お風呂は言った時に言われて…。」

「え、あつ。」

ひまわりは突然下を向き、無言で2階へ駆け上がった。

「嘘、だろ…。」

葛葉は初めてひまわりも昨日のことを気にしていたことを知った。どこかへいった気まずさが舞い戻ってきた。それでもこのまま無かったことにはできないと思い、後を追って部屋を訪ねる。

コン、コン…

「姉ちゃん…、あのさー!」

葛葉が話しかけたと同時に部屋のドアが開いた。

「ひま、もう学校行かなきゃだから…!」

また顔を背けながら葛葉の横を早足で抜けるひまわり。

「待って!」

「っ…!」

「昨日の、話なんだけど…。」

葛葉が昨日のことを確認し始めようとした時。

「ごめん、昨日体調悪くて変な夢見てさ。そこで葛葉に変なこと言われちゃって、それで勝手に気まずくなっちゃってるんだ。ほんとごめんね!」

振り返ってそう言ったひまわりの表情には、どこか悲しさを感じた。

「…ああ、そっか。」

葛葉は頑張って笑顔を保ったが、階段を駆け降りていくひまわりの後ろ姿を見た時、

心が折れそうになった。

「あれ、どうしたひまわり。今日は早いな。」

「ちよつとやることがあるから早めに出るだけだよ。」

「そつか、気をつけてな。」

「うん。行つてきまーす!」

ひまわりが出てから少しドーラと何気ない会話を交わした社。

「そろそろ俺も行くか。」

「わしのせいで色々変わってしまったて申し訳ないが頑張つてくれ。」

「いやいやそんなにしよんぼりしないでよ。逆にありがたいんだから。」

「そうなのか…?」

「早く帰れて仕事が楽になってやりやすくなったのはドーラさんのおかげなんだから。」

「…さん、ね。」

「あつ、ド、ドーラのおかげ…、だよ。」

「うん、よし!」

社は照れながらも徐々にドーラとの接し方を改めていた。

「じゃあ行つてきます。」

「あれ、その袋はなんじゃ。」

社の手にはいつもの会社用の鞆のほかに、大きな袋があった。

「ああこれは友達に借りていたもので今日返すんだ。」

「そうか。気をつけてな。」

「うん行つてきます。」

ドーラは社を見送つた後、キッチンに戻り朝の片付けをし始める。すると2階から葛葉が降りてきた。

「さつき築も会社に行つたぞ。」

「見送り忘れてた……。」

そう言いながら廊下に向かう葛葉を見てドーラが話しかける。

「葛葉、調子悪いか？」

「……いや普通だよ。」

「なにかひまわりとあつたのか？」

「……なんで。」

ドーラは洗い物をしながら答える。

「うーん。朝2人で何か話してるかと思つてたら、ひまわりが急に二階に行つて、それを追いかけるように葛葉も行つたし、その後ひまわりだけ降りてきてさつきと学校行つてしまつたしな。」

「…母さんってさ、なんで毎回分かるの？」

葛葉が敵わないように笑う。

「そりゃここの母じゃからな！」

「さすが。洗濯終わったら話聞いてよ。」

「うん、いいぞ。だからシャキツとしな。」

葛葉は洗濯を素早く終わらせ、リビングでドローラに一部隠しながら昨日の話をする。そこにはドローラが準備したコーヒーが置いてあった。

「なにこれ。」

「コーヒーじゃ。」

「知ってるけど、なんで。」

「これ飲んだら落ち着くからな。わしが。」

「母さんがかい。」

淹れてもらったので飲んでみる葛葉。

「…苦っ。」

「でも美味しいじゃろ？」

「いや、苦い。あー、無理。」

「ありゃ。」

しょうがないので葛葉の分もドーラが飲むことになった。

「そうだ、話してみよ。」

「…昨日の夜、姉ちゃんと話してただけどその時に俺が言い方間違えて姉ちゃんと気まずくなっちゃってさ。それでさつきもう一度話そうとしたら、昨日体調悪かったから変な夢見たって、聞いてなかったことにされたんだよ…。」

「なるほどな。それで葛葉はもう一度話はしたいんじゃないか、そのことについて。」

「うん。これは話さないといけないことだから。」

「そうか。」

自分の分のコーヒーを飲み干し、葛葉の飲めなかった方に手をつける。

「…。」

ドーラの顔が固まる。

「どうしたの?」

「ごめん葛葉。これ分量間違えてた。苦すぎる…。」

ドーラも屈するレベルで苦かったらしい。

「あ、さすがに? お湯沸かして薄めてみたら。」

「うう、そうする。」

ドーラは激苦コーヒーを持ってキッチンへ行く。

「夢にされちゃ困るな。どうするか。」

「そこなんだよね。」

「正面から一度謝ってみるのはどうじゃ?」

「えっ?」

「夢でのことなのになんで謝ってるんだらうってなるじゃろ。そうなたら夢じゃないことを伝えてもう一度謝るんじゃ。」

「謝る、か。」

「大事なことじゃぞ。」

「前置きを挟んでしまうからその場を長くさせてしまってるんじゃないか?それならスパッと話し始めてみるとか、変えていくんじゃよ。」

「…なるほど。さすが母さん。」

「昨日はわしがアドバイスされたからな。お返しじゃ。」

ひまわりはどう接するかの話し合いをしていた少し前、社は入社前にチャイカのバーに寄っていた。

「これ借りてたカメラ。」

「…ん。」

「顔どうした。」

社がチャイカの顔を覗き込むようにすると。

「あのねえ！私の店は深夜から明朝まで営業してんの！ついさつき終わって寝るところだったの。」

「な、それは悪かった…。」

「良いけどさ、これデータ消した？」

「あ、消してないやごめん。」

「良いわよやつとく。もう出勤でしょ？」

「すまん、じゃ行くわ。」

「はいはい。」

ガチャン…

チャイカは社が出て行ったのを確認して店の鍵を閉める。そしてカメラのデータを抜き確認し始めた。

「…あらら、こんなバッチリ写っちゃってる。社もいやらしい位置につけたわね。」

カメラのデータには社が確認できていなかった日中の映像が残っていた。そこにはリビングで人目を気にしながら角、尻尾を出して日向ぼっこするドーラの姿が映っていた。

「社の周りから感じた魔力はこのファイヤードレイクだったか。会いに行こうかし

ら。ドーラちゃん。」

チャイカは静かにカメラを閉じドーラの正体を知った。

朝のSHRが終わり1時間目の準備をしているひまわりのもとに笹木がやってきた。

「ひまちゃんいる〜?」

「どうしたの?」

笹木に呼ばれ廊下へ出る。

「昨日大丈夫やったん? ひまちゃんが休むなんて珍しかったからさ。」

「どうやら心配で見にきたらしい。」

「ごめんね、急に体調崩しちゃって。」

「なにが原因やったん。」

「あ…。」

ひまわりは昨日葛葉に言われたことを思い出す。

「…お風呂上がった後に髪乾かさず寝ちやったからかな!」

なにもなかったように笑いながらそう答える。

「そうやったんか。朝見かけた時話しかけようか迷ったんよ。でもなんかくらい顔してたからさ。」

「え、そんな顔してたの？」

「気づいてなかったん？なんかすごい顔してたよ。だから何かあったんかなって。」

ひまわりは自分が気づかずに昨日からのことを引きずっていた。

「でも、もう大丈夫だよ。すっかり元通り！」

これ以上笹木に心配されなくなかったひまわりは精一杯元気なアピールをしてみせた。

「ならええんやけど。」

「もう授業始まるから戻るね。」

「うん。またね。」

キーンコーンカーンコーン…

学校のチャイムが鳴り担当の先生の号令とともに授業が始まる。それでもひまわりは笹木に言われた言葉が気になって集中できずにいた。

「(そんな顔に出てたんだ。もしかしたら今日の朝も…)」

「本間、聞いてるか？」

「あ、すいません…。」

「珍しいな。お前がポーツとしてるのは。まあいい、教科書のここ読んでくれ。」

「はい…。」

「そんな調子のまま昼を迎えていた。いつものように笹木と弁当を食べるため学校の誰も使わない屋上に出るための階段上に向かう。

「おっ、キタキタ。」

すでに笹木が待つていたようですぐに弁当を食べる準備をし始めた。

「うち昨日1人でここで食べてん。そしたらひまちゃんから今日休むって言われるっていう。」

「あはは、ごめんって。」

「授業中見つけたすごいこと教えようと思つてたのに。」

「また何か見つけたの?」

笹木は授業中に自信が大好きな魚について調べている。

「今回は一昨日買った本に載つてた生き物についてなんやけど……」

ひまわりのお昼はいつもこうして過ごしている。笹木の新しく発見した出来事を聞きながら弁当を食べるのが日課なのだ。

「さすが咲ちゃん、目の付け所が違うね。」

「でしょ! やっぱうち天才なんだわ!」

「それを授業中にやらなければね。」

「授業中だからこそ気付くんよ、つてこの後体育や。うち着替えんといけないから先戻

るね！」

そういうと食べたゴミを片手に走り去っていった。

「ほんと元気だなあ…。」

ひまわりも片付けて教室へ戻った。一足先に教室へ戻った笹木はあることに気付く。

「(あ、ひまちゃんにこの前の傘返すの忘れてた。帰りでいつか。)」

ドローはりビングでテレビを見て、葛葉もその隣でポーツとしながら見ていた。すると何気なく見ていた番組が終わり、とあるドラマが始まった。

「これ前見たやつじゃ。」

「前も見たの?」

「いや点けたらちようどやって見ただけなんじゃが。」

以前もやっていた熱い昼ドラの続きだった。

「あれ、この人さつき別の女の人と仲良く食事してなかった?」

「でも今度はまた違う女と買い物に行ってるぞ。」

「これは不倫してんね。」

「ふりん…?」

「なんかで見たけど、結婚してる身で他の女性と関係を持つことだったはず。この男性

薬指に指輪してるのに別の人と会うときは外してるじゃん。こういうのは不倫の証拠だって兄貴が言ってた。」

「その不倫ってのはダメなことなのか？」

「うーん。人によると思うけど、結婚ってのがその人との愛を誓うわけだからどうなの？って話なんじゃないかな。」

「結婚か、となるとこの男はひどいことしてるんじゃない。」

「そうなるね。」

内容を理解しより一層昼ドラにのめり込むドーラ。そんなドーラを横目に葛葉は自分の部屋に戻った。

「さて、俺はどうするべきか。」

ひまわりに避けられている以上、自分から話しかけに行っても拒否られる可能性の方が高い。となると他の手段を考えねばいけない。

「こんな時豚がいりやあな。」

そんなことを思いながらふと目を閉じた。

ハッと目を開けると夕方4時になっていた。

「やべ、3時間も寝てた…。」

リビングに降りるとドーラが何やら本を読んでいた。

「何読んでるの？」

「昨日ひまわりに借りた料理の作り方が載ってる本じゃなかなか面白くてな。そういえば洗濯物大丈夫か？ だいぶ外寒いぞ。」

「あ、忘れてた。」

葛葉は急いで取り込み始めた。ドーラも手伝ってくれたおかげでそんな時間はかからなかった。その時葛葉は微かに外から魔力を感じた。

「（ん？ なんだこの魔力。近くに何かいる…。）」

前回のこともあつて魔物が人間界にいてもおかしくないということが分かったからか、どうしても不安な気持ちで葛葉に溢れていた。

「母さん、俺ちよつと出かけてくるね。」

「そうか？ 気をつけてな。」

「うん。」

颯爽と家を出て魔力を感じた方へ飛んでいく。

学校のチャイムが鳴りぞろぞろと下校し出す生徒たち。ひまわりは笹木と帰るため昇降口で待っていた。一通り下校する生徒の波が終えた頃、何かに警戒するように物陰

に隠れながら笹木が向かってきた。

「何してるの、咲ちゃん…。」

「しっ！今うちの名前呼ばんといて！」

「え？」

靴入れの前までいくとササツと自分の靴を履いて準備する、

「何してんのひまちゃん！はよ！」

「なんでそんな急いでんの〜！」

「そりゃ、今日ぐんみちに放課後呼び出されたんよ。前サボった授業の補習を一緒にやるとか言われてさ。誰がああババアとなんかタイマンで授業したいねん。」

笹木が警戒していた理由をひとりでべらべら話してくれていたが、話に夢中で後ろに立つ人物に気付いていなかった。

「あの、咲ちゃん…。」

「大体あんなババア化粧濃いねん。歳いって行くせに若作りしようとしてるのキツいわ〜。」

「男も知らないクソガキに言われたくないわ。笹木さん。」

笹木の肩をポンと叩き、引きつった笑顔で郡道先生が話しかける。

「アツ…。」

「私さ、放課後すぐ来てって言ったよね。」

「イヤ、アノ……」

笹木の顔色がみるみるうちに青ざめていく。

「これは誰のためでもない、あなたのためにやってることなのに。必要なかった？ 私オバサンらしいからお節介だったかしら？」

笹木の方に置いた手をギリギリと力を入れながら話す郡道先生。そして笹木は今にも泣きそうな顔をしていた。

「郡道先生、補習したいです……。いや、させてください。教えてください。」

「そっか。じゃあ一緒にやろうか。」

そのままズルズルと引きづられるように職員室に連行されて行った。最後まで郡道先生は笑顔のままだった。

「咲ちゃん大丈夫かな。」

一緒に帰るはずだったが連れてかれてしまったためしように一人で帰ることにしたひまわり。下校する生徒はほとんどいなくなり放課後の校舎は静まり返っていた。期末テストを2週間後に控えているため部活、生徒会等の諸活動も無くなりみんな真っ直ぐ帰ってしまうのだ。ひまわりはこれといって部活には入っておらず暇な時に友達の部活にお邪魔する程度だった。そもそもひまわりに部活をやっていられるほど

の時間がないのが原因であるが、社が働いている以上家事をやらざるを得ないためしようがないのであった。

「今日はなんにしようかな。」

いつも通り商店街へ向かいながら晩ごはんのメニューを考えていると後ろから声をかけられた。

「ねえ、お嬢ちゃん。」

振り返ると汚れたボロボロの服を着てオレンジのニット帽を深く被った髪もボサボサの見るからに不衛生な男が俯きながら立っていた。

「どうかしました…?」

恐る恐る話しかけるひまわり。すると男はスンスンと匂いを嗅ぐ仕草をし始める。ひまわりの体が瞬時に拒否反応を起こし後退りした。

「な、何してるんですか…?」

ひまわりは引きながらも話しかけるが男は何も反応しない。それどころか意味不明なことを言い始めた。

「やっぱり、あの匂いがする。」

男はバツと顔を上げてひまわりに飛びかかる。

「お前、あの吸血鬼匂いがする!」

ひまわりの両腕を鷲掴む男。その衝撃でニット帽が落ちるとそこには人ではない獣の顔があった。

「ヒツ……痛い！離して!!」

必死に振り払おうとするが驚きと恐怖でやられた身体に力が入らず震えた声で叫ぶことしかできなかった。獣の顔はだんだんと変わっていき狼のような耳と口があらわになった。その口には鋭く尖った牙が光っていた。

「アイツはどこにいる！あの憎たらしい吸血鬼の場所を言え！」

「きゅ、吸血……鬼？」

「とぼけるな！お前からアイツの匂いがする！吐かなけりや左腕から取ってくぞー！」

男はギリギリと腕を掴む力を強めていく。

「痛い……！折れ、る……！」

「早く言え！」

ヒュツ……

一瞬ひまわりの目には赤い炎が目の前を通った。その炎は男の顔面に直撃すると同時に大きく燃え上がった。

「ぎゃあああ!!!」

咄嗟に飛び上がり顔を纏った炎を払い始めたおかげでひまわりの腕は折られる前に

解放された。

「お前、何してんだ…。」

その声を聞いた途端、ひまわりの体にあつた恐怖はどこかへ消えていった。振り返れば黒く細い羽を広げ、透き通るくらい白い顔に赤く光る眼をした葛葉がいた。

「葛葉…。」

葛葉はひまわりを見るなり睨み殺すような眼光を落としひまわりのそばに寄つた。

「ごめん、姉ちゃん。」

「葛葉…、痛っ…。」

ひまわりは握り折られかけた左腕をぐつと抱える。それを見た葛葉が大丈夫だからとひまわりの左手を取り『ヒール』と唱えた。さつきまであつた腕の痛みが嘘だったかのように消えていった。

「ねえ…。」

ひまわりが何か尋ねかけた時、炎を払い終えた男が今度は葛葉に飛びかかる。あつ！つとひまわりが声を上げた時には葛葉が男の顔を片手で握り押さえていた。

「このまま燃やし尽くしてやるよ。」

顔を握る手に力を入れかけた時、ひまわりにその手を押さえられ離してしまった。その隙を突いて男は颯爽と逃げていった。

「姉ちゃん…、なんで…。」

「なんではこつちだよ！あのままじゃ葛葉、殺す気だったでしょ？」

「姉ちゃんに危害を加えたんだし、当たり前でしょ？」

「葛葉のその目、赤く光ってる時の目、怖いよ…。」

押さえた葛葉の腕に顔をうずめてそう言った。そのまま少し時間が経った。ひまわりが冷静になるまで葛葉は何も言わずにただ待っていた。

「ねえ、ちよつと付き合つてよ。」

「うん。」

何を考えていたのか葛葉には分からなかった。あんなことがあったのにひまわりの顔はほとんど変わっていないかった。ただ少し疲れているくらいで。連れてこられたのは商店街だった。いつものようにいろんな店の人からひまわりを呼ぶ声が聞こえてくる。

「今日、何が食べたい？」

「え、ああ…。そんな腹減ってないんだよね。」

「ひまもなんだよね。じゃドーラとパパの分多めに買つて行こうか。」

商店街の中心の方へ向かうひまわり。そこには他の店の倍くらい人がたくさんいた。店の看板には「惣菜屋」と書いてある。

「惣菜?」

「これはもう作つてあるやつなんだ。時間ない時とかなんかもう一品欲しい時によく買つていくんだけど、この時間だと値引きが始まるから人がすごいんだよね。」

「今日はこれ買つてく感じ?」

「そうだね。作つてあるとは言つてもなかなか美味いから侮れないよ。」

ひまわりは溢れ返る人の中に構わず入つて行つた。しばらくして大きな袋を持ったひまわりが人をかき分けて出てきた。

「随分買つたね。」

「残つたら明日の葛葉たちのお昼ご飯になるから。」

「なるほど。」

ひまわりが重そうに持つ袋を何も言わずに持つてあげる葛葉。

「あー! やつぱり付き合つてんじやん!」

その光景を偶然見てしまった笹木が2人を指差しながら大声を上げる。

「あれ咲ちゃん。補修は終わったの?」

「ちようどさつき終わつたんや! そんで帰りに寄り道してみたら2人でイチヤイチャしてるところ見てしまつたんや!」

「別にイチヤイチャなんかしてないよ。」

ひまわりが笑いながら笹木の言ってることを訂正する。

「しとるやろがい！ 2人で買物なんかしてき！」

「違うよ。」

笹木にそつと近づくとひまわり。

「じゃあなんなん！」

「葛葉はひまの弟なの。」

初めて他の人に弟として紹介された葛葉。そして初めて葛葉を弟として紹介したひまわり。笹木は嘘だと思ったがその堂々とした2人の姿に信じざるを得なかった。

「本当に言ってるの？」

「うん。これからもよろしくね、葛葉のこと。」

「いつから弟なの？」

「うーん、ドーラがきた日から？」

「ドーラ？」

「あ、そつか。まだ咲ちゃんには言ってなかったね。また今度ある時話すよ。」

「うん。」

お互い納得したように別れの挨拶をして戻ってきた。そのまま家に帰ろうとした時。

「葛葉。これ返す。」

笹木に呼ばれ振り向くと一昨日貸した傘を渡してきた。

「あ、ありがとうございます。」

「ん、ほな。」

用が済んだのか、パンダのパーカーのポケットに手を入れて鼻歌歌いながら商店街の反対側に歩いていった。やはり側から見ればカップルに見えるのだろうか。姉弟には見えないのだろうか。なんてことを思いながらも商店街の人たちにも聞かれてしまったため今更どうすることもできなかつた。

「帰ろっか。」

葛葉の袖を引いて商店街を出て行く。さつきまで人で賑わっていた商店街も2人を見るなり静かにざわめていた。なんとなく居心地が悪かつた。家までの道を半分ほど歩いていたが夕陽が照らす住宅街に反射する2人の足音と買い物袋が揺れる音、それが2人の沈黙を強調していた。笹木と別れてから一言も話さないひまわり。葛葉の前を歩いているためどんな顔をしているのかも分からなかつた。2人の間に開いた微妙な距離を縮めることなくひまわりの背中をただ見つめて歩いていった。

「ただいまー。」

「おかえりー。あれひまわりも一緒だったの。」

「ただいまドーラ。うん、さつきそこであつてね。買い物袋持つてもらっちゃつた。」

「そうだったのか。葛葉はどこにいったの？」

「あー、まあ散歩？」

いい加減な理由だったがドーラは納得してくれたようだ。ひまわりは買ってきたものをとりあえずキッチンに置いて二階へ上がっていった。それを見ていたドーラが仲直りできたのか聞いてきたが正直よくわかんなかった。それは仲直りできているのかも、ひまわりが何を思っているのかも。

身支度を整え夕飯の準備を始めると同時に社が帰ってきた。先に風呂に入ると言い真つ直ぐ風呂場へ向かっていった。

「今日は何作るんじゃ？」

「今日はね、色々あつて疲れちゃったからほとんど温めるだけなの。作るとすればお味噌汁くらいかな。」

「わしが手伝えることはあるか？」

「うん。これお願い。」

ドーラとひまわりが仲良く夕飯を作り始めて葛葉がテーブルの準備をする。しばらくして社が風呂から帰ってくると買ってきた惣菜を温めて運ぶ。全てが揃って食べ始めた。

「今日は惣菜の日か。」

「ひまがあんまりお腹減つてないから何も思いつかなかつたんだ。ごめんね。」

「でもここの惣菜は美味しいから大丈夫だ！」

「うん、このコロツケというのサクサクホクホクで美味しいな！」

「喜んでもらえて良かった。たまにはこんなのもいいでしょ。」

今日の惣菜は揚げ物だった。コロツケ、メンチカツ、唐揚げ、一口カツ、かぼちやコロツケ等々。油っぽいおかずに対してほうれん草とじゃがいもの味噌汁がとても美味しかった。葛葉もメンチとコロツケを一個ずつ食べ、先に片付けて風呂へ入った。

「ふう……」

夕方の一連でドツと疲れた体を温かい湯が包んで癒してくれる。逃したヤツはどこへいったのか。またひまわりに危害を加えに来るかもしれない。そんな不安がずっと残っていた。風呂を上がりリビングへ行くとみんな食べ終わってドーラと社が皿を洗って片付けていた。

「あれ、姉ちゃんは？」

「ひまわりなら部屋だな。次入るよう言ってきてくれる？」

「うん。おやすみ。」

「もう寝るのか？」

「まだ寝ないけど、あと部屋にいるからさ。」

「ああ。おやすみ。」

「おやすみ葛葉。」

2階へ上がりひまわりの部屋を訪ねる。

「姉ちゃん、上がったから風呂いいよ。」

遅れてうん。と返事が返ってきた。何か言おうとしたがうまく言葉が出てこなかった。自分の部屋に戻り今日の反省をする。守ると決めたひまわりを早速危険な目に合わせてしまった。今日襲ってきたアイツはなんだったのか、考えていると部屋の窓から葛葉宛の手紙が入ってきた。

「魔界郵便！誰からだ。」

差し出し名を見るとアレクサンドルと書いてあった。葛葉の家からの手紙だった。開いて見ると手紙が2枚は入っていた。1枚目の方は豚からの手紙で2枚目はアレクサンドル家の紋章で魔術式の封がしてあった。これができるのは家の当主のみ。父上からの手紙だった。まずは豚の方からの手紙を開いた。

「拝啓ラグーザ様。ワタシが魔界に戻って早一日が経過しますが何か大変なことか起きてませんよね。そんなことはさておき、強制送還させたカールですが、魔界中央収容所で移動中に暗殺されました。」

「なんだって……！」

「昨日学校で捕らえたカールが殺された？それじゃ目的がなんだったのか誰にも分からなくなってしまうたじゃないか。それにしてもあの重警備で特殊な機構で魔術が使えない所で暗殺されたなんて。」

「聞けた内容としては誰かに頼まれた、と言っていたそうです。レウルがそう言っていたと。わかつたのはこれだけです。もう少し調べてからそつちに戻ります。豚より。」と書かれていた。

カールが殺され、わかつたことは後ろに誰かいること。誰に頼まれたのか、それが次に調べなきやいけないことだ。豚からの手紙を閉じて・父上からの手紙を手取る。すると紋章が浮かび上がり手紙を持つ指を浅く傷つけ血を落とす。するとアレクサンドル家のものと認証され手紙が開いた。

「サーシャ。お前が人間と共に暮らしていることを豚君から聞いた。」

葛葉はスツと息を飲んだ。

「私は何も言わない。お前がやりたいこと、目標を持ってそこに居るのだろう。部屋でただ寝て過ごすだけのお前から成長する時だ。ただいつかはみに行きたいと思ってる。それと魔王様との会議の結果、我々アレクサンドル家は魔界御六家という魔王様直属の傘下になった。これからはそれなりの地位なるからくれぐれも行動には気をつけろ。」

父上は葛葉に対し何か変わる起点になればいいと思っ
ているらしく人間界にいることは悪く思っていないとのこと。
それより驚きなのがあの魔王様直属の家になったと
いうことだ。今の魔界のいち区画を任せられたと言っ
ても過言なくらいすごいことだ。

コンコン…

咄嗟に手紙を隠し返事をする。

「…入って良い？」

部屋をノックしたのはひまわりだった。葛葉は一瞬戸惑ったが中に入れることにした。ドアを開けると風呂上がりでパジャマ姿のひまわりが立っていた。

「どうぞ。」

「ん。」

部屋の真ん中あたりまで入るとそこで立ち止まった。

「これから聞きたいこと聞くから、そこで答えて。」

ドアを閉めひまわりの方を向く。

「全部答えるよ。」

ひまわりはすーっと息を吐いて問いかける。

「葛葉は人間なの？」

「違う。俺は吸血鬼だ。」

「あの日、倒れてたのは血が切れたから？」

「人間界に来るときに魔力を使いすぎて空から落ちたんだ。」

「ひまのお家に泊まってるのって、ひま達の血を吸うため？」

「それは違う！あつ、ごめん急に…。」

ひまわり達に危害を加えるためにいるんじゃない。これだけは勘違いされたくないからつい大声で否定してしまった。

「俺は吸血鬼だけど、血が苦手なんだ。こう言っても信じてくれるかわかんないけど、それでも姉ちゃんや父さん、母さん。それに周りの人には絶対危害は加えない。これは信じて欲しい。」

「それでも、もし血が欲しくて抑えられなくなったらひま達を襲うの？今日襲われた時みたいに…。」

ひまわりの肩が震えている。今日のことなんとも思っていないなんてことはなかった。怖かったから思い出さないようにしていたのだ。

「俺ら吸血鬼は普段みんな食べているような食事で十分な血は摂れてるんだ。過度な連続魔力消費、重度な怪我の回復とかすると足りなくなるくらい。」

「…本当に？」

ひまわりが少しずつ葛葉の方を向き始める。

「俺は、ひまわりさんに助けられた恩がある！この恩を返すために俺はここにいさせてもらってるんだ。俺にしかできないことでこの恩を返すって決めたんだ。」

葛葉の目がひまわり目を真っ直ぐ見つめる。その目にひまわりの心の中にあつた葛葉への不信感が信じる気持ちに変わった。その安堵からか、気付けば葛葉に抱きついた。

「……ひまわりさん……？」

「……ごめん、ちよつとこのままにさせて。」

いきなりの出来事に驚いた葛葉だったが抱きつくひまわりの肩と声が震えているのが分かった。そつと抱きしめる。

「ごめんね、ごめん。本当のことを話して嫌われるのが嫌だったんだ。それで、色々危険な目に遭わせちゃつたし、本当にごめん。」

ぎゅつと葛葉を強く抱きしめる。ひまわりの気が収まるまで抱きしめあつていた。

しばらくすると抱きしめる力が弱まった。葛葉は座ろうか。と言つて抱きしめていた手を離しそのままベットのの上に腰を下ろす。ひまわりは葛葉の左腕を離さないよう掴んでいた。

「さつきね、父上から手紙が届いてさ。俺の家が魔王様の直属の傘下に入れたんだ。」

「……魔王様なんて、ほんとにいるんだね。」

ひまわりが左腕に埋めた顔をちよこつとだけ出した。

「うん。てかやつと顔見せたね。」

「あつ。」

バツとまた顔を隠した。

「なんで隠すのさ。」

「…目腫れてるからやだ。」

「そんな事ないって。どれ見せてよ。」

ゆつくりと顔を上げるひまわり。

「うう…。」

「泣くくらい不安にさせてごめんね。」

険に溜まった涙をスツと拭う。するとまたひまわりが泣き出してしまった。ぐつと

ひまわりを胸に抱き寄せそのまま抱きしめる。

「ひまわりさんの中にある不安を全部今吐き出して。俺はここにいるから。」

それからどれくらいだろう。葛葉の胸の中で声にならない声を出しながら泣き続けるひまわり。泣き止むまでずっと抱きしめ続ける葛葉。

泣き止んだ頃には目の下を真っ赤にして葛葉に抱きついていて。泣き疲れたからかウトウトしだした。葛葉は抱きつくひまわりの手を優しく離し立ち上がる。するとお

もむろに羽を広げ、爪が鋭く伸びる。

「これが本当の俺。」

「本物なんだね。この羽。」

「姉ちゃん立って。」

「え?」

言われるがまま立ったひまわりの手をとってベランダから勢いよく飛び上がる。

「え、ええ!うわああ!!」

羽を一回羽ばたかせると一気に上空に着いた。

「どう?空は。」

「ちよつと!めっちゃ怖いって!」

浮いた足をバタバタさせて焦るひまわりを抱き抱える葛葉。

「ほら、これで大丈夫?」

「あつ、うん。ありがと:。」

そのまま夜の空を飛び回り街の電波塔に降りた。

「これが、葛葉が見れる景色なんだね。」

「俺がいるからここから飛び降りても助けられるよ。やってみる?」

「ほんとに助けてくれるよね?」

「大丈夫だつて。俺を信じてよ。どこにいたつて必ず助けるからさ。」

「…じゃあ、よろしく！」

ぼんつと塔の上から飛び降りる。

「うわああ！」

落ちながら見える夜景は普通じゃ見れない特別な景色だった。横じゃなく縦に流れるビルや車の光。とても綺麗だった。

「どう？綺麗でしょ。」

逆さまで目の前に現れる葛葉。

「うん。でももうそろそろ怖いよ？」

「じゃ戻ろつか。『レポート』。」

さっきまで落ちていってたのに一瞬で塔の上に戻っていた。

「あれ、あれ？」

「ね、大丈夫だったでしょ。」

「何したの？」

「これから話すよ。」

そういつてまたひまわりを抱き抱え空に飛び上がる。家までの道を遠回りしながら人間界にきた経緯、自分の素性、魔力、魔術についてなど大体のことを話した。細かく

言っても覚えられないくらい話したから必要に応じてその都度説明しようと思った。家に戻ってひまわりを下ろす。

「結構飛び回っちゃったな。」

「魔力大丈夫？」

「飛ぶくらいじゃほとんど減らないから大丈夫。」

「気になることがあるんだけどさ。」

「何？」

何かもじもじし出すひまわり。

「葛葉って寝る時逆さまに宙吊りになって寝るの？」

「寝ないね。それはこっちの世界で味付けされた吸血鬼の話だね。」

「そうなんだ。よかつた。」

「さすがにできなくもないけど途中で落ちる気しかないね。」

「そっか。じゃあさ。」

「うん。」

「今日ここで寝ていい？」

「は？」

葛葉の口から素のは？が出た。開いた口が塞がらないという言葉がびったりなほど

ポカンと口があきっぱだった。

「だからひまもここで寝るの。」

「な、なんで？」

「葛葉がひまを襲わないか証明するため。」

「姉ちゃん、自分でない言ってるか分かってんの？」

驚きを隠せないままひまわりの言ったことを再確認させる。

「うん。まさかひまを襲うかもしれないの？」

「いや！絶対ない！けど、色々問題があるからダメ！」

「なーんで！良いじゃん別に。」

「良くないって！良いから自分の部屋戻って！」

ひまわりは少し頬を膨らませ不満を露わにしながらジブの部屋に戻っていった。とおもったら、また顔を出して「次は何がなんでも葛葉の部屋で寝るからね！」と言って勢いよくドアを閉めていった。

「ひまわりさんらしいや。全く危なっかしい。それより、俺を信じてくれて良かった。」

葛葉の中にあつた大きな不安がすつきり消えてなくなつた。そんな気がした。その安心感からか急に疲れに襲われ、気を失つたように寝てしまった。

「ん…、あのまま寝ちったのか。」

気づけば朝になっていた。疲れのせいか体重い。

「（そんな疲れてたのか俺。人連れて飛ぶなんてなつれないことするもんじゃやないな。にしてもなんか寝苦しい…）」

何かおかしい。誰かに言つて助けをもらおう。そう思いベッドから出ようとする。ずるっ…

お腹の辺りで何かが動くのを感じた。恐る恐る布団をめくるとそこには自分の部屋に戻ったはずのひまわりがいた。

「…はあああああああ！！？！！？」

勢いよくベットから飛び起きて現状を確認する。部屋のドアは閉まっている。ひまわりはパジャマのまま。特に何かがあったわけではないらしい。

「なんで俺のベットのの中にいんだ！！？ちよつ、姉ちゃん起きろつて！」

何があつたのか確認するためにひまわりをゆすつて起こす。

「ん…、なに…？。もう朝…？」

「寝ぼけてないで起きろつて！そんでなんでここにいるのか説明してくれつて！」

再びゆらし始める葛葉。

「ん…、分かつたつて…、起きるから…。」

「また寝るきじやないだろうな？」

そう思いゆらす手を止めると、スヤアと寝始めた。葛葉は痺れを切らしひまわりの首筋に向かい軽く魔術を放つ。

『アイス』。

「ひゃうん!!」

葛葉の手から放たれた小さな氷の結晶はぐつすり眠るひまわりの首にヒットし、その感覚が一気にひまわりの脳へ送られる。さつきまで包まれていた眠気をすつきり飛ばし、一瞬でひまわりを起こさせた。

「…おはよう。」

「お、おはよう…。何したの？」

「氷で首筋冷やした。」

「めっちゃ目覚めた。」

「よかった。で、なんでここにいるの？」

「えつとく、それはね…。」

ひまわりが言いずらそうに話し始める。

「昨日自分の部屋に戻ってから今日あったこと思い出しちやつて全然寝れなくてさ。それで葛葉と話そうかなって部屋行ったら寝ちやつてたから、ついでに一緒に寝ようかな

くっつて。」

「途中まで良かったけど、最後でダメだわ。なんでベット入ってきちゃったの。ダメって言ったじゃん。」

「え、だつて寝たかつたんだもん。」

危機感がなさすぎる。さすがに。これは一回ガツンと言ったほうが良いと思った。

「危ないからダメだつて！姉ちゃんが思つてる以上に男つてのは危険なんだよ。何もないからなんて思つて自分を危険に晒すなよ！」

ビクツとひまわりの肩が動く。驚いた表情でこちらを見るひまわりだったが少し経つて口を開いた。

「でも、葛葉は違うでしょ？」

「……」

その声は震えていた。ひまわりからしてみれば俺が襲わないかという確認のためであつたということを思い出した。ただやり方がよくなかつただけ。ひまわりをまた不安にさせてしまった。

「俺は、しない。ただやり方がよくなかつただけ。今回のはダメって言ったのに入つてきちゃつたでしょ。それがダメだつたんだよ。」

「うん、ごめんなさい。」

「俺も。そこまで思ってるわけじゃないんだよ。ただ今後他の人にこういうことしちゃうダメだっていうのを言いたかったんだ。」

するとひまわりが。

「他の人にはしないよ絶対！こんなことできるのは葛葉だからだよ…。」

葛葉をいかに信頼しているか、それが伝わった。

「それなら良い。ごめんね、怒って。」

「ううん、ひまがダメって言われたのにやっちゃったのが悪いから。」

葛葉は少し考えて、ひまわりに告げる。

「今日。」

「え？」

「今日は良いよ。ここで寝ても。」

「いいの？」

「うん。それで分かってくれるなら。」

「やった！夜が楽しみ！」